



SUN KU - 真実の光

良い気質からなるシンプルな考察、多くの自主性、奥深さ、面白さ、そこから生まれる相互作用を見ることができるように、とても良いアイデアが生まれた。灰色の口バは塩を積んでいて、とても重かった；黒い口バはとても軽い荷物で、運の良さを自慢するスポンジを運び、道はとても荒れていた。灰色の口バは耐え切れず、大きな水たまりに落ち、荷物の半分が溶けてしまった。嫉妬に駆られた口バは、自分も同じ運命を辿ろうと水の中に身を投じた。

スポンジは水でびしょびしょになり、黒人は立ち上がることもほとんど不可能になった。

祖父の話

愛は虹のようなもので、常に存在するわけではないが、常に現れる！ ユートピア的カオス理論は、 $1=1+1=2:2=1$ 、愛の多因子の虹のユートピア的スパイラルは、最大エネルギーの実体の放射で終わり、太陽へと開花する！ すべては物事の見方から始まり、一つになるものもあれば、分かれるものもある。私の最初の記憶は、明るい日に夢中になって目を覚まし、暗闇から抜け出してコンステラ・コミュニティ全体に力とエネルギーを配るために、光のパワーで自分自身を準備する、という回想だけだ。もし自分が稲妻だったら？ ある日、私が雷だったら、破壊的で、恐ろしく、騒々しく、容赦ないだろうか。それとも、光り輝き、美しく、輝き、エネルギーッシュだろうか。それぞれの光線は人間のように異なる特徴を持ち、異なる行動様式を持ち、異なる光を放つ。ある日、それが光線であったとしても、少なくともそれはオリジナルなものでしょう。それぞれの光線には作用の形があり、人間と同じように、どんな瞬間にも、その作用は一瞬のうちに現れる。私たちは光線／ビーイングに作用し、その方向や行き先を変えることができる。ある日、私はコーランの信奉

者と信念と信仰について語り合ったことがある。この話を要約すると、結局サイコロを投げたのは誰だったのか、ということになる。しかし、この話とは別に、私は次のことを伝えたい。

それぞれのエネルギー／形態／行動でダイスを振る。
私は、変容者が現れ、現実を変容させる輝く力のバランスが生まれることを知っていた。活性化されたエネルギーと、満足を不満足に生きる人々が、自分の世界を彩るすべての色になるのだと。私はいつもとは違う現実の中で目覚め、この本を通して書く分野を探求することで、自分の存在を広げることになった。私は思考がどのように伝達されるかを考え、それを光とその力に例える。私たちは皆、さまざまな観点から思考し、従うべき流れがあり、魂が乱れる瞬間があり、その見方は必ずしも甘くなく、エネルギーは拡大していく。不祥事で悩む心は永続し、一致団結した声は多くの声よりも大きく響く。言葉は表現芸術であり、この瞬間からインスピレーションが生まれる。心臓の鼓動には独自のリズムがあり、それが血管を通して広がっていく。抑圧は静かに行われる。すべてのものにはそのqがあるからだ。私たちは皆、悪について考え、時には静かにさせられる。「しかし、私たちは皆考える」。記憶は常にあるわけではないし、悪いことだから憎しみを実践するなど言いたい。私たちは皆、表現の自由を持っているが、全ての人々が適切なタイミングでそれを持っているわけではない。バランスとは日常のサイ

クルであり、神経質であることはアンバランスである。人はコメントを好む。誰もが純粹さを持ち、普遍的な愛が思いやりを生み出す。太陽はエネルギーの源だ。異常なのは何も起こらないことで、誰もが忘れたいときに忘れる。誰もが不公平にさらされるからだ。愛は喜びの源であり、いつも孤独で守られている。

考えることを好まない人々にとって、意識は私たちを啓発するランタンなのだ。

誰にでも悪癖はあるし、恐怖を感じることもある。私は誰のために書いているわけでもないし、誰にでも思い出したくないことがあるものだ。でも、悲しいことがあったときに、それを認め、隠し事をしないことはいいことだと思う。なぜなら、人は誰しも弱さを持っているからだ。相手に対する感情は常にあるが、「誰も誰のものでもない」のだから、誰もが輝く権利を持っている。友情は常に、もう一人の自分との友情の良いスタートとなる。自分がポジティブだと思う直感に従ってください。私たちは皆愛されることができ、愛は光の発生装置である。私たちが愛されるとき、私たちはこの気持ちを尊重し、互いに愛し合い、出生率を高めなければならない。

「年寄りが持っているのは知恵ではなく、慎重さである！誰もが善と悪を知っているのだろうか？ 私たちは、善であるか悪であるか、狂気はいくつかの正気であるか、本当に知識が重要であることを決定することを手に持っている！！？ 可能ならば、人生の学校を卒業したい。私はあなたのために、私のために、そして私を好きでいてくれる人たちのために自

分を変える。進化のための変化。このケーブルは、不安や電気、希望や新しい驚きに満ちた活気に満ちた電流を体に流し、私たちの動きを静止させるが、加速された不安な思考を残す。動きが麻痺し、緊張が高まり、それが私たちを現実にはめ込み、コントロールされた慎重な動きで、私たちは互いにつながる思考のはしごを降りていく。この思考の梯子の上で、私たちは行動、顔、動きを分類する。

人生という瞬間の下降と上昇に縁取られ、エスカレーターは止まることなくあなたを21世紀の現実の狂気、エネルギー、魔法、幻想、すべてが調和しているように見えるが、階段には気をつけよう、すべての人が人生のエスカレーターを上るわけではない。努力と忍耐が基本であり、怪我や立ち止まることなく、犠牲の精神で上昇すれば、思考する存在の光へと導いてくれる。道を譲る可能性のある外的な力のバランスを取ることなく、その階段は堅固で、希望のケーブルによって供給され、最も重要な電気ケーブルである生命のサイクル、地球を養うエネルギーに到達する。私の電光掲示板は、普遍的な電流の位置と運命を指揮するものだった。それは地上の自然の曖昧な底を照らす太陽の光だった。何が起こったかということ、私は夜明けに、日暮れとともに訪れる優しい悲しみを感じ、私は生き、蘇り、生まれ変わったのだ。私は彼、力強い太陽（サン）*、地面に雫のように降り注ぐ放射源、この生命と光輝の源において。私の灯台、それは絶え間なく、異常の動きを回転するように探し求める。私は最初の感電を感じ始め、騒がしい神経が心臓の感電で点滅する。電磁波が行き交い、思考が波の輪をうねる。電流が私の体を走り、私を波の回路に巻き込む。電気インパ

ルスが落ちてきて、私は電氣的に循環するインパルスに揺さぶられる。

衝動的に発見された真実は明るく輝き、ブラックアウトが現れ、光り輝く感覚に苛まれた声は沈黙し、ロウソクは溶けたロウの蓄積された痛みを照らす。電気ドアは静かに鳴って開くが、開く暇もなく閉まる。電気チェーンソーが憎しみの躍動する暗黒の根で切断する。記憶を消し去る光り輝く煙の中で感電死し、電磁気の乱れが心の中で煮えたぎる、乱れきった無限の電磁気。それらは心を麻痺させる電光のように伸び、閃光の光、電光の黒を所有し、断続的な光が途切れることのない電流の私の通路を悩ます。不透明な光は、暗い光の中で奇跡的な存在を照らす。電線はエネルギーに満ちた私の振動体の中を走っている。私は10番目の電気回路に向かって進み、停電がある、暗闇の中でも壊れない電気クラッシュがあり、それはエクスタシーと感覚の言葉に電気が落ちた。光り輝く斬撃と光り輝く響き、光り輝く光は壊れゆく声を掴み、煌めく曖昧さは垣間見える眼差しで歩く存在を曖昧にする。蛍光があり、それらは四方八方、雷のように咲き乱れ、落ちていく。眩しさ」とその刺すような稲妻の閃光が、感覚と視線の他者の喜びを曖昧にする。白熱とクロスアークがあなたの魂の奥底で原子にしがみつき、ダイナミックで白熱した衝撃を与える。私の存在の鋭い光の

中で、そっと丸くなり、稲妻のようにそっと喜ぶ私の
黄昏の不在の中で、強く決然とした光を求める感情の
不調和を私に打ち付ける色合いのように。脅迫的な光
がある、彼らはその光を脅迫する。

私たちを苦しめ、危険を予感させる療養者？ 存在感のある光がある。それは、ほのぼのとしたひとときに寄り添い、それに立ち向かうことができず、秘密裏に威圧するような光だ。加速する神経を遮断する強烈な赤い光がある。インパルスを持たない心の鋭く汚染された衝撃が広がり、伴走者の光、伴走者の光によって与えられることも感じることもないものを照らす。雷が軋み、快樂に飢えたノイズを砕く。強力な光は、異質な生命を声による指導に咎める。強力で裂け目のような光線は、それが影を落とす薄暗い光を、結べない絆を断ち切るように、大量のビームを貫く意識を。光り輝く宇宙、魂の忘却を癒す浸透した深遠な宇宙で、黒い光の霧を強烈に照らす。稲妻は熱を帯び、暗くなり、動かなくなり、静かになるが、軋み、その時のノイズは息をのむほど圧倒的で、他の光やイルミネーション、あるいは単純に通り過ぎるだけだが、ため息の印象的な暗闇の中で、生きて存在することの怒りを伝染させ、最も電撃的な沈黙を破る。雄弁なうめき声によってあなたの意識を消し去り、この世に稲妻が落ちた瞬間に静止する機会という無視された行動を促す稲妻。私は弟と撮った写真（今日、私の部屋に飾ってある）で思い出し、後で述べる地獄のウエハースを食べた

場所にいる。その時、光の灰、一撃で獰猛で強力なアイロンの熱であなたに印をつけるその灰は、あなたが忘れない過去と遍在する未来の光の灰に汚染されている。その瞬間の衝動は、あなたを切り裂き、ゆっくりと、裂け目を入れながら、噴出するように広がっていく。

あなたを支配し、失禁した言葉の記憶に溺れ、光への
渇きを注ぐ光の井戸にあなたを投げ込む。燃え盛るのは
磁性体の燃え盛る灰であり、男らしく男らしいもの
、あるいは女性的で官能的なもの、どちらか一方に道
を譲ることのない二重人格の侮辱である。これらの光
の灰は、陰鬱で軽薄なものを暖め、その暖かさの中に
、雨を貪り、大陸と時を超えた空間に広がる雨の守護
を持ち、私たちが侵略し、私たちに贅沢な洞察を与え
、数え切れないほどの憂鬱な快樂を与えてくれる。座
りっぱなしの快樂の化学反応の不安は、痂皮ではなく
、素朴な顔に刻み込まれている。感じること、存在す
ることの感情に異質なそれは、奇跡的な輝きを感じ、
過剰によって感じられる収縮を和らげ、過剰は私たち
を別の次元へと向かわせ、それは発展し、悪徳を糧と
し、後退することはなく、否定の狂った髪の中で振動
したり衝突したりすることもない。催眠術のような光
と手探りは、欲望への屈服を予感させ、私たちが躍動
させ、欲望の存在を信じさせる。それは私たちが、思
考において等しく、反応において異なる新たな挑戦へ
と導くものであり、私たちが純粹に「手に入れたい」
、「できるようにになりたい」、「その糧になりたい」
という願望をもってそれに立ち向かい、熱せられたと

きに一体化する粘土の破片のように追いつてられないことのないような、時として計り知れない反応である。

私の2つ目の記憶は、正確にはオーバーオールを着た写真で、今日私の部屋にある最初の写真と同じ服を着ている。

車の上のアソレイラ.....祖母の家の階段で転んだのを覚えている。入り口にはハエよけのリボンがかけてあった。ロバや馬がいつも通り過ぎるので、私は祖母の土地をハエの土地と呼んでいたのを覚えている。私の第二の記憶が生まれた場所で青い車を所有していた父は、ダットサンだった。私の "おじいさん" はよく話をしてくれた。彼によると、私の祖母と従わないロバとの間の話で、おばあさんがロバの耳を噛んだのだという。今日、あなたが読もうとしている話からすると、歯は抜けていない。祖母の乳房を見たのは一度だけで、それは両親のベッドの下の鏡の中だった。悪夢にうなされるまでは、子供の頃の最高のジョークだった、結局は死であり、死ぬ前、あるいは不滅であるこの光は、動きから疎外された身体の間で分断され、照らしやすい2つの道の間を揺れ動くが、生命はなく、私たちを養い、成長させるシステムの催眠の苦味と狼狽の中で存続している。意識的なそれはあまりに強烈なため、消滅し、存在さえも消し去られる。サイケデリックなループは、勇敢な雷鳴のノイズの中で絡み合い、私たちがこのサイケデリックな雷鳴に包まれているという事実から来る異常を支え、増強する。まあ、ここではすべてが首尾一貫したままであり、効力も秤量もなく

、降伏は異常のための口実でしかないだろう。黒い雷は檻に閉じ込められ、理性の吸収の最も奇妙で深い呻き声を発するが、それは自らを消し去り、軋ませ、最小限の秘密もなく自らを脱臼させるからである。

淀んだ斜めの色に染まった偏見、創造する気がない、あるいは単なる甘え。思考の断片の精神に染まり、断片化された人々は皆、目を掻く時や瞬きする時のように私たちに苛立たせる妨害から離れた別の世界を想像している。この、別の動きから疎外された動きは、心を揺さぶり、粉碎する。雷はサイケデリックであり、霊が顕在化することなく、霊が存在しないために、霊を追い払う。それはボギーマンのような噂と強迫観念の並行現実であり、ここでは、実際には存在しないにもかかわらず、奇怪な人格と認知された存在を餌にする者はいない。それゆえ、非現実的なものはすべて時間を超越した歴史を持っているが、何か、恐怖を持っている。恐怖は私たちに5次元の地平に追いやり、多角形で直線的だが、どんな痕跡にも影響されず、従順ですらない。アイデアは、抽象的な理性のフィラメントの中で開花したり成長したりするのではなく、すでに見た文字の衝動であり、装飾であり、模倣の動きであり、瞬間への適応である。計算がなければ、それは現実のものであり、予測不可能である。往年の頭脳は、すでにイエローページに色あせ、書物愛好家たちに食い尽くされ、何の忍耐もなく、記憶や作られたもの、測定されたものの陳腐化を威嚇している。測定器に困

まれたラベリング・アベクシンは自らを祝福し、アビシニアの雷鳴は笑う。過去の光の中で生きる者たちは励まされ、その彼方で死にゆく者たちは侵略する。

天体は、起きていること、即座に起きていることが顕著である。しかし、これらはすべて技術的な問題であり、多かれ少なかれ強烈なものであるが、過去とは相容れない、前の瞬間とも相容れないエネルギー放射である。それゆえ、有害な放射線を発する記憶は、しかし、どんな瞬間、どんな衝動、どんな瞬間にも、人が燃やしたいと願うどんな思考をも鈍らせることはない。なぜなら、過去は現在、瞬間、衝動、一瞬、数分の一と交差するが、それに影響を与えることはないからだ、それは単純な視線を通して、過去の光、多かれ少なかれ強烈な光、過去の人生の汗を伝えるが、仮面なしで、一瞬のうちに、過去の光の周りを単に這いずり回り、何もしがみつからないものとは異なり、秒単位で生きている、残っている衝動の動きの鎖につながっていない原理を導かない。まあ、これは汚染、放射能と同義語であり、ノーサンキューである！しかし、誰も他の誰よりも優れているわけではなく、それは本当に闘争の問題なのである。実際のところ、光はあまりない。あるのは、残された存在の病巣と、目に見えないものを客観化する均衡のとれた方法だけだ。だから、それは存在しないし、現実でもない。それは、私たちが意識を持つことを助ける何かの果実なのだ。しかし

、意識とは一体何なのか？ 意識とは一体何なのか？ こ
こに、以下のような実体化されていない障壁がある。

それがどのような意味を持つにせよ、どのように理解されるにせよ、私たちは皆、その瞬間に向かって
いる。先入観で障壁を設け、乗り越えられない流れ
だと主張するこのことは、実際には障壁など存在し
ない！意識に常に存在する無意識の欲望と、私たち
だけのためにとっておく欲望との間に障壁がない、
つまり実際には空虚であるため、真実には私たちに
影響を与えない他の靈魂の渇き、この同じ幻想の流
れの中で私たちは皆生きている。私たちが喜んで適
合するその清冽な光ほど自然なものはない。適合、
逆境、葛藤、単なる甘えは、態度や意識的な問題を
蓄積する役割を果たすが、自然であるがゆえにそれ
ほど深くはない。自然なものと超越的なものとの間
には、わずかな衝突もない。だから、普通のものが
私たちを巻き込み、私たちを安心させ、穏やかにさ
せる。核で管理されたエネルギーは、強力なソース
が私たちを照射し、私たちを変容させ、心理的な突
然変異を起こす。この生き生きとした光は、期待に
満ちた存在の中で成長し、現実には苦しむことなく
、孔雀のように、理解した衝動を浸透させ、私たち
を行動するかしないかの行為、衝動、このダイナミ
ックで清冽な爆発へと導く。それゆえ、私たちはそ

の強さの最大指数を利用するのであり、それは変容
の力であるため、バランスを崩すことが不可能な柱
を正し、崩す普通のエージェントになる。そして、
次のようなものほど強いものはない。

その変化は、私たちを高め、汚れから守ってくれるものだった。最初の日には泣いて幼稚園に行きたくなかったことを覚えているが、その後は主に、友達と遊ぶことを楽しんだ。子供の頃、高熱が出ると悪夢を見るのが普通だった。鎖でつかまれ、燃え盛る釜の中に落とされる悪夢だ。しかし、錯乱状態になると、地獄に落ちるのかと思ったが、突然目が覚め、最後のカウントダウンが行われる中で救われた。兄がヒーターに手をかけると、兄は一番冷たいところ、兄は一番熱いところに手をかける。- もし続けなければ、何かが私たちを立ち止まらせるだろう。しかし、それが感情、感覚、刺激を展開し、発生させる行動であるなら、なぜ立ち止まるのだろうか。なぜネガティブなエネルギーが私たちを麻痺させるのだろうか。まるで答えのない子供のように、勇気を持って、友よ！ 私たちは皆、信仰を持ち、私はfezadaを持っている。そこから、欲望と全知全能と現在の欲望の疑念が残るが、暗示と欺瞞のハーブのように、幻覚的なエコーでサイレンの音を送信する。沈黙は行動であり、甘えでもコントロールの欠如でもない。社交的な沈黙は無言であるが、コントロールできない人にとっては完璧な武器となる、

衝動性と渴きを渴望する者、自分自身をコントロールできない者。落ち着いて耳を傾けなさい、自分の中の静寂に耳を傾けなさい。

一度だけ、鳥を捕まえてアイロン台に紐を結び、パンと水を与えたことがある…。そしてその日、私の生きたおもちゃは死んだ。初めてキャッチボールをしたとき、兄が私の後ろにいて、私をその「角」に急がせ、そこで頭にひびが入り、白っぽい組織まで見えた。私は丘を4kmほど歩いてケンタッキーを吸いに行った。私が初めて自転車でのエキシビジョニズムを実践したのは、兄とのことだった。ほぼ同時に、私は妊娠した雌犬に蹴られ、その後、後に私の友人となり、村一番のクレイジーな兄を持つ小さな泥棒に復讐するため、兄とビー玉の窃盗に関わった。この友人は私の誕生日には招待されなかったが、人生で最初で唯一のレゴをプレゼントしてくれた。第1聖体拝領の数日前、私は友人と社会センターへ行き、罪のウエハースを盗んだ。それが始まりだった。それから、かくれんぼをするようになり、そうやって母から親友を隠し、家に一人にして、後で彼が怖がっているのを知って、私たちを呼んでドアを開けた。友達と自転車や車やビー玉で遊び、冒険が好きだった……。ある日、私たちは聖

人の日にジャネイラス（ポルトガルの伝統的な歌）を
歌いに行き、お金をもらってすぐに使った。

学校の運動場は工事中で砂と穴だらけだったが、思い切って外に出てみた。教室に着いて、初めてそんな大胆なことをすると「殴られる」ところだったが、先生に殴られる前にあえて手を離した。2度目は生徒の前で許してもらい、そのふりをした。小学4年生の時、私はすでにクラスメートに父のコレクションの表紙を売っていた。母が私と父と弟を連れて行った最初の魔女を覚えている。私は魔女が彼らの性器を触っているのを見たが、父はあえて触らなかった。私はいとこと弟と一緒にクリスマスを過ごし、弟は最初のクリスマスにピンク・フロイドのLPをもらった。1986年5月、freixo de espada à cintaの教会で1回目の聖体拝領を思い出すために、きつい靴を履いて歩いた。友人や知人を残してエスターレハへ旅立つ時が来たが、4年生になる少し前に旅立つことができたので、なんとかみんなに自分の旅立ちを隠すことができた。エスターリャの自治体に着くと、私はパルディリョに住むことになり、そこに数カ月滞在した。ここで私は日常生活を始めた。当時は、今で言ういじめの被害者であり、それを恐れていた。家から学校までバスで移動するときでさえ、それを恐れていた。「スープを濡らす」趣味を持つ者がいたのだ！ 覚えている最初の仕事は、父の車を洗車し、

タイプライターで請求書を書くことだった。私は最低年齢を満たしていなかったため、保護者の署名入りの特別許可書、つまりc+sアバンカ校の5年生になるための責任条項をもらって5年生になった。私は

トイレットペーパーを使い、タバコを吸うだけだった。銀行強盗を楽しむために、世界全体が止まってくればいいのにとさえ思ったものだ。しかしその年、私は初めて卒業証書を手にした。そこには、1988/89年度のスクールクロスに参加し、15^oの成績を収めたと書かれていた。本格的にタバコを吸い始めると、自転車のブレーキなしで歩き、靴底を使い果たした。近所のエスターレハで一番の居酒屋には巨大なsgを借りたので、早朝はビュッフェを好み、食堂では食べなかった。私が最初に参列した葬儀は、羽を切り落とされたかわいそうなインコの葬儀だった。庭で遊んでいて、とげのある木に登ったとき、地面に飛び降り、インコをつぶしてしまった！ 私はその動物を失ったことで泣きながら眠りにつき、モザイク画を集めてそこに埋葬した。しかし翌日、猫がそれを取りに来た！ その結果、クリスマスプレゼントが欲しいと言っていた犬が私の家の玄関で野良犬として発見され、その「てこ」を迎え入れたのだが、結局その「てこ」は狙った猫を襲うように指示され、私の「てこ」は猫を殺してしまった。興味本位でライターに石をぶつけて破裂させたこともある。

社会人になりたての頃、勤め先のパン屋で、

なんともふざけた楽しみ方をしていた……。新聞をトイレに持って行って読み、タバコを1、2本吸ったものだが、当時は兄と義姉に捕まらないようにするため、怖くて車の窓からタバコの小包を投げ捨てていた。私はシャドウウルフのような体験をした。保護された。シャドウ・ウルフは化学物質と不可欠な水で器用さを養う。

彼自身の「影」の純粹さの中で、彼は冒険のために飛び込み、漫画のような着地をした。オオカミとして彼は守られていたが、態度だけで、見かけの孤独に没頭していた。今日、私はcaricuaooオオカミとして書き、彼の世界に直面し、それを解釈する。独立した友人は、私が卒業したcaricuaooの胚は、若い忠実な、すべての上に正直な大胆不敵な性質の血を持っている人生の真の初心者の彼の野生が、慈善の性質なしで生きていない、その本質で激しいが、忠実な友人と彼の仲間と友人を尊重する。したがって、忠実な旅の仲間と共犯は、常に愛情と沈黙で解釈した。私は彼と共に長く暮らし、戯画化された "通り "や会社の影を知っている。しかし、私はオオカミの中に勇気を見たし、彼は自由に関して無言の親友と法令との絆を確立した。オオカミが持っていたものといえば、それは自由だった！そして自由！シャドウ・ウルフは、その在り方において人外のエネルギーを放っていた。遺伝子の本質から独立した野生の吠え声で。私は、それぞれのスピリチュアルな鱈を分かち合うことにした。一人で、ロボと一緒に夕飯を食べ、あるいはシャドウウルフを戯画化し、一枚の皿で結ばれた自由な友愛のうちに、それぞれの飲み物も分かち合うことにした。私たちは一人なの？ も

ちろんだ！自然が私たちが形作るように、私たちは自由に考えることができる。今年のクリスマスに私にプレゼントしてくれたオオカミのアニメだが、生来の遺伝的環境によって野生化した彼は、染色体に引っ張られ、彼自身の自然の純粋さの自由な状態の感覚に引き込まれる。生き方については謎めいているが、生きることへの渴望に駆られ、孤独な一面を楽しみながらも、いかなる制限や押しつけからも自由である。私とオオカミの影は友人であり、他者を強制する型破りな行動様式が特徴である。

母なる自然の手によって自由にされ、私たちは成長し、彼らが私たちに浸透させたものを誘発する。ハバナ・クラブは、革命への渴望と同じ狂気の本質にある。

私は若い頃、祖母のスルクチュと呼んでいた。ある日、ボール遊びをしていたテコがジャンプした。テコは低くて2メートルの高さから落ちたので、彼には30センチに見えたが、私は両親を呼びに走った。そしてドナシアーノ小学校の6年生になった。ここで、私の青春時代を彩ることになる10代の大きな情熱に出会った。父の愛人を10分以上見つめながら、もし彼女が少しでも物音を立てたら、私は何か問題を起こすだろうと思った。

私はいつも兄のことが好きだったが、私がパジャマ姿でエスターリャ市パルディリヨの通りを逃げ回り、家の裏の茂みの近くに行き着いたとき、兄は私を殴って父の身元を傷つけたことがある。顔に跡がついたので、いつもの日曜日の外出には化粧をしなければならなかったほどだ。ブレーキなしで乗り、ブレーキをかけるための靴もすり減らし、祖父からもらったタイヤなしのリムだけの自転車を量り売りして300ドル儲けた。この学校では、数学と手工芸の2つの成績がマイナスになった。当然、社会とその習慣に巻き込まれ

、 1989年、私は以下のことを始めた。

サッカー選手として、私はストライカーとしてスタートし、長いキャリアの中で3ゴール中1ゴールを決めたが、それはオバレンセとのトレーニングマッチでのことだった。その後、成長するにつれ、センターフォワードのポジションに戻り、左ウイング、右ミッドフィルダー、センターミッドフィルダーとポジションを変え、セントラルとリベロのポジションでディフェンスを務めるようになった。キャリアの最後には、私は悪名高いアンチフェアプレーのアスリートとして知られるようになったが、チームのキャプテンになってセンター・ミッドフィルダーとしてプレーすることを監督に願い出た日に決めた2点目のゴールは、今でも忘れられない。ピッチ上での動きに勝つために、私はサッカーの試合にピンを持っていこうと考えた。

1990/91年、私はエスターレハ中等学校の7年生に在籍していたが、反抗的で、ある日教室でオナニーをしたというエピソードを伝え、歴史の先生から愛国ミサイルの持ち主というあだ名をつけられた。一番損をしたのはポルトガル語で、学校生活で最初で唯一のものだったからだ。私は5年生まで在籍したアバンカの学校に戻ることにした。1991/92年度以降、私は同級生の間で「エイズ」と呼ばれるよう

になり、素行が悪いという評判まで立つようになったが、学校の成功のおかげでその年度を過ごすことができた。その頃、エスターレハからアバンカに来た理由を聞かれたとき、私はエスターレハの学校を退学になったと答えた。低密度のフロッピーディスクに穴をあけて容量を2倍にしたことがある

エスターレハからアバンカまで "自転車" で教室に通い、わざとオバールに行ってスーパーからガムやお菓子を盗んでいた。私のキャリアで最高の試合は、直接対決の後のベイラマール戦だった。minete "と呼ばれる友人のバターサンドにハエを入れたり、初めて見たポルノ映画に驚かされたり、ある女性はチンコとおっぱいを同時に持っていて考えさせられたり、別の女性はヘビやウナギ、父のシーン...。エスターリャとアバンカを往復する間に、CPパスを持っていたが、タバコ中毒が悪化し始めたので、パスを買う代わりに...タバコの小銭を稼ぐためにヒッチハイクをするようになり、パン屋でライ麦を半分食べ、同僚と一緒に1リットルのビールを飲むようになった。祖父の家で圧力銃の弾を撃ったら、鉛が跳ね返って私に当たりそうになった。誕生日パーティーでチューインガムを燃やしたら真っ黒になって、みんなにハシシだと思われたこともある。トレーニングに行く前に友達を家に呼び、父からシャンパンのボトルを盗んでトレーニング前に飲んでしたが、何度か追い出された。ある日、その友人の一人が酔っぱらって入院することになった。彼の父親が私の父に電話して文句を言ったこともあった。サッカークラブでは、新しい才能を求めてアヴェイロの代表チー

ムと敵対する特別トレーニングがあった。私は手ごたえのあるトレーニングを受け、アヴェイロ選抜のトレーニングに参加することになった。私はストライカーとして、ピッチの左サイドでプレーしていた。

その後、FCPortoに移籍した。1992年7月14日（火）、日刊アヴェイロが報じたように、アヴェイロ、2-レイリア、1 "s.ハシントスポーツコンプレックスのフィールドでの試合。「ロッカールームから戻ると、アヴェイロのチームは新たな決意を持ってフィールドに入った。レイリエンスが優勢だった前半とは異なり、アヴェイロは試合の主導権を握り、相手の守備をうまく突いて、結果を「ボルテージ・アップ」させた。フィリペ・モウラが弧を描いてゴール下にシュートを決め、同点に追いついた」。その試合では自分が何をしているのかさえ分からなかった。ボールをキャッチできなくなるまでたくさん走ったのを覚えている。それはわからない。1992年から93年にかけて、私はc+sアバンカ校の8年生になった。軍学校に行ったとよく友人に話していたし、フランス語のサポートクラスでは便座シートを頭に乘せて「私は便座さんだ」と言って中に入っていたし、最初の抑留まで父の目を直視する勇気はなかったし、サッカーの練習が終わって家に帰る前によくハーブを噛んでいたし、殴られたのは最初で最後だった。練習でビギナーズでプレーしたとき、「1本取った」と殴って、「もっと取るから外で待ってろ」と言っていて待っていた……。私の頭も

彼は "Pardilhó "というニックネームで呼ばれていた。屋根裏部屋に初めてのディスコがあり、私はそれを「クー*」と呼んでいた。天窗から建物のてっぺんまで登り、屋根の上に毛布を敷いたこともあった。友人と一緒にウールを何度も吸ったし、友人のヌノと一緒に煙突近くの限界ギリギリまで登ったら、フクロウが出てきてバランスを崩し、屋根から落ちそうになった。怒り狂った青い光線は、偏見や不寛容の汚れた毛穴の中に芽生えるエネルギーで、私の存在を侵食する。すべての存在によって生み出される光は、無邪気な人工物で遠回しに表現されないようにするのが難しい、恥知らずな人工物で巻き上げられる。このレーザー光線は、目に見えないもの、知覚できないものにも浸透し、目に見えない。それは先見者であり、先見者自身にとって異質な前提や交差点におけるマスターライトである。知覚できず無害なそれは、そのビームを通して、自らの毒と解毒剤に毒された思考や先入観の吸引を引き起こす。屋根裏の光、その煙は、方向と行動のない頭の中でやり残した記憶のぼろ布に覆われた心の光を貫き、行動、そのモーターは、遅々としてまとまらない心の必死の思考の大群を冷却する。その瞬間の無為さを突き抜け、興奮し、脳を刺激し、電氣的な刺激を放

浪する光の中に分散させる。それは、催眠術をかけ、麻痺させた身体の塊の中で、まるで脈絡のない言葉の韻の引き金のように強まる。それらの高尚な光は、どんな頭脳の先端工学にも入り込む。"ある人は小さな猿を持ち、他の人はただの屋根裏部屋を持つ！「メインエントランスを覆い隠す他の光、記憶、思考、大義名分はないが多くの人生を生きた屋根裏部屋に入り込みたいものだ。

思い出。永遠に心を照らす思い出は、胸の中で開かれたり閉じられたりする…。私はよくVHSのカセットを買ってもらったが、払うお金がなく、家賃は時間差で広がり、借金は増える一方で、借金のことを考えて眠ることはほとんどなかった。カセットは何カ月も溜めていたよ。1993年、自分のお金を持ちたいと思い始めた私は、誘われるままにゲームセンターで働くことにした。当時、私は15歳で、その場所の秩序を保ち、16歳未満の入店を禁止していたので、すでに多くの権限を持っていた。このとき、私は初めてハシシに触れ、以後17年間にわたってハシシを消費することになった。このような環境の中で、私は他の現実と接触するようになったが、ヘロインやコカインの使用は否定し、常に拒否していた。生涯を通じて、もしやっただとしても、それは意図的でも故意でもなかったし、「貶められた」かもしれないが、使用したことはない。私は消費に対する不適切な態度を持っていたし、1993年/1994年には9年生の最終選考のための学年末パーティーの司会者として、すでに有名な"アーティスト"だった。

ジェネレーター、ラブ・ジェネレーター、またはラブ・ジェネレーターは、この非仮想的な肉欲、そしてこの透明で渴いたキスの感情的なもつれを養うものであ

り、感情的で電氣的な絆のエネルギーの開発に不可欠なものである。このジェネレーターは、朝食や夕食、日常生活のエネルギーを供給する水の摂取のように、日々の表象の中に隠された顔を持つエゴや人格を養う。仮面や涙ぐましい考えなしに、私たちは現実の愛のエネルギーに、あるいは、決して切断されることのないケーブル、腐敗することのない、しかし真実のエネルギーによって供給される、人が生きている愛と孤独の貫通と代表的なルックスの電撃的で切断的なエネルギーの愛に適合する！常に欲望に渴き、電撃的な視線を放つ。

単調な日々や、この電気媒体では何も表現しない斜めの顔によって生み出された忍耐、それらは緩んだ糸である。現実の生得的で奔放なモーターの想像力の中に飛び込もう。運動生活、運動、つまり、存在することと存在しないことのコンセンサスの現実の接触は不可欠だが、他の現実からは疎外されており、意識の欲求にはほとんど気づかれないが、それはそこにある！それは即座の機会の意味で常にそこに存在し、それゆえ手段は、手段と利用可能な資源の生成の愛の思考において滑りやすいものでないとしても、水っぽいものであることはできない。生成の愛については、それは常に接続され、このまさに見下ろす者の存在と仮想的で制御されていない他の手段を探している、それは次に、それが生成する喜びから自分自身を疎外することはできず、あなたが常に押し殺したいと思っていた魂の塊のそれらの常に存在する顔の中で増殖する。エネルギーは一つであり、その満足感において多文化的であり、満足感は様々な現実を発展させる。光り輝くドラゴンは、私たちに照らし、私たちに日々活性化させるこの電流は、私たちに力を与え、輝きながら歩く存在の模倣を与えてくれる！歩くこと、その中に光の力、あるいは二元的で抑圧的な現実に向かう病める抑

圧の力があるからだ。潜在意識に浸透し、否定主義的な批判的人格の深い苦痛を軽減する、この否定的な極の流れに落ち込まず、自分自身の精神を養う化学的・反化学的回路の肯定性と超越的な現実を養うのだ。

革新と達成、達成は個人的なものであり、快樂を求めない必死の競争の糧として譲渡できないが、思考とその伝達の波に心を引きずり込む。思考の伝達は現実のものであり、誰も否定できない回路を発達させる。これらの回路は、抑圧された感覚や快樂という時間を超越した空気の中に広がる電流を持っている。したがって、これらのインパルスは私たちの推論に影響を与え、時には思考に矛盾が生じたり、発展したりするが、プロトンの興奮とともに私たちを外部の現実へと導く幸福をもたらすことができる。強い感情から解放された青い光は、橋や階段を渡り、この精神的な可能性を発展させる感情の力を浸透させ、その超高感度なビームで、より強く、より強烈な「青」の何かに憧れる雄弁な友情の透明性の美しさを歓迎し、このヘルツ波の中で疎外され、感じることの深い波紋を持つ星座を私たちの中に発展させる。このパワーは、生きているという感覚を失った斜に構えた心に影響を与え、ターコイズブルーは深く永続的な友情に影響を与え、それ自体に狂気と快樂を愛する稀有で調子の良い美しさの魔法のビームを運ぶ。たそがれの強さのフィラメントの中で、それは苦悩と沈黙とともに、悪と快樂の歓迎と保護のエネルギーを発展させ、伝達する。いや、そ

れは私たちを惑わし、抽象的な思考を暗示する仮面ではなく、むしろ現実と空想の快樂の強く強烈な光である。彼女は恋に落ち、まるで理性を奪われたかのよう
に、しかし

それは感情の糧となり、快樂と欲望の歡びをもたらす。この歡樂は熱量があり、この原色の興奮の熱狂の中ですべてを侵食し、時間とともに空っぽになるエネルギーの蓄積を巻き上げるが、現在の未来では消えない。

1994年、私は電気技師の見習いとして働き始めたが、その頃、緩んだ電線でショックを受け、結局電気が来なくなったことから、今でも一部では「フェイスカ」というあだ名で呼ばれている。夜遊びをするようになり、1994年に初めて日食ディスコに行ったとき、私は「カップ・キャッチャー」になった。その日、仕事を始める前に血中アルコール検査を受けたら、結果が2.0を超えていたのを今でも覚えている。あの夜は最高だった。結局、ディスコのボトルを全部握りしめて、頭を垂れたままマネージャーの一人に家まで運ばれて、そこで彼は私を家に置いていった。素晴らしいことだった。eclipse最後の年のあの夏、私はショットをこなしながら、これ以上持ちこたえられないバーテンダーと夜中に交代するバーテンダーとして終わりを迎えた。1994/95年度、私はホセ・マセド・フラガテイ口校のスポーツエリアで10年生になった。体育とスポーツの成績はいつもワースト1だった！ 私は "les

bufons"（オナラ）と呼ばれるサッカーチームを持っていて、エスターリャの商店街で資金集めをしたこともあった。高校時代、グローバルテストの前によくインターンシップをした。

ケーキは笑いものになった。

アルブフェイラで卒業式に向かう途中、スーパーマーケットでカートにビールをいっぱい積んで出て、アパートに持ち帰り、幅木を空き瓶でいっぱいにした。フラドゥーロでガールフレンドの誕生日を迎えたとき、酔っ払ってスープが運ばれてきたテーブルで寝てしまい、起こされたときに食卓で吐いてしまった。その後、家まで送ってもらったが、家ではなくパーティー会場にいたかった。18歳のとき、映画『トランスポッティング』を見て、男がトイレに入ってウンコの海に飛び込むのが面白いとずっと思っていた。おばあちゃんとよく話をしたんだけど、自分の中から出てきたもの、つまりウンコについて話すのが好きだった。サッカー大会では "tchetchenos" と呼ばれるチームのチャンピオンになり、上達を続けた。1995/96年、私はすでにジョゼ・マセド・フラガテイロ校の11年生で、なんとか12年生に進級することができたが、数学と物理化学が遅れていたため、追いつくことはできなかった。授業中に窓から飛び出して、トイレに行ったと言って玄関に入ってきた。その間、私は走っていたのだが、後にヘルニアの手術をしなければならなくなるほどの筋肉痛を訴え、1996/97年に兵役に就こうとしていたのだが

、1年不合格となり、兵役検査で不適合とされ、足が痛くて走れないと訴えた。

足だ。彼は友人たちとトライターボをやっていた。
3つのフィルター私は、エタと呼ばれる学校の "裏 "グループに影響を与えるいじめの状況を引き起こした。
私は、昼休みにオーヴァルの街で4、5人の集会を催し、集まった客の表現の自由を真に攻撃し、私の親友ヌノと一緒に、一種のハジキでグループを強制した。
1997年7月、8月、9月の3ヶ月間、基礎教育第1サイクルの子どもたちのための職業プログラム「アクティブ・ホリデー」のモニターとして働いていた。サンタレンでは、展覧会に行くと言った後、何人かの友人の家に行き、窓からボクサーを投げ捨て、屁をこき、糞を漏らした。不安は年齢によって異なるが、人はいつも何かを待ちながら、とても不安な気持ちで生きている。
ジョゼ・マセド・フラガテイロ中等学校の生徒会として選挙に立候補するのは、大きな決意と責任感をもってのことです。私たちの目的は、文化的なレクリエーション活動を推進し、内外に自らをアピールする必要があるこの学校に品格を与えることです。この目標を達成するために、私たちは次のことを提案します。

青少年週間、サッカー、バスケットボール、バレーボール大会（男女）など、全学生を対象とした文化・スポーツイベントを推進する。社会問題について生徒を訓練し、情報を提供することを目的とした、毎月の討論会の開催 - 学校新聞の作成奨励 - メンバーの訓練 - テーブル・フットボール・プールの購入 - さまざまな活動を行う青少年週間の開催 - 学校の活動、特に生徒会の取り組みを広報するため、「メディア」と連絡を取る。「キャンペーン期間中、私は生徒にコンドームを配布し、保健センターとの連絡を維持した。私たちはあなたたちのために顔を差し出す!」「私たちの足跡をたどる」「私たちの音楽を演奏する」というキャンペーンのスローガンの下、本部を利用できるようにしてこのキャンペーンを支援した社会主義党のポスターが貼られ、彼らは党の過激派であるカウンターパートを求めている。過激派カードが配布されたが、私たちの組合のこの政治勢力に勝利した過激派は一人もいなかった。他のプロジェクトとしては、執行委員会がテーブル・フットボール・プールを購入し、1ゲームにかかった20エスクードの半分を預かった。1998年1月14日、午前10時から午後8時までの間に行われた選挙に続いて。a、bの2つのリストが参加し、その代表者は立候補

ファイルに記載されている。投票終了後、740人が投票した。

学生たちの投票が集計された。10票の空白票-15票の無効票-570票のリストa-280票のリストbである。この発表の後、プラス収支はない。また、前協会が机、金属製の食器棚、椅子、スツール、チェスセット2台（未完成）を所有していたことにも触れておかなければならない。キャンペーンの数日後、匿名の告発が学校に流れ、私はキング・ライオンとアル・カポネというあだ名をつけられた。1998年末、PSPオーバーが調査を開始し、警察の捜査が入った。警察署に出頭したとき、私はマリファナを吸っていた。その年のプロムには、そのディナーの未払い疑惑と告発があり、当時の親友の初仕事で翌日に支払われたという不道德なものだった。

以下は、我々は噂が行われた夕食の代金を支払って
いなかったことを恐れていた。98年1月、私は教育の週に
招待され、彼のexaの思い出をもたらした。ジョルジェ
-サンパイオ大統領は、次の献辞 "アヴェイロのグルー
-プに、A.E.に特別な学校ホセ macedo fragateiroに、友好
的な抱擁で "写真を運命づけた共和国の大統領1998年1
月24日の教育の週 - 共和国の大統領、私は上院大統領
に挨拶した電気の博物館に立って昼食を取った。同じ
年、私はフラドゥーロのディスコ、ア・ピルドリーニ
ャで働く機会を得た。バーテンとして、映画『カクテ
ル』を思い出させるようなボトルや曲芸で客を楽しませ
たが、ある夜、私は自分の体中にウンコを漏らし、
ディスコが全焼したような感覚に陥った、数日後、友
人の母親がきれいなパンティを返してきた。私はよく
パートナーとゴールドেনストライクとアブサンを2本ず
つ飲んだ。あるパーティーでボスの前で接客していた
とき、グラスに酒を入れ始めてカウンター中にこぼし
てしまい、即刻クビになった。マネージャーの一人が
お客さんと一緒にいて、私が2杯のショットをお客さん
に出したのですが、お客さんは私に「出て行け」と言
ったんです！ 弟の親友の結婚式に出席したとき、トイ
レで大麻を吸い、酔っ払ってテーブルの上に靴を置い

て携帯電話の役をした。夜はいつも、飲んだグラスとハシシをお供に、学校の表紙にアインシュタインの数式を書いていた。

ヶ月のグラスサービス。第2期の最終パーティーをやり遂げた。いつものように競合ディスコ、フェニックス・パーティーには900人が集まったが、モンホの最初のパーティーでは700人に達し、ライバルのパーティーには200人近くが残った。パーティーの後、私は協会のメンバー全員を連れて外出に出かけたが、モンホのオーナーにはディナー代を支払い、それ以上のパーティー代は渡さなかった。その年、私はフィリップスの工場に従業員として割引を始めた。その頃、私はuniteca/quimigalで仕事を得た。ディスコのダカスカでバーテン兼エンターテイナーとして曲芸を披露していた私は、ここで初めて"ガム"を口にした。このような物質を使った最初で唯一の経験だった。ディスコのダカスカで、広報担当者と警備員が別の日の出勤のために私を迎えに来たとき、前日に私がボトルと曲芸でクライアントの頭を打って病院に行ったことを教えてくれた。ガールフレンドと一緒にいたときに3時間遅れたため、私はそこに着いたが、私はドリンク・キャッチャーに取って代われ、その場で解雇された。1998年から99年にかけてバーテン兼バーヒーローとして働いていたエスターレハに、新しいバーがオープンした。ドアマンとして2年間、そしてバーが燃やされるまで。

ドアにバイクのガソリンを入れたが、挑発したり、誰かに絡んだりしたことはない。1998/1999年、私はバーのヒーロー、ファイスカと友人たちによるレヴェイオンを企画し、大晦日のために友人たちを招集した。バーの客全員に、バーの閉店と大晦日の深夜12時前に帰るように言う。私はロック・バー「オバー」に行き、店内で別のイベントの宣伝をしたことで暴行を受けた。検察にも行ったが、目撃者がいないため、手続きはしなかった。98/99年の大晦日、私はバーのヒーローたち（av. Visconde de Salreu Estarreja）のために、次のようなプログラムを組んだ。ビチーニョとインコグニート。パーティーの最中、自宅でパーティーと友人たちのために着替えをするため、私は年末のその夜、ドアマンをしていたバーからすべての客を追い出した。考え事をしていると、アルファベットの順番に疑問を持ち、abやabaの方がずっと先だと思う。ウイंकをしたり、相手に触れたり感じたりして、何が間違っているのか、苦しんでいるのか、助けてくれるのかを確認するために、全員がスピードアップするような、男同士のセキュリティシステムを作ろうと思う。テレビを見ては、脚注が私の心にメッセージを送っているのだと

思い、テレビ局を見ては、その日にノーベル賞がもらえるのだと思う。アヴェイロの映画館で映画『スナッチ / ポルコス・エ・ディアマンテス』を見ていたとき、自分がその映画の俳優だと思い、靴を脱いで映画館に出入りし始めた。エスターレハでは、最高の自由を求めて川の近くまで逃げた。

木に登ろうと考えたり、川に半身を投げ入れたり、自分は天才で共和国大統領が見ていると考えたり、草を食んでいた牛と接触し、自分の考えを牛に伝えようとしたりする。彼らは私のアイデアを盗み、私に危害を加えようとしていると思い、私は奇妙なことを感じ始め、孤立し、部屋全体を回転させたり、心理学の本を読んだりして、自分に何が起きているのかを理解しようとした、父が私にバーを買ってくれると思っていたこともあったし、父は世界で一番偉いと思っていたこともあった：「アヴェイロの病院に運ばれ、その後コインブラの精神科救急病院に運ばれた。消防士にストレッチャーに縛られて運ばれ、会話の後、私は注射を打たれると思い、精神科部長との会話の後、彼女たちのところに行ったが、注射を打たれたただけだった...目が覚めると、私は精神科病棟の一室にいた！私は逃げ出し、タクシーに乗ってコインブラからエスターレハに行き、そこでタクシーの運転手に待つように言って、母に警告しに行った...。翌日、私は精神科医から送られた薬を飲まされ、それが私の気分を悪くさせるためのわざとは知らずに、病院に連れて行くように言われ、ベルトでベッドに縛りつけられるという身体拘束のもとで20日以上過ごしました！エスターレハで

は、インターマルシェの歓迎は隣家への招待のように
思えた。

彼らは苦情を申し立てたが、GNRは私を本当に探していると言って病院に連れて行った。入院記録（精神科）によると、患者は1999-01-03にこの病院に入院し、1999-02-15に退院した。コインブラの病院で、彼は *superinteressante* の創刊号を受け取った。1999年2月11日、コインブラの精神科で開催されたフーズボール大会に参加。精神科医長に声をかけられ、一緒にタバコを吸い、プラスチックコップに灰を入れ、「成功する」「女にもてる」「旅行ができる」と騙された、病院を出て、車や灯りのある家、あるいは動きのある方角に行き、警察が私に接触していると思った。結局、車で通りかかり、パジャマ姿の私を見た紳士に連れ戻された。カフェに行くと、コップが落下して私の名前を指摘されるのが怖かった。

1999年に3等事務員として郵便物や書留を配り、当時は髪を脱色し、手紙も持たずに車で配った。

時速30キロで走りながら、事故を起こしてバンパーが壊れることさえあるクルマを初めて感じたかったし、それを正当化しなければならなかった。

眠らないのは、眠りたくないからだ。ここで生きたいのに、眠らせてくれない障害がある。不眠症で立ち向かおうと思う。

カモンイス外語学校に入学し、ポルトガルの11の価値観の同等性を求め、中等教育の資本単位でコースを再受講した。1999年3月1日から2000年2月5日まで、奨学生として学校へ出向き、青少年の健全な行動について宣伝した。1999年3月1日から2000年2月5日まで、青少年に健全な行動を促すために学校へ出向いた。「職務遂行において、彼は関心と行動力を示し、利用者への対応、青少年が関心を持つ情報の発信、情報媒体の更新、ポルトガル青少年協会への連絡といった職務を的確に遂行した」（アヴェイロ、2000年3月9日付）。テネリフェに一人で行った数日前、私は生涯の伴侶となる女性のことを考え始め、ラケル・マメデ（ポルトガル・ボンバラル）の名前で3枚の葉書を書いた。ナイトクラブの真ん中で、友人がバルコニーからバルコニーに飛び移って、元彼のことを注意していた。しばらくすると、彼女もジャンプして私に会いに来た

。私はフラットのリビングルームに逃げ込み、当時の親友のシーツの下に隠れた。

私がここにいると言うと、彼女はアパートから逃げ出し、私は通りを追いかけ、落ち着かせるためにつまずかせたりもした。2000年12月11日、私は学際的なエリアで試験を受け、途中で抜け出して外で終了しました。2日後、私は彼のオフィスに行き、誠実さが欠けていたことを謝りました。ポルトガル語は11点、英語は15点、フランス語は15点、学際領域は17点、哲学は18点、コンピューターは18点だった。2000年2月8日から2000年5月31日まで、「2年目のレセプション研修生」という職業分類で、このホテルのレセプション、フロント、バーのセクションで知識を習得した。彼はこの期間中、学習能力の高さ、並外れた献身性、責任感を発揮した。私たちは、彼の有能さと私たち全員との関係を賞賛します。オーバー 28/07/00.ここでは、責任者の不在中にホテルの部屋で寝たり、バーでパーティーをしたり、プールに行ったりした。私が精神科に入院していたことを知っていたため、バーで同僚に暴力をふるったことが原因で懲戒処分を受けました。それからリスボンに行き、イマビズ・ショッピングセンターのコーヒーショップでバーのウェイターとして働いた。2000年のことだが、ショッピングセンター内のディスコに

よく行き、当時最高のダンサーだった自分を想像して夜遅くまで踊っていた。

シェラトンホテルの前で、このボトルは私にとって2回目の化学物質体験だった。2001年、私はエスターレハのスタッフ・カーニバルに参加した！ エストレハのスタッフ・カーニバルに参加しました！ オバール市議会、文化・図書館・歴史遺産課。2001年8月6日から2002年5月30日の間、オヴァール市立図書館およびオヴァールの家であるジュリオ・ディニス博物館の一般市民への対応業務において、有期契約による事務補助員としての職務を遂行したことを宣言する、BTがその場所に呼ばれ、車を牽引した後、罰金はないと言われ、増援を要請され、手錠をかけられたままレイリア病院に連れて行かれた。カルダス・ダ・レーニャでは、窓からスナイパーや人が監視しているのを見た気がした。2000年11月26日から12年7日まで、インファンテ・D・ペドロ病院にて2001年 - Dgvから無免許を言い渡される。部屋をひっくり返して、カメラが私を撮影していて、スパイに監視されていると思ったこともある。レイリアでは、インターポールが僕と一緒に動いていたと思う。あるとき、5.01セントのガソリンを入れて、5ユーロを支払った。当時は、車の下にロシアのスパイがいると思ったものだ。

私は自分が魔術師で、下着姿で道路の真ん中を冒険しているような弾むボールと私を冒険させる一定の回転で車のマシンに自分の心と脳を釘付けにして車をコントロールしているのだと思う。私はコインブラとアヴェイロの地域を考慮したb5のコマンドのGNR旅団によって尋問され、私は迫害のアイデアを持って開始し、レイリアでbtの命令によって牽引されている車の中で新聞を置く。宣言liscont - コンテナオペレータ、行政区域における実務家のカテゴリを持つ労働者。一瞬、私はリスコンでトイレに横たわって、私はハシシを吸わずに2ヶ月を持っていたし、私が戻ってきたとき、私の頭が痛い問題は、早期の出口リスコンで始まった深い愛、被った愛はまた、半分失われた後悔し、住んでいた忘れてしまった深い下に感じられた。私は雲の下を旅し、空の下を飛び、火星の惑星と木星の惑星にいた。それは太陽のような強さを持ち、ひまわりのように動き、熱いものを求めて絶え間なく自らの意志を持ち、夢であり、征服であり、目的であり、すべてが情熱的で、無次元で、壮大で、素晴らしく、要するにとっても愛に満ちていた。私は窓の外を眺め、水平線に気づき、丘の上に目をやり、前方を見た、あなたの星が見

えた、それは輝き、輝いていた、私は目を上げた、月が見えた、それは私のものであり、あなたのものであった、それは風景であり、旅であった、あなたが陸の上を、海の下を旅しているのが見えた、私はあなたに同行した、私たちは旅した、陸の上を、海の下を征服しあった、それは月明かりだけであった。私はあなたに会いたかった、欲し、望み、愛し、考え、感じた。私はあなたに会い、あなたを手に入れたい。

ここで、あなたに会いたいと願い、あなたを愛し、いつもあなたのことを思い、あなたの存在を感じ、あなたを恋しく思い、あなたなしではいられない。あなたを見ることなく、あなたを考え、望み、感じ、愛し、五感であなたを望む。あなたのために苦しんだ記憶、感じた記憶、愛した記憶、生きた記憶、他の人を愛したことがない記憶、キスした記憶、あなたの中にいる記憶、見た記憶、あなたの中に入った記憶は、私がいつも忘れない愛である。30 2003年5月結婚愛マールフィリペモウラ02 6月。リスボア-マドリッドハバナマドリッド6月09日。リスボン 2003年6月10日 キューバに行き、ハバナで100ドルのマリファナを買った。入団するまで4ヶ月間マリファナを吸わなかったが、吸ったら頭が痛くなり、それをきっかけに上司と陰悪になり、結局病気休暇を取って仕事を探しに行った。芸術学部では、教室で寝ながらマリファナを吸っていました。Câmara Municipal de Lisboa biblioteca orlando ribeiro 若い子たちとの接触が怖くて、一緒に活動するのが恐怖症になった。上司の技師といくつかの疑問を明らかにしたいと思った後、私は辞職し、病気休暇を取ると言った - 私は、トイレに入ることを許されず、トースターにチーズ

を残すという事実を記述した手紙をイゼル会長に送った、私は去った...cttからのハガキに満足のいかない不満を書き、自分宛に送って受け取ってもらう。共和国大統領にこの8年間の経緯を書いた手紙を送る。失業、リスボンの市民ショップで社会保障に問い合わせると、本当は失業手当が支給されていたのに、支給されないとと言われる。妻や義母と口論し、ルクセンブルク行きの飛行機に乗ろうと思い、列車でファロに向かう。

欧州連合（EU）のドゥラン・バローゾと話をするためだ。おそらく私たちは皆、美德のイメージとしてだけでなく、外見や状態の機能として存在しているのだろう。すべての物理的存在が消滅し、突然すべてがなくなる瞬間にも、心は死なない。

私は妻に、自分は"ハッカー"であること、職業を持っていること、いつも彼らを愛しているという論文を書いたこと、ミニマーケットに行きビター・アーモンドを2本買い、数錠の薬と一緒に飲み干したこと。妻がやってきて、私がその状況に抱きしめられているのを見て、イネムを呼び、まもなく消防士が到着し、オリーブオイルを飲まされ、目が覚めるとおむつをして入院していた。数日後、近所の人に薬物との相互作用があったことを話したら、近所のカフェで、私がよく飲んでいたコーヒーの1つでなければ、2007年02月1回目の自殺未遂だとまで言われた。

もし私の魂が私の中で蒸発してしまったら、ファンタジーとは無縁の秘密の瓦礫しか残らないだろう。浮かび上がった転覆から、もうひとつの特別な瞬間の無為さが浮かんでくる。不在は、もし私があなただけの世界に触れ、見ることができたとしても、少なくとも誰かを信じるといった感性の無言の感触

がなければ、私の現実を凌駕する不潔なものとなる
だろう。私の単純な悲しみは、達成不可能なものとして達成可能なすべての幸福のようなものだ。魔法のように、皮肉もなく、ある日私はあなたに言う、あなたが私を見ているように私に触れ、感じ、あなたは私が誰でないか、そして私が感じたものを見るでしょう決してそんなに苦しみはなく、これ以上望むものは何もない、あなたのために私を通してあなたのために死ぬ私はとても多くのために書いた私は苦しんだが、死ぬことはなかったと。

por ti nunca perdi perdi só senti ser junto a ti num ardente fósforo queimima a dor que em me encerra quando tudo queimar.私はあなたを決して連れ去らなかつた、さらにあなたの中で私はあなたが苦しむと言うだろう、私はあなたを決して去らなかつたので、私はあなたを愛していたし、常にあなたを愛していることを知っている。精神科医との会話は覚えていないが、彼は同意書に署名した後、私に退院命令を出した。-階の窓から動物を投げることを考えたり、人を破壊したり殺したりすることを思いついたりした。欲望が高まったとき、私たちが互いから盗んだような、隠されたキスを私に与えてほしい.....ソフトな、そんなキスを。優しく、甘く。私からのキスをあげるわ。お言葉ですが、あなたと私を許してください! あなたは私を、私はあなたをどう思いますか? 私を読んでくれたこと、おそらく理解してくれたことに感謝している! あなたはすでに私を読んでいる場合は考慮事項の部分を渡すと、彼らはすでに法的な時間に包まれていない少なくとも雄弁なプレゼントでああなたのelaçõesを奪っているコックやコックのゲームの質量は、ここで恐ろしい質問! ? 私たちが離れて行為を移動する沈黙の最小値と単純なエコーに理解しやすいコミュニケーションの恍惚への

反射は、拒否の単純な熱情の中でも痛みの言葉です。物理的には乗り越えられない障害だが、光り輝く存在のホルモンと精神的な化学反応によってではない。完璧な愛の開花のために、天体は私たちを侵略する。多面的な存在を理解し、常にこの視点に何かを加えることで、豊かさが成り立っているのだ。自尊心を捨て去り、慈愛と優しさを求めるこの欲望を、もうひとつ加え、もうひとつ増やすのだ。

社会的サークルにおける代表者である。唯一無二の自己という観点から見れば、その輪の中にいかに多くの意志が生まれようとも、いかなる意志も疎外されることはない。そのような黄金の輪、誠意の同盟、忠誠と尊敬の同盟、何よりも義務というものは存在しない。私たちは純粹で野蛮な行動をとり、自己ほど利己的なものはない。考え方の単純な対立によって心が燃え上がる時、私たちは常識に訴えなければならぬ。自我に道を譲ったり、他我の邪魔をしたりするのはどんなときか。欲しくないものを拒絶することほど平凡なことではない。愛すること、愛することは、自分ではなく相手を感じることである。私たちという存在をつなぐ建設的な態度。本能的な行動に刷り込まれた私たちは、自分のことしか考えず、次に自分のことを考え、そしてまた自分のことを考える。葛藤が生じるのは、「自分」が「自分」へと変容していくからであり、「自分」が何人いれば、もう一方の「自分」に屈することができるのか、自分でもよくわからないからである。それは、常に開かれている私たちのもとにやってくる種類のものだ。どの"自分"がどの"自分"の仮面をかぶっているのか、そしてその"自分"がどのレベルの"自分"

なのかをよく観察することだ。まあ、自己の鎧はいつか、「私」に「私」を加えたような「あなた」が存在することによって、鎧を破るほど壊れるだろう。愛：愛はすべてに打ち勝つ。2007年8月 離婚それは、外的現実直面したときに崩壊するすべての外見のような幻想だからだ。悪意と偽物の散発的な狂気のエピソードを与えられ、膨張し、汚染し、すべての思考を占め、自らを支配し、支配させる愛のような発泡性の欲望、これは活性化するエネルギーの交換であり、光り輝く内容がそこにある。照らされた空、照らされた空の完璧なバランスに達しようとする欲望ほど強いものはない。

アイデアや事実、願望から具体的なものまで、星々の絶え間ない相互作用を求める恒星エネルギーに照らされた空ほど美しいものはない。星々の力は唯一無二のものである。エネルギーが炎のない煙のように消えていくのが怖い。生命力が融和によって抑圧され、感情の結晶化が政治的正しさの仮面であることは間違いない。魂よ、自分自身を魔法に変え、事実の真実と物事の絶え間ない変異の衝動的な流れを持っていない心の上を飛ぶ。自分自身を解放し、拡大し、そして何よりも、生命の変異、私たちを駆り立てるその変化に苦しみなさい。生命の光よ、狂気的情熱を沈めよ。なぜか？ 私たちは本能的に愛し、愛されたいと願っている。情熱と幻滅は、さまざまな幻想への道を開く。惑わされ、夢中になっている私は、真に愛するという方法論全体に集中し、集中する。愛されるという行為の場で裸になることで、私たちは存在の真のアイデンティティに直面する。それゆえ、愛されるということは、なぜ自分が愛されているのかという深い自覚を私たちに要求する。だから論理的には $1+1=2$ 、正しいが、もしその結果が態度や価値観や行動全般の技術的な結びつきでなければ、行為は生産的ではない。理解し、この真実は喜びの唯一の源であるか、または個人主義的な

存在は、別のアクションを望んでいる、アクションは
真の自由として理解される。 さて、私は経験していな
い

私は絶対的な確信を持ちたくない。だから時折、自分がバカであることを想像する。今では口バを持つことは難しいが、人工的なバカもいる。私はそのためにここにいるのではない。実のところ、私はおかしなことや、自分が犯していない態度を恐れているのだ。なぜなら、おかしな人はある特定の状況下でのみ、また他人によって判断されたときのみおかしなのであって、それはしばしば「生息地」によって左右されるからだ。この推論から少し逸脱して、私は自分が狂っていると言いたい。何人かの人を好きになり、そこから、私たちは決して満たされない、もっと愛が欲しい、もっともっと愛が欲しいと思い込んでいる。私たちは皆、愛の中でおかしなことをする自由があり、傷つきやすく、しばしば操られる。なぜかというと、私たちは愛されてきたからである。

2007/11 薬による2度目の自殺未遂、カレーのエスカレーター、カブラル病院、診療室に入るなり看護婦に「こんな時間にベンゾジアゼピンで自殺を図るんですか！」と声をかけられ、静脈注射されていることを分析された後、針を抜くと血が噴き出した。

生きるか死ぬかの狭間で死ぬために生きる？ ああ、すみません、それは合っていますか？ もちろん、自殺し

たことのない人はいない。私たちは皆、すでに一瞬を
生きることをやめている。例外なく皆、自分は死ぬの
だと思い、そして生きるのだ。誕生日の後、私は "あの
世 "に行こうとして、20時間後に目が覚めた。

一度だけ。公募のコンペティションに参加し、3人の医師からなるチームから事務技術者のポジションの評価を受け、17.41点を獲得して2位になった。ポルトの医学部だった。数日後、自殺願望があったのでそこへも行ったが、人目もはばからず、待ち続けたが、待ちくたびれた。光は私を日常生活の恍惚の流れへと導き、不健康で理不尽な未来を照らしてくれた。そして、私は厳しさと厳密さの肥溜めから抜け出した。しかし、それが私の過去を啓発するかどうかはわからない。それゆえ、2つの極、2つの両極があり、私は黒く呪われた方ではなく、ポジティブで癒しの方に心を打たれた。この光は、感情の明晰さと、即物的で衝動的な黄昏時の合理性から来るもので、移り変わりがなく感覚が不透明なもので、感情に埋め込まれたり釘付けにされたりした感情ではなく、この世で私たちを動かし、私たちに力を与えてくれるものを全力で楽しみ、生きる喜びから来るものだ、すべてのものには動きがあるが、それは存在し、あたかも姿を現し、視覚の感覚に浸透し、時間の沈黙を通して思考の明晰さを私たちに示し、あたかも沈黙しているかのように意見を硬化させ、否定的または肯定的なエネルギーによって他者が発信する不名誉な無能力を享受する。思考の速度、即時

の、秒の、分数の、瞬間の、そして瞬間は瞬時である
。

絵の中のカットも、最も滑稽な行為も、それがプラスに作用しようがマイナスに作用しようが、誰にも権利があるからだ。すでに黒いフェイスカの引き裂く効果は、感性のニュートラルな極で起こり、快樂とルミナリエに渴望する活気あるエネルギーの狂気の中で運ばれている。だから私は、光に打たれるためにあなた自身のエネルギーを使うようアドバイスする。別の象限からは、クリスマスツリーのイルミネーションや、私たちが気晴らしに駆り立てるストレスなど、乱れのない思考を持つブルーレイがやってくる。私たちが瞬間的なものを体験するのを妨げる、発散的ではなく妨害的な現実的エネルギーに直面するのはこの移行期であり、雷が轟き、超音速を生み出す音波に顕著に影響するが、それほど強力ではない。現実のようで非現実的なもの。生命は、永遠のホールドの中で自らをそこに置き、そしてそれに直面したり、回避したり、操作したりする方法がない。それは、創造、想像、またはただ緑の色合いの華やかなダッシュをペイントし、生きている華やかさのそのトーンで人生をつかむ一点の麻痺で発泡し、最高潮に達する反体制派の恐怖であり、ここにあなたがいつも指摘したかったマーカールがあります、激しく生きる。

2008年01月 タトゥーを彫る

ダークライトニングと肩甲骨の火花、そして光の力
というタトゥー。

2007-11/2008-01 - 商用高速電話 私は上司の最高の顧客
である会社に5台の携帯電話を購入し、職場に現れなくな
った。エスターレハの図書館で、障害者用の駐車ス
ペースに私は座って、私の抗議を暗示する場所に横た
わっていた。

つまり、本自体の大きさについての苦情に終始し、入り口の店のウィンドウにあった、一日後にはスタンドに20巻以上の良い教育とエチケットのルールでいっぱいになっていた"異なること"についての本からの盗作で満たされた。2008年02月、エスターリャの図書館で、私は労働者の青いヘルメットをかぶり、公共事業の労働者として、部屋のドアに次のように書いた。私は弟を殺すと脅し、その言いがかりで当局に連行され、精神鑑定を受けた。私は自分の意志でサレウ病院へ行き、そこで患者として収容される！私はコインブラの精神病院に行くことを提案し、翌日、私を家まで送ってくれたGNRの軍隊と一緒に到着した。私は言葉のストライキに入り、10時間以上無言のままだった。私は100ワットの増幅スピーカーを備えた光と音の装置を買い、反ダンタス・マニフェストを収録したCDを寝室の窓から最大音量でかけ、オルフェウスの未来派詩人、ホセ・デ・アルマダ＝ネグレイロスについて、そしてすべてについて語った。H.U.C.-コインブラ大学病院入院速報-精神科サービス-男性-患者は2008-02-02-02にこの病院に入院し、2008-02-18に退院した-通常の病気、彼はルームメイトのおむつを交換し、別の私は彼と口論し、その後、治療の途中で出て行った。当局に導か

れて病院へ行くと、私は手錠をかけられ、精神科医の診察も受けず、自分の意思に反して治療を受けることを強要され、担架に縛られ、注射を打たれた。私は借りた本と

市庁舎の湖に投げ込み、その日はシャツを脱ぎ、外のミサの前で光の力の絵が描かれたタトゥーを見せ、行列の中に15ユーロを置いてきた。エスターリヤの文化議員に呼び出され、図書館から持ち出した本を引き渡さなければ刑事手続きに入ると言われ、最悪のことにCDには傷がつき、行列の日に本は役場の噴水に投げ込まれた。

病気のために口がきけなくなったとき、私は数百万ドルの秘密を守るためにある計画を思いついた。

コインブラの病棟で、私は精神分裂病と診断された。ナース・ミーティングの会話を聞いていたら、一番頭のいい補助者が私が聞いているのに気づいて、同僚に私の番だと言った。私は「逃亡の危険性」という欄に「パジャマ着用」と書いていたのだが、バカバカしい、パジャマで逃げるなんてありえない、と思った！ この強制収容から抜け出すために、私はこの処遇にどのように従うかを記した裁判所の書類に署名しなければならない。アヴェイロの病院での面接で、私は「光の主」という仮名で治療を受けたい、木から落ちた果物しか食べない、バターとイチゴジャムは嫌いだ、と言った。いつもの食

事に何があったのか。ディスカバリーのスタンダードから身を投げるなど、自殺の方法も考えた……。

私は常に忠実でありたいと思うが、悲しいピエロのように、笑顔や内面的な喜びを偽っている、

外見に従わない。私は正常な場所を離れ、旅をして、自分の視界から遠く離れた地点に留まらせる揺らぎを感じる。忌まわしい歩幅、不自然な現象を感じるが、野生動物のように獰猛さを感じ、生来の力がその瞬間に失敗することを運命づけたかのように、スピードで引き裂き、絞め殺し、殺す。旅の途中、跡形もなく、反抗的で、憎く、本当に罪深い者のイメージが残っている。裁判所からの手紙を受け取りにCTT（郵便局）に行き、病気のため署名ができないと職員に告げ、指紋を取る。コインブラの病院では、ホテルと同じように、ドアの取っ手に貼る厚紙を見つけた！ その葉っぱと花粉で、"パラシュート飛行士"というニックネームを持つトマスから借りたシュラフでタバコを作った。

一週間後、病院を出た私は、オバールのGNRの指揮の下、精神鑑定の話と一緒に再び病院に連れて行かれる - コインブラで私は共和国の議会から提供された憲法と拘束椅子の展覧会を開催し、当局の不在で防衛の部分に開きます。私はコインブラ病院のスイッチをオフにすることにより、光の力を言って、ライトをオンとオフをオンにし、私は超面白いを購入し、そこに悪魔 "hashashin/vulto" の起源に対処偉大なトピッ

クが来る。精神科病棟が混在しているため、私は男性用トイレと寝室で患者とオーラルセックスをしたこともある。私は

アヴェイロの病院で、私は5センチ幅の開いた窓から息をした。そして、ただ吹いてくる空気を吸いたいと思った。庭が見え、人々が楽しそうに走っているのが見えた。自由を感じる

あり続けること：生き方 真実の

物語

ネルソン・ブラス・ペレイラ

宣言されたもの、そのために運命づけられたもの。生き方、つまりそれは、私たちが祖先から受け継いだものすべてであり、そして私たちには、成人したら子孫を残すという使命がある。

つまり、私たちが獲得できるすべてのもの、知識、つまり、私たちが築き上げたものを知るときに求めるすべてのものだ。

なぜですか？

なぜなら、理性の力によって挿入された社会に対処するとき、私たちは常に、社会そのものから紳士として見られるように、受け入れられる存在であるように生きなければならないからだ。

なぜですか？

私たちは互いに奉仕し合う存在だから、後天的な問題がある。

なぜですか？

私たちは社会的な存在でありながら、野性的な存在として生きることもできるのだから。

対等な存在に負けていないとき。

しかし、疑念や不信感は常につきまとうものであり、それによって私たちは教えられ、それが私たちの歩む道である。

本を読むことができるすべての読者を喜ばせたい。私のこの本は、寝る前に聴きたい、読みたいと思う題材に夢中になれる、どこの本屋でも見つけることができる。

彼らはこのような真実の記録を読んだり見たりすることはないだろう。

私は、すでに過ちを犯したが、私を苦しめたすべての悪から立ち直る方法を知っている者の真の経験から与えていると感じている人々のように。

今回のテーマは？

フライング・レポート、あまりショッキングな話題にはならないかもしれない。読者にショックを与えたくはないが、レポートは真実であり、クールに体験した方法で語られている。

私たちは千差万別のことを想像し、動物的本能の真の感覚を肌で感じる。

力づくで勝ちたいし、勝たなければならないと思っている。

法の外では、私たち全員が知っているその存在が私たちを見つけることができる。

私たちができることは、決して悪とはみなされない。

すべての存在に輪廻転生があると思う。

生きたいという野心、私たちが望んでいるのは、簡単だと思いう方法で生きることだが、それは簡単ではなく、困難になる。

なぜですか？

面白さにひっかからなければ、面白くもなれない。

これは私の物語であり、ポルトガル人の父を持ち、アフリカで生まれた青年の物語である。

それ以来、楽に生きたいという私の本当の人生が始まった。

なぜですか？

なぜなら、悔い改めを示すとき、法は私たちに好意を示すと私は信じてきたからだ。

しかし、事実が100%証明されたとき、裁判所によって支配される法律では、犯罪が本当に起こったことだけを証明することができる。

なぜですか？

赦されない苦しみや、罪を犯すことを味わい、感じる

機会を得ることの本当の意味を読者に伝えることは難しいからだ。

私たちがしている悪を。

私たちが社会から見放され、近所の誰もが見たがるような存在になったとき。

なぜですか？

あなたには探求する目がある、それは個々の能力から来るものだ。私たちは常に人生を進歩させるための遺産を持って生まれてくるから、苦い人生経験を教え、伝えることもできる！

私はアフリカで生まれ、3人の姉妹がいた：エルビラ、カーンディーダ、そしてサオン。素晴らしい物語になる可能性のある物語の、良い始まりがそこにある。

その機能を果たす男たち、いわゆる刑務官からはあまり悪意を感じなかったが、私はいつも彼らを敵だと判断していた。なぜなら、あの裁判から本当に逃げおおせたことを受け入れたくなかったからだ。

私は人生を歩む中で、いくつかの犯罪を犯してきた。

彼はスラングでその言葉を使った。

という言葉がある。

私たちが探していた場所であり、私たちが送ってきた

生き方のために、暴力がなかったり、誘惑や挑発的な暴力がなかったりする棧橋だった。社会の目には、それはよく映らない。というのも、社会は誰も、他人が犯罪によって生きていくことを認めないからだ。

ひどく悪いように見えるかもしれないが、実際に存在する。

そして、このように私たちは皆、悪癖を持っている。しかし、このように私たちはいつも、私たちには知覚できない何かを悪いこととして嫌がるとき、それを悪く受け取る。しかし、これは私たち皆が育った場所の素晴らしいビジョンを持っている。それらは私たちの手段であり、共存することで、よく生きたい、他よりも良くなりたいという野心を持つという私たちの形成がなされるのだ。

でも、その子たちの中に、ある女の子がいた。その子と出会ってからずっと好きだったんだけど、その子の誕生日が私と同じだったんだ。

彼女に会ったその日から、私はずっと彼女が好きだった。彼女は私と一緒にたくさん暮らしていたし、私の姉妹たちともたくさん暮らしていた。私たちは彼女らしい関係を築いていた。一目惚れではなかった。私は信じているし、私が愛したあの女性のような女性は決して現れないと信じている。初めて彼女にキスをしたとき、私は本物のライオンのように感じた。私たちは皆、サバンナにいる自分の姿を見たがるものだ。

妻を持ち、家庭を築くという、すべての男性と平等な生活を送る権利を持つ者。

彼女は私の生き方を受け入れてくれたし、この愛は一生に一度しか存在しないにもかかわらず、私は賢者のような気がしないし、自分自身をそのように考えたこともない。

強盗をやり始めて、一番簡単な強盗から始めて、武装強盗もやった。でも、コカインの使いすぎで墮落してしまった。

出て行きたかった。

そのせいで、私は錯乱状態に陥った。しかし、私は強盗で人を襲うことはなかった。反応がなければ、暴力を使う必要はない。

雨の中を歩けば濡れることは知っている。

ポンティーニャで育った私にとって、リスボンはいつも楽しい場所だった。

つまり、私はただお金が欲しかっただけなのだ。私は自分がうまくいっていることを知っていた。私はただお金が欲しかっただけなのだ。それらの行為に嫌悪感を感じていた。私が望んでいたのは、自分の依存症を満足させることと、社会的な環境、人々との関係において、社会的であること、人々とうまくやっていること、そして社会的な環境、人々との関係において、普通であること、普通であると感じることだった。

私は支配的な気分になり、たてがみをつけたライオンが縄張りを征服し、人生を支配していると思った。そうやって、女性を持つ人生と向き合ってきた！ まあ...。私はこの生き方に対して、人に害を与えるというポジティブな方法で向き合った。私は決して、残忍な方法で他人を破滅させ、何も残さないような方法で誰か

を傷つけたりはしなかった。

私は、その場の状況を利用し、お金のため、コカインを吸うために手っ取り早く手に入れるためにやっただけだったが、私は常に必然的なことを引き延ばした。

酒を飲み、麻薬を吸う男は、受精の結果残された遺伝子の子孫繁栄に反応する。

私はこの問題の "専門家" ではないので、このたとえ話をすべて読み解き、読者に伝えることはできない。それは生き方であり、時には良い面もあれば悪い面もある。

なぜですか？

私たちが学んできた生き方は、先に述べたように、常に悪意を持って行動できるわけではないからだ！

なぜですか？

なぜなら、私たちは基準から生きているからだ。私たちは人生を感じ、命令することから生きている。

関係が始まったのは、私が22歳のときで、軍隊にいた。クリスティーナのような情熱は決して手に入れることはできないだろう。

私は激しく生き、彼女が私から離れると気分が悪くなると感じていた。

しかし、それは病的な嫉妬ではなく、健全な嫉妬であり、その嫉妬の中には、私の押しつけによって誰かを無理やり引き留めるような病的な悪意はなかった。

なぜですか？

私は一人で、彼女を失ったら私の人生の伴侶を失うことになると思っていた。私は上の地区に行きたかったのに、彼女はカンポ・ペケーノのディスコに行きたがった。私は彼と喧嘩をしたけれど、それは私がティナを愛し始める前のことだった。

あまり傷つかなかったけど、彼は私と彼の妹との関係を受け入れなかった。彼が私と一緒に住んでいたのは、そのような背景があったからで、私たちは同じ地域に住んでいたのも、そのような関係、つまり私たちの育った環境があったのです。

母親はネラス出身のドナ・コンセイサンで、父親は知らないが、ラウルといういい人だった。

彼は妻の費用だけで生活することを学んだ。ある時、近所では彼を近所の検査官と宣言した。彼は子供だったが、すでに時間の感覚を持ち、勉強もしていた。

そのとき私は、まだ若かったにもかかわらず、生きるために、そして父、母、家という自分の持ち物のために戦わなければならないことをすぐに理解した。というのも、母の給料は安かったにもかかわらず

、母は家賃に1万1,000エスクードを払い、父は家賃を払うだけだったが、食べ物に不自由したことは一度もなかったからだ。

つまり、疎遠は忘却につながるということだ。

父を失った私は、父と同じように反応しなければならなかった。

私は彼を英雄として、戦う男として、謙虚な人々の息子として見ていた。祖母のエルヴィラは、私が6歳になるまで、学校に行くまで一緒に暮らした人だった。私は祖母に慣れ、父の直接の付き添いから独立して卒業していった。しかし当時、私の目はまだ大きく開いてはいなかったが、時間の感覚はあった。

瞬間的な感覚はあった。

世界で最も純粋な口座のひとつだ。なぜか？

今や、地位や社会的階層に関係なく、誰もが自分の生き方を前面に押し出すことができる。

だからこそ、具体的な証拠なしに、つまり具体的な方法で、誰も本当に非難されることはないという考え方が、そこから始まるのだ。

なぜですか？

このように法律は管理されており、私たちは誰でもアクセスできる。

しかし、人類の黎明期まで遡ることができ、そのような出来事が次々と起こった。

私たちは継続性であり、常に継続するもの、運命づけられているものなのだ。

そしてそれは、私たちが大義のために生きているという絶対的な確信である。

どうだろう、テーマを変えることはできるかもしれないが、読者の読書の邪魔になるかもしれないし、実際に起こった話から注意をそらしてしまうかもしれない。

しかし、私たちが経験した状況をよりよく特定し、理解できるようにするため、これらは本全体を通して常に存在するたとえ話なのだ。

なぜですか？

しかし、人生において非常に重要なことがひとつある。

父はいつも私を見ていて、私を王として見たがっていたが、私は王であり、常に勝つことのできない戦士であり、私はとても若い時から始めた。

簡単なことは簡単ではなく、難しいことなのだ。

彼女の顔を平手で殴った後、私が感じたのは、彼女を失ったということだった。私はそれを目で感じた。後に彼女は私とよりを戻そうとしたが、私はそれを受け入れなかった。そこから犯罪の本当の物語が始まった。しかし、私にはすでに過去の前科があった。サンタレムの軍事刑務所に6カ月服役したとき、私はすでに別

居していた。

当時、アルナルドは有罪判決を受けていた。つまり、この人物の物語は、刑務所という環境における私の道筋に合致している。

獄中で6カ月後、彼はローマ教皇によって赦免された。

ティナとはすでに別れていた。それでどうしたかという
と、運を試したんだ。

大工の助手としてポンティーニャの地下鉄で働くことも
できた。黒人たちは私を恐れていた。私はカーボベル
ルデ出身の黒人たちと働いたが、彼らは祖国では得ら
れなかったより良い生活を望んでいる善良な人々だっ
た。

彼らは自国では得られないより良い生活を求めてポル
トガルを探し、その結果、自国から移民することにな
った。

ポルトガルは近いから探しやすかった。

カーボベルデ人は不平等と戦わなければならなかった
から悪い人たちと呼ばれていたし、彼らがここポルト
ガルに到着したときには、海外戦争が終わっていたの
で、あまり受け入れられていない人たちだった。

8歳のときに両親の別離を経験し、すでに勉強していた
私は、それが自分にとってうまくいかないことをすで
に知っていた。

その喪失感を見て、私は幼いながらに母を助けなけれ

ばならないと思った。

私がまだ17歳だった頃まで、毎年夏休みは彼と過ごした。

その後、軍隊にいたときも続けたが、当然のように禁断症状が始まった。

当時、彼はフィゲイラ・ダ・フォスの輸送サービス学校にいて、私は休暇を彼と過ごした。

父は14歳で父を亡くし、辛い子供時代を過ごした。

父は、彼の別れは愛情に満ちたものであったと報告した。それは、急いだ別れであったため、彼が好きだった別れであった。その別れ以来、彼は二度と父に会うことはなかったが、彼は母を助けながら懸命に育ち、母の家で最も長く暮らした息子であった。

私は祖母と6年間一緒に暮らしたが、祖母はどんなにタフだったかという、どん底から生まれ、懸命に育ち、子供たちを決して飢えさせなかった。

当時、彼は鉱夫だった。彼は鉱石取引を探していたが、そこでは成功せず、サイクリストでもあった。

彼は普通の人間になり、人生の必然によってそこに入った。

彼はタフな男で、友人の友人であり、子供たちの友人だった。

彼はいつも、私にそれを残したいと思っていた。しか

し、私は少し離れてしまい、在り方や生き方、乗り越えるべき困難や人生の障害について、それ以上追求することはなかった。

子孫を残すことができるよう、未来を確保するために働く。彼らは皆、良い子供たちであり、私たちは彼の子供にふさわしい。

心理的なむち打ちは私を悪化させるだけだった。なぜなら、善は実践されるべきものであり、分離によって悪を受け取るだけで、私の思考には悪しかなかったからだ。

そして、非難という行為に至るまで、すべてがそうだった。どこから始まったのか？

私はすでに別れを経験し、そこから孤独に足を踏み入れ始めた。しかし、それは過去からすでに持っていた私の生き方であり、そこで私は失望したときの心配から解放された。

私は自分の生き方を消費し、盗み続けた。それでも彼女を探し求め、何度も探し求めたとき、彼女は再び私を受け入れようとした。

だから私はこの情熱に尊敬の念を抱いているし、こんな情熱は他にない。

そこでの私の物語は、勇気によって制限される存在の勇気によって、他人の世界に対処しなければならない

ことによって始まる。

犯罪を犯して刑務所にいる人たちと付き合うのは簡単だ。愚かさの法則が支配する世界だ。愚かな人たちと付き合うときは、彼らとの付き合い方を知らなければならない。しかし、頭が良すぎると転落する可能性がある。だからこそ、そこでの人生は陸にも海にも導かれないといけない、それが私の救いであり、私が選んだ方法であり、私を勝たせたのだ。しかし、私の始まりは長く、悩ましいものだった。妻もなく、自由もなく、追い詰められ、迷っている自分を目の当たりにし、若かった私は、そこで過ごすことになる数年間に起こりうるすべてのことを考えていた。そこで私はどうしたか？ 尊敬を得ることから始めた。暴力的な争いに巻き込まれたくないとはいえ、それは簡単なことではなく、暴力的な争いが起こるのは、彼らが日常的に行っているからだ、コカインの使いすぎですでに刑務所に入っていた私は、ヘロインを吸い始めることにした。冗談半分に、ほら、ヘロインを吸うぞと。しかし、すでにハマっていることに気づくと、何もできなくなった。しかし、やり方を覚えた。しかし、これは後で話すことになる。だから、始まりはこうだった。快樂から逃避する現実があるにもかかわらず、刑務所での生活を送るために、私はヘロインの使用に身を委ねた

だけだった。セックスをするという考えから距離を置くことを知っていたからだ。私は、セックスについて考えさせない化学物質によって養われていた。合法的なプラトニックな愛もあったし、素晴らしいものも手に入れた。でも、それは保証されたものだ。でも、ただ実験するだけではダメで、ただ吸いたいだけではダメで、常に他人を見るリーダーになりたいという側面がある。

しかし、この教訓をもっと早く学んでいれば、刑期半ばで刑期を終えることができただろう、それは終わりの始まりであり、辛い始まりだった。しかし、麻薬を吸った年月を後悔することはできない、しかし、これはすべて主観的なものである。なぜなら、私たちの幸福は、私たちを見ている人たちを喜ばせないかもしれないし、様々な点で不愉快にさせるかもしれない、第一は盗まれるかもしれない、第二は奴隷になるかもしれない、働くかもしれない、第三は乳母や主婦になるかもしれない、たとえ刑務所の中でお金を払ったとしても、友情を買うことは決してできない。刑務所の中での対立はとても厳しい。何も持っていない人たちがいる。刑務所の中での対立は弱く、一方では弱く、全体では強い。戻るため、逃げ切るためなら、1億でも何でも差し出す。でも私はこの道を歩きたかった。

私は常に心理的な側面が強かった。

それ以来、私は刑務所の中で善の道を見つけることは二度となかった。なぜだろう？ 他人の目には私はピラニアにしか映らなかったからだ。ピラニアとは私たちが使っていた俗語で、怠け者という意味だ。自分が諦めたこと以外は、どんな大義にも身を捧げようとしないう者、常に神に屈服する者の道を歩む者、力はそこから生まれる、希望と信念という信念から生まれる。

しかし、私はそんなことお構いなしに、彼らは私を生かし、決して危害を加えようとはしなかった。

これは、合法的な生き方が保証され、間違っただけであれば何でも主張できるときに常に存在するもので、だからこそ保証された支援と呼ばれるのだ。法律の中では、私たちが制度に押され、敗北したときに間違っただけのことを教えてくれるのは彼らなのである。

彼らがいくらあなたを信じていても、彼らは役人であるため、それを変えるために何もできない。彼らは、司法が定める要件がなければ、行動できないことを伝えるだけでいい。

問い合わせ 私は刑務所内での動き方を知っていたから、いつも安全だった。腐敗した看守も知っていたし、刑務所に麻薬を運ぶ連中も知っていた。

逮捕された警官の中には、すでに知っている者もいた。そのうちの一人、アルフレドとのエピソードは際立っていた、彼は警官で、私は彼との人生であまり良いエピソードはなかったが、リンホー刑務所で私を殺そうとした。私は職員全員を知っていたし、職員も全員私を知っていた。そのエピソードは、囚人たちとの関係において、刑務所全体にとって悪いものだった、カーボベルデ人が私の組合になると前述したが、それは間違いではなかった。実際、彼らはあのエピソードの借りを返そうとして、私を殺そうとした。

しかし運命の皮肉なことに、そんなことは何も起こらなかった。彼らは彼を殴っただけで、殺したりはしなかった。彼は自分を取り戻し、私との友情を強めようとしたが、彼はそのエピソードを決して忘れないと心の中でわかっていた。私はただ、彼が謙虚さを持ち、囚人たちではなく刑務官たちの奉仕活動によって、私について言われたことに惑わされたという事実に対して彼を許しただけだ

彼は私を倒すことはできない、死という早い代償を払うことになるとわかっていたからだ。

- ネルソン、この男をどう受け入れる？

彼はプロフェッショナルであり、警官として多くの知識を持ち、トップや有力者を知っていた、でも私は彼を生かした。彼は私たちの仲間だった。私が言ったカペベルデ人とは、ネルソンとカルロスのこと、彼らはまさに私が育った地域に住んでいて、私の肩代わりをしてくれた、カルロスはPSPのエージェントに射殺された。彼は参考人になっていて、とても殴られていた、僕はマヌエルやロマンやバドーナのスポンサーになっていたし、兄弟のように付き合い、助け合い、僕らの間にはすべてがあった。

牢獄、つまり、ある者の福祉を保証し、私の福祉を得るために、つまり、片手でもう片方の手を洗うのだ。

相互扶助をモットーにしていたが、要請があれば常に状況に巻き込まれる危険性があった。リンホーで殺人事件があったが、私はそれを疑問に思ったことはなかった。

リンホウでの8年間の後、ユダヤ人の谷に移されるまで、すべてがとても速く進んだ。彼らは決して私を望まず、私をよく受け入れてくれた。彼らは私に危害を加えようとしたが、私を尊重してくれた。彼らはいつも私の不注意を待っていたが、私はそれを決して与えなかった。法務局の役人だった女性がいたが、彼女は私を気に入ってくれたので、私は彼女を快く許した。彼らが私に罫を仕掛けた日は、まさに私がかつてないほど力をつけていた時だった。私は警官とあまり話したことはなかった。危険なことだった。私はどんなことにも備えていた。

悪に関係なく、その事実のために私に起こりうる悪に関係なく、私は未来に基づいた教育を受け、それで生きていくことができた、どんな虐待も許さないという

のが、私の生き方であり、考え方であった；

自分自身を解放し、自分自身が本当に支配的な存在であり、全銀河の所有者になるという幻想に誘い込まれ、つまり、すべてが機能不全に陥り、すべてがそのために準備されているのだ。彼らは雇用主であり、盗むという冒険の従業員をコントロールせず、合法化されていると言えるのだから、それは欺瞞の一形態なのだ。私にはもうひとつあった。それは、勝つこと、死ぬこと、逃げ場のない、すべてか無かの瞬間だった。それが私の中にあるモットーだった。生きていく力、投獄されている間に得られなかったものを享受する力、私は仲間に対して無償の暴力は決して使わなかった、仲間は無償の暴力を振るうことはなかった。暴力に支配され、おそらく人身売買業者の思うままにさせられている他の仲間たちが行使している悪を目の当たりにして、涙が出そうになった。しかし、私はヘロインにしがみつきながらも、より困難な道を歩むことはしなかった。刑務所の中で生きるためには、殺すことも厭わないし、最後には彼らに迷惑をかけないように堂々と生きようと心に誓った、結局のところ、私たちが対処しなければならないのは、すべてその時々逆境なのです。存在しないところに敵を作り、自分自身を悪く歩

ませることは私の望みではありませんでしたが、私に危害を加えようとする人たちがいました。経営陣は私のことを嫌っていましたが、その時こそ彼らがやったのです、彼らは良心の呵責を感じていた。しかし、あることが私の注意を引き、私を変えさせた。

リノで8年間収監された後、私は刑務所のレベルに膨大な歴史を残した、彼らは本と卒業証書だけを持っていて、それが私との違いを作っていた、時代は変わり、人生は刑務所の中ではなく外にあるのだと気づき始めたのはそのときだ；ドラマチックな物語が始まり、殺人に至った。3人の兄弟がいたが、みんなヘロインを使っていた。

しかし、心の奥底では謙虚な人たちであり、善良な心を持っていた。彼らは助けられる必要があったからだ。

しかし、これらすべては生き方の結果であり、原因を動かすものである。なぜなら、私は経験や状況の文脈に関連して詩を作ったからだ。

しかし、私は自分の道を見失い、消費に走ったときに、この生き方を採用した。

経験、生き方、ヤクを手に入れる方法、ヤクを吸わせる方法、ヤクを勧められても買わなかった、私は売人のポン引きになり、売人からあだ名を付けられた。

しかし、私はスポーツマンシップとトレーニングの練習熱心さで知られていた。

刑務所に入った後、社会的な環境に溶け込むのは大変だった。なぜなら、そこは私たちが知っている環境であり、日常的に共存している非常に狭い空間であり、私たちは皆、お互いを知っている。

私たちは皆、自分が主導権を握りたいのだ。

常に恐怖と隣り合わせの環境に身を置き、自分自身を確信できる空間を征服したい、しかしそれは恐怖ではなく、単に確信することである、犯罪について話するとき、それは巨大で、あなたが考えることができるすべての巨大なものです、だから、あなたが正しいと言われる方法で、社会と法律の目に受け入れられるように、利益を上げるために役立たないことを考えることができるすべてのもの、その後、紛争が始まる、我々はすべて、そうするために発明しなければならない場合でも、勝ちたい、この場合は、窃盗、密売、要するに、難しい容疑、また、慢性的な依存がある場合、中毒者自身は逃げ道がないことを知っており、依存の要因に非常に臆病で、命令され、服従させられ、ヘロイン中毒の息子を見る痛みを感じている家族から金をゆすり取り、人間の尊厳が失われる可能性のあるものすべてを想定している、言い換えれば、搾取である、私たちが受けてきた教育の価値観をすべて失うこと、人生の誰かであること、私たちが教えられてきた生き方をすること、それは私たちが社会秩序に従うことに慣れている価値観であり、両親が私たちに残してくれた倫理的価値観であり、私たちが何人の子どもを産もうともそれを宣言すること、これが私たちが教える教育で

あり、常に延命であるからだ。

聖書には、人は子孫を残すために生まれてきたと書かれているが、カインが弟のアベルを殺したが祝福され赦され、彼は誤りに導かれたとも書かれている。人生の中で、私たちが

それは、彼が生活し、成長した法律の経験と形式によって書かれたものだからである。

なぜですか？

理性の力は常に勝ち、人が人生に対して下すすべての判断は、時として、ひとつの要因によって重くのしかかり、すべてが最も正しいとは限らない：誹謗中傷、面白くないこと、優越感に浸らないこと、誰もが軽蔑し、辱めたいと思う存在であること；彼らはこのように良い感じと経済力の不足があるとき、我々は常に遊ぶことに制限され、それはまた、これはゲームであると仮定されているため、つまり、あなたは運があなたをヒットし、あなたが探しているものを与えることができるように、これらの一般的なことわざを再生する方法を知っている必要があるという人がいる、私たちは両親、兄弟、姉妹、祖父母、祖父母と共通の人生を歩んでいる、つまり、彼らは、私たちが自分自身を知る能力を持っていること、彼らは私たちのものであり、彼らは常に私たちの側にいる私たちのものであることを知っているが、彼らは決して見ることを好まない、彼らを喜ばせることができない家族の一員を持つことを好まない、一日の終わりに、私たちは皆人間であり、互いに

対処し合わなければならず、家族という環境は時として私たちを歓迎しすぎる。

読める神学的読み物、すなわち宗教研究。

私たちは皆、道徳的な教訓を得る。そのような忠実な近さを感じる人たちが、私たちの善良な人たち、私たちの愛する人たちを見ること、何があろうと彼らをよく見ること、そして彼らを決して傷つけないと思ふこと、彼らが守っているイメージ、彼らが教えられたイメージ、彼らが支配された価値観の観点から、おそらく解決できるかもしれない状況をよく見することを許さないのは適切なことだ。これは、すべてが非常に美しく、メディアもまたこのように発信する、ちょうどファサードのように、美しいイメージを見せよう、彼らもまた、私たちすべてが統治を受け入れる権力によって圧力をかけられている、非常に難しいテーマだが、それは報道されることになるこのすべてに関係している、それは存在する、私たちは存在する、私たちは存在し続ける、教育もまた、理性の所有者であると主張するこれらの人々に与えられ、時には彼らは発信し、不統一を望む、彼らはすべて、福祉を維持するために1つの共通点を持っている。しかし、彼らは皆、父と母のもとで暮らし、育てられ、人が熱望する職業で進歩できるような適切な条件を与えられたが、また失敗もする、しかし彼らはいつも忘れ、イメージに支配

されている；私の人生は莫大なものであり、多くのことを学び、刑務所にいながらも発展させなければならないものを発展させてきた。私の刑務所でのキャリアはこう呼ぶことができる。

これは二国間関係と関連している。これは二国間関係に関連するもので、すべての国によって統治される関係であり、商品を保護するための共同体の利害に関する問題であり、世界に確立された福祉を与えることができるようにするものです。自由は語るのが最も難しいテーマです。私たちはすべての自由を与えることができ、世界で最も美しいものであり、人生で得ることのできる最大の喜びであり、自由の中にいることです。その障害には実にさまざまなものがある：私たちは皆、醜くても美しくても構わないし、一緒に暮らすことに慣れる；しかし、それはアポロの側面であり、ニーチェが描写した美の側面であり、私は彼の自伝に従ったのである、地球の上に存在するすべての存在について語る時、彼らが誰であろうと、政治家であろうと、裁判官であろうと、市長であろうと、協会の会長であろうと、誰もがそうである可能性があり、テレビの司会者であってもカリスマである可能性があり、感謝の気持ちを持つ可能性がある。それは、彼らが罰せられない権利を得たときであり、法によって定義されるためである。

虐待は存在し、これまでも存在し、これからも存在する。

私たちは皆、超越とは超越以上のものであり、存在することであり、存在できることであり、すべてを教え、持つことだと知っているから生きている：哲学、生き方、生きる喜び.....これこそが超越の要因のひとつであり、私たちは存在し続け、同じように生き続ける、それは私たちの運命であり、私たちはすべてを学び、偉大な価値の遺産が私たちに残されている。

なぜですか？

私たちは合法化された民主主義の奴隷であり、囲い込まれ、より厳しいルールに服従させられている状況を利用しているのだ；時には、なだめるような方法で通常と同じように反応しない、存在の超越、存在の最も残酷な側面への変換と呼ばれる、それは私が感じたものです、私は怒りとは生きるための生計であることを経験から学んだ、生きて生き残るために見て、そうでなければならぬときに生きるための安全な方法として支配されている科学の価値観によって証明されている、私たちは質問から逃れることはできません、私たちを構成する私たちの特性は多様であるが、すべて同

じ、神秘化から来ている、これ以上完璧な存在はありません

他の誰よりも、誰もが生きる方法を知っている。そのためには、存在全体に対する保証された信頼できる支援が必要である。私たちは協力して働き、他の人々がより良い生活、失業、正当な理由を持てるように現金化する。これは、皆さんが私と共有する経験である。

両親が別居してからすべてが始まった。私はサン・ミゲルの修道女大学に入学した、私は無邪気で、法の力が存在することは知っていた。父は軍人だった。父が話してくれた、軍務に組み込まれた男であること、彼は国家のために尽くしたこと、すでに述べたように厳しい男だったが、別の女性を愛する情熱に身を任せていたこと、善良な男で、肉体的にも力強く、知性もあったこと、彼の遺伝子を受け継いだ私はその恩恵を受けていたこと、彼をヒーローとして持っていたこと、これらはすべて、後に変容することになる学びだった。

なぜですか？

母が恋人を作り、社会人になった。彼は郵便局で働いていて、仕事もしていて、価値のある人だった。

私は勝った、これが最も適切なテーマだと思う、私は他の誰よりも彼らを愛していた、幸いにも彼らは元気で、彼ら自身の人生を持っていた、口論をするのは普通だった、しかし彼らは常に正しかった、私はもっと欲しいという超越によって眠っていた人だった、私は何もせずに手に入れたかった、私はそれが簡単だと思っていた。

母の手伝いをするために働き始めたのですが、すぐに自分が支配されるのはまっぴらだと気づき、型枠や布張りの構造を作るカスケイロ（布張り職人の手伝い）の仕事を始めました。

そこで働いていたキャスターという、ソファを張り上げる構造の人がいたのだが、彼は見た目が遅しく、私はもう彼や攻撃的な話し方に我慢しなくなかった、自分には生きる力があると感じていたし、それが重荷になることもなかったが、あの日、彼を傷つけない、怪我をさせたくないという理由から、自分を貶めることもできた。

それでも彼らは私を受け入れてくれて、私はそこで働き続けました。その後、私は自分の意志でそこを去りましたが、オーナーはヒブ病に冒されて亡くなりました

た。

1996年3月、私は地下道で発見された。地下道ではすでに一連の強盗事件が起きていて、そこで起きていた犯罪を糾弾していた。たまたま通りかかったPSPが、私たちに身分証明書を求めてきた、リカルドという男は用心深く、経験が浅く、オバールから来ていて、街のことは知らなかったが、道には詳しかった。

しかし今、ここに構造が入ってきた。人の忠誠心の能力の主な要因のひとつである、とりとめのない話が始まる。こうして私は、知らなければ信用できないということを手で知っていたことを発見したのだ。しかし私の経験は膨大で、それは大きかった。私は自分に自信があったし、自分のやることに長けていた。すでに武装強盗を何度かやっていた。私は誰にも危害を加えず、ただ金を得るという道を選んだ。

何のために？

1996年3月、正確には28日、私は逮捕状が出されたと思われる警告を受けた。このテーマの導入部を付け加えるだけで、私はベンフィカのスーパーステーションで逮捕される1週間前に、車の中で寝ていた、持ち主は空軍の中佐で、すでに海外に行っていた男だった。私はそこでよく寝ていたが、ポンティーニャにはまだ家が

あった。実はその夜、私はリカルドと一緒にいて、リーダーを盗み、車の中で寝ていた、

ベンフィカのスーパーチームに所属するPSPのエージェントに驚かされて起こされたんだ。でも僕はすねなかったし、リカルドにはすねないように言った。このようなことがあった。男が教え、起こりうる瞬間の状況を訓練するときを感じる最悪の疑念だった。その日、私は逃げおおせた。彼は何も言わないという私のルールをなんとか守ったが、彼らは納得せず、強盗、青いCDプレーヤーを知っているかどうかを調べるために、近くのバレーパーキングをすべて捕まえに行ったが、我々は以前にいくつかの犯罪を犯しており、すべて強盗と誘拐に挿入された、リカルドの会話は知らないが、同じような状況で前の週を過ごした過去があったので、信用した。

その日、私たちは警察署を出た、私は何も言うことはなかった、彼の証言を信じていたから逃げ切れたんだ、当時、私は運転免許を取得していた、私は働いていたが、すでに失業手当を受け取っていた、私は免許を取得し続けた、私はコードをやりに行った、合格した、私はすでに運転していた、その時、司法から逮捕状が出されたんだ。自宅まで迎えに来てくれて、ジムから来て、1カ月以上トレーニングしていたんだ。

私は何も言わなかったが、リカルドはすべてを話した。事実認定の段階では司法調査だった。だからその決定を受け入れることができなかった、それは自首するようなものだ、違う態度をとったほうがよかったのかもしれない、真実を話し、協力的で、悔い改めるべきだったのかもしれない、でも私は自分の知恵で自分を判断した、正義で勝負したいとも思った、私に判決を下した裁判官は、彼の人生に問題を抱えた人物だった、娘の一人が過剰摂取で亡くなり、残された息子たちも麻薬に溺れていた、私は弁護士から警告された、真実を話すか、さもなければ難癖をつけられるか、でも私は自分を信じた。

彼女はすべきように私を弁護せず、法の代表として果たさなければならない職務の正当性を運用する方法を知らなかった。当時、私には個人的な弁護士がおらず、一度も与えられたことがなかった。逮捕された後、有罪判決を受けた後、刑が確定した後、私はその弁護士を雇わなければならなかった。私はその弁護士を雇ったが、それはすべて私が蓄積したかったエネルギーであり、私が岐路に立たされていることは分かっていた。

それは私にとって悲しい一日だった。私はどんな不

利な状況でも生き延びようと心に誓った。

この勝利の時、私は自分を通して自分の守備を高めることができる術を学んだ。

私たちが何かを獲得したいとき、私たちは取引しなければならない、彼らは作品の所有者である、つまり、彼らが支配する領土を所有している、彼らはそうだと思う、彼らは関係なく、忠誠の道を追求するために、それが見えるかもしれない、かもしれない、誰もが持っているかもしれないが、失格である服従があります、彼らがこの地位にいるとき、彼らは自分たちが状況の支配者になれると思っている、彼らは生きなければならない最も単純な存在に諦めていない、これが彼らが研究したことの予後であり、彼らが犯した災難である。P.リンホーにとっては厳しい門出だった。非常に厳しく、私は怒りと勝利への意志でいっぱいだった。私は戦い、闘い、成功した。そうでなかったら、私は忘却の彼方だっただろう。誰もが私を覚えていて、誰もが私を思い出したがる。私は特徴的なイメージだった。私は、愛することを知らない地味で冷たい指導者になり、そうやって私は刑務所内での栄光を征服した。彼らは、勝つために生きる方法を知り、地球の頂点にとどまらなければならない者の冷たい行為だった。私はすぐに、教育係、助手、看守、そして直接の職員に、彼らが困難な戦いに勝つために私を助けてくれることを示した。

イザベルは、私が健全で心地よい尊敬の念を抱いていた学校の校長の名前である。彼女はいつも私に付き添い、いつも私を助けてくれたが、後に私の怒りを買うようになった。しかし、私はいつも彼女を尊敬していた。そしてそれはすべて、校長の名前がジョアンGであった行政システムによる強い圧力のためであった。海外から来た彼は、彼らが彼を殺そうとしたときに逃げ出した。彼の話はよく知られている。彼は私の転任後まで、数年間リンホーの行政を担当していた。私は彼のことをよく知っていたし、彼は話すことができる男で、コミュニケーション能力があり、その話題に興味を持っていた、彼は私を誤解していた、たぶん代議士のせいだろう、私はプロフェッショナルなサイクルの中でよく見られていた、交友関係のレベルでは誰もが私を尊敬していた、あの監督は自分のキャリアのピークを望んでいた、つまり、私は支配するためにここにいる、私はどんな犠牲を払っても勝つためにここにいる、私はよく見られる、それが彼の目的だった、とりわけ彼はもっと言うことができた。彼が最も擁護した目的の一つは麻薬密売で、彼は麻薬中毒者を助けるのが好きだったが、それと引き換えにコインを要求し、法律をもてあそび、不安定で条件付きの出口や開かれ

た体制の出口の適用を左右する力を持っていた、しかし私は従うことを選んだ。私のために運命づけられた道を歩むことを。運命について語る時、時に私たちはそれを正しく理解することがある。

しかし、逮捕されたことで好奇心が湧き上がり、私は兄と大喧嘩をした。当時、私たちはよく水蛇を狩りに行って狙いを定めたり、スヌーカーをしたり、時には手強い相手と対戦したがいつも勝っていた。父は、私にできる最も直接的なサポートをしてくれた。今はリンホーに入所している最中だが、それは勇敢なことだった。入所してすぐ、看守は私のことを詳しく知りたがった、1996年から1999年までの3年間、私はその所長の下にいた。彼は所長を解任され、教区評議会の会長になったが、リンホーを去ることになった原因を取り除くことはできなかった、彼は善良な男で、すべての人の幸福を願い、同時に誰にも危害を加えなかったが、工事の必要性があった。殺人棟と呼ばれていたB棟では、あらゆる面で、インフラが整備されておらず、パーラーで面会を受けると水が落ちてきた。

練習場のピッチ、つまりサッカーのピッチは泥だらけで、とても重い土だった。それが彼のニックネームだった、私は16年の刑期の半分を終えていた。秘密の信託のために8年間服役していたが、これが最善の形で終わるはずはなかった、私がリンハウにいた3年目、汚職のジレンマが始まった。麻薬の売買は局長によって許可され、彼らは信頼する囚人を使ってすべてを管理していた、Skipという会社からの提案で、バッグを作り充填する際、XISに報酬を支払うことになり、私はそこで働くことになったのですが、その機能を行使しようとしていた男たちが麻薬での支払いを許可し、コンピューター経由で送金されたお金を保管していたという事実が受け入れられず、マヌエル・T.の本当の問題が発生したのです。それまでは、どうすることもできなかった。司法調査が行われ、意図的な送金が行われ、つまり、イメージを一掃しようということだった。しかし、すべてを一掃することはできなかった。裁判になり、司法調査には被告がいて、さまざまな証言がなされた。しかし、私は証言しなかった。そのように呼ばれることもなかった。私も多くを語るつもりはなかった。ただ、自分の利益を守るためだった。その原因を処理することのほうが価値があると思った。

厳しい代償を払う。

看守のスズメは刑務官から外され、アモリム署長は早期退職を余儀なくされた。それでも彼は教区の管区長まで上り詰めた。

経営陣の交代があった。彼はP.E.の経営陣の中で次に続く名前だった。B棟の改築工事が始まり、棟の半分が工事のために閉鎖された。彼は大学教授の母親の息子で、校長の秘書を務めていたが、時々麻薬中毒になった、慢性的な麻薬中毒だった。私は彼に同情した。彼はいつも負けていて、進化することができず、消費されることをあきらめていた、ヘロインは私を野蛮な存在に変え、完全に支配した、誰かが苦しんでいるのを見るのは、私の怒りのピークだった。

でも、ヘロインをやっていたにもかかわらず、誰も私に反論しなかったことに、とても腹が立った。彼らは皆、私を尊敬するようになった。彼らは皆、犯罪に手を染めていた連中で、私たちが挿入されていた環境では顔見知りだったし、尊敬されていた。彼ら自身は私を嫌っていた。彼らは勉強に行くために私にヘロインを勧めた。私が健全な職業に就き、学ばなければならないと彼らが考えた唯一の方法だった。それは消費のサイクルの継続だった。私は気分が良かったし、それに慣れていたし、食べたりセックスしたりしたいという欲求を奪ってくれた。セックスや食事の問題を気にすることなく回廊で過ごすには理想的な方法だった。

1998年にヴァレ・デ・ジュデオスに赴任し、大工コースを受講した。

私はそのまま拘置所に入った。いわゆるレジーム111、懲戒処分や結果につながるかもしれない査問を待つ、厳しいレジームだった。時々、テレビを持ち出し、質に入れ、レンタルして、気分が落ち込んだときに消費していた。でも、テレビには無限の愛があった。

私は111番地に入り、刑務所の責任者であるアモリム酋

長の話聞いた。モザンビークの子孫だがポルトガル人で、背は高いが痩せていて、悪人ではなく、ただ領土を支配させたかっただけで、静かにさせたかっただけだった。

その時、私はボスのオフィス、つまり彼のデスクを出た、彼は誰にも危害を加えようとはしなかった。彼はボスと同じで、元気でいたかった。私はこの警備員に驚いた。彼は私を襲おうとしたが、できなかった、しかし、彼らの主張が私の抵抗となった。その時、50代の鉄の看守が現れ、私に話しかけ、やめるように、誰も私を襲うつもりはないと言った、ボスは私に手錠を外すように命じ、独房の中に入るように言った。

正直なところ、私はその男に尊敬の念を抱いた。彼は上司であり、抑圧の力を代表する機関として、すべての人が気持ちよくなるように、すべての人によく命令されるべきであると、模範を示してくれた。私にとっては、彼は私が今まで会った中で最も人間的なボスだった。私は論理的であろう罰に会った、私は行為自体の代償を払わなければならないだろうが、私はまた、彼らの尊敬を得た、彼らは直接的な生活に干渉するのを止めた、それは生き残らなければならないということである、刑務所の中でさえ人は生きている、私はそれを人を寄せ付けない場所と呼んだ、フレーズ自体によって同一の存在である、何もない場所に、私たちは生きているだけで生きている、しかし、我々はしなければならない

マレアソンシュ（mareações）とは、犯罪生活で使われる俗語で、つまり殺人を意味する、私が彼に会ったのは、セキュリティ・パビリオンで刑に服していた時だった。すでに数年前のリンホーの若者を見かけ、私は彼と接触してタバコをもらったが、彼を放っておいた。

委員会が彼に会えなかったのは、私たちが遅かったからだ。

彼はB棟にいた。殺人犯とみなされる棟だ。彼はA棟にいた。穏やかな棟で、刑務所で働き、穏やかに過ごしたいと願う受刑者が収容されていた、麻薬の売人もいたし、今も刑務所にいるデルフィムという男もいた、知識の中に存在する歴史的な絆のために、そしてそのようなものとして見られるように、彼らは生きてきたことの厳しさを持っていた。しかし、路上で寝ない、屋根がある、といった最低限の条件は満たされていた。どんなに惨めであっても、彼らは教育を受け、家は清潔に保たれ、本物の教育を受けた人たちのように整頓されていた。

子供たちは成長し始め、親元を離れて多くの時間を過ごす。大人になるためには、自立し、自給自足し、良いものを探すことが正当な要求だ、しかし、その後、私は目を合わせなくなり、もっと直接的に接触する時間もなかったのだ、彼のことは覚えていなかった、インテンデンテで彼を見たことを思い出したのはそのときだった。そこでは闇の取引が行われ、闇市では誰も傷つけない限り、すべてがうまくいく、無法者、社会の片隅で生きる男、しかし、私たちは皆、自分自身を保証し、幸福の面倒を見ることができる、人間の平等を保証された幸福を持ちたいと思う。

ティキーニヨは移籍の夜からその日の朝、a棟に戻った。ティキーニヨは方向性と合意していた、その夜、私たちは窓越しに話をし、そうやって連絡を取り合った。

その夜、翌朝になる前に私たちは窓越しに話をした：

- 誰だ？

私は何か物音を聞いたことがある：

- 僕はフーゴ、ここにいるプラス、ティキーニヨだ。

b棟に移されたその日に、彼らは罪を犯したという事実に対して、彼に制裁を加えるというのが彼らのやり方だった、

それは義務だった、彼はそれを要求した、大きな意味で反抗的な少年だった、暴行が起こったのはその時だった、私はドアを開け放して外に出なかった、しかし私は彼がそうすることを知っていた、私は彼がa-wingに熱いものを感じたことを知っていた、熱いものを意味する俗語もある、これは犯罪の俗語で雨の中を歩く者が濡れるという日常的な出来事として理解できる。

朝食を食べ、それから電車に乗り、学校に行き、授業を受けるといういつもの日課をこなした、午前中、彼らは私に告げに来た。同じ使用者である少年たちはピラニアと呼ばれ、彼らはより正直な方法で人生を求めていたが、中毒がそうさせたため、いつも人を欺いていた、彼はシェラスに住んでいて、エミリオ・バイロ・アルトにトラックスーツのズボンをあげたところ、エミリオから金を奪おうとした、エミリオ・ベアロ・アルトはベアロ・アルトで育ったが、生意気な奴で、育った環境が同じだった：ゼ・ボラは頑健で、体重は90キロほどあった。、ゼ・ボラは頑健で体重は90キロほどあったが、エミリオは典型的なアフリカ系の乾いた少年だった。

話し合いは簡単ではなかったが、彼には生きる知恵があり、この問題を乗り切らなければならないことはわかっていた。ゼ・ボラがトラックスーツのズボンを脱いで手に持った後、二人は口論になった；エミリオが勝つだろうとは思っていたが、こんな結末になるとは思ってもみなかった。彼は彼を3階から送ろうとし、彼の足をつかんだ。エミリオは学んだことを実行した。最後の手段、自分を救うのは自分だ。彼の首をつかみ、無理やり折った。つまり、首をつかんだ瞬間、彼は離さなかった。彼の目の前、あるいは独房の入り口には手すりがあった、最初の瞬間から、私は彼らが落下すると思っていた、私はその行動の予期を予測していた、しかし、その後、私は考え、私が見て予測した後、まだ数秒あった、私はそれは起こらないだろうと思った、しかし、それは起こった、エミリオは彼の首をつかんで離さなかった、そしてゼバルがした力で、彼は2つの記念碑的な力を共役させた、彼らは3階から落下した。被害はもっと大きいだろうと思ったし、あの状況でどちらかが死ぬかもしれないとさえ思った。でも幸いにも彼らは助かった、私たちが連絡を取り合うのは、その人たちが私たちを助けてくれるからである。

ゼ・ボラで腕を折られたが、エミリオには何事もなく、無傷だった。でも、その日は予防のために病院で寝ていたんだ。私は、彼らが逃げおおせたのを見て嬉しかったし、彼の行為を許した。

その日の午前中、たぶん11時頃だったと思うが、ゼ・ボラもセキュリティ・パビリオンに行っていて、ヒューゴも一緒だった、タオル1枚、シーツ数枚、読むための本1冊、独房にライターは持ち込めず、1日23時間拘束される。克服するのはいつも大変だが、結局はこうした制裁に慣れることになる。留置場での生活、拘置所での生活、そうした状況を経験したことがあるからだ。

すべての悪は、この罰と物事がそこに停止するだろうが、いや、強盗でヒューゴは胃に2回デルフィムを刺した、彼らは彼の小さなもの、ヘロインの数グラムと約30 contosを奪うために、男をひどく扱われ、それは約10グラムであろう、彼は列車強盗のために逮捕されたので、彼のニックネームデルフィム、パティーニャ、パティーニャのための価格を支払うことになる男、彼らは死者を作った、それはあった。

当時はとても有名で話題になっていた強盗事件で、トップクラスの強盗事件だった。強盗はシントラ-リスボン間の列車の出口で起こった。

フーゴは反抗的な少年で、粘着質だった。これらの出来事の後、デルフィムはコインブラ、ティキーニョ・ヴァレ・デ・ジューズに移った；1998年、より正確には6月27日だった。私はすでにフーゴと別れていたが、彼は別の独房にいた。彼を探し出した他の仲間はピラニアだった。毎日30～40グラムほど盗んでタバコを吸い、消費していたからだ。彼らは常に方向性を定めていたことで、群衆を惹きつけた、薬物中毒の後遺症と呼ばれるもので、彼が足を引きずった状態から抜け出したのはその時だった。

本当のアバズレで、友達との付き合い方を知っていたから、友達を惹きつけた。

その時その時の状況で私と共存していた人たちは、私の悪口を言い、私の悪口を言い、すべてその子が手配してくれたものをなんとか利用しようとする意図で、自分のために気を配ってほしかったし、自分のために気を配ってもらうことで、自分が元気でいられるように、言い換えれば、いつも二日酔いを解消してもらえるようにしたかった、しかし、彼らはいつも私を必要としてくれたし、彼らもまた私を必要としてくれた、ユーゴ・ラスタガヴァレ・デ・ジュデウに到着したとき、私は彼を兄弟として迎え入れた。ユーゴとはすでに友情で結ばれていたからだ、彼はその男を3階から降ろそうとしたが、いとこのベントがそれを阻止した。しかし彼は私の独房に私と一緒にいたくなかった。

ティ、誰も復讐なんてしないよ。僕はデルフィムと
はいい関係だったんだ。何度か彼に、彼らが彼にし
たことが気に入らないって言ったんだけど、彼はも
う忘れたって言ったんだ。

フーゴ・ラスタとカデテは、リンホで起きた殺人事件
で告発されたんだ。チキーニョ、ジョンソン、本物の
サッカー選手で、彼がいた、あるいはいたチェーン店
の全チームの代表選手だった、トニ・ガイボタ、彼は
リンホの麻薬の売人からも金を奪っていたから、移
籍させられたんだ。

私は女性に依存して生きるのは好きではなかったが、
彼女と一緒に暮らすほどには彼女のことが好きだった
。当時、私はコカインしか使っていなかったの、彼
女がヘロインとコカインを使うことはあまり受け入れ
られなかったが、私は彼女のことが好きだったし、ゼ
・トーとアナも麻薬中毒者だった、その後、私は刑務
所内で麻薬中毒になり、私がヴァレ・デ・ジュデにい
た間、ラスタ、チキーニョ、楽しい時間があった。

そこは危険な刑務所という評判があり、常に殺人事件が起きていた。

デルフィムとピノキオの争いが始まった。ピノキオは国際的な麻薬密売の罪で服役中で、デルフィムが首謀者だった。ピノキオはデルフィムをボコボコにするためにフーゴに多額の麻薬を支払った。彼は調子に乗り、ロッカールームでフーゴに暴力を振るった。

それはあまり気持ちのいいものではなかったが、ある時、私にはすでに前科があり、何度か服役していたため、問題が起こり始めた、毎日タバコを吸う必要があったから、集金を始めたんだ。その集金の中にマルカオが現れた。私たちは言葉を交わし、彼は身体的な力を見せたが、何も起こらなかった、

私たちのチームは、トニ・ガイボタ、ホルヘ、ゼ・ト、ルイスで構成されていた。私たちはアスリートで、プレーの仕方を知っていた、ジプシーのラモンに質に入れたんだ。彼はすでに長い前科があり、中途半端に負けた男だった。僕は負けたくなかったから、金を払わないと言ったんだ。彼らは僕に腹を立てて、タバコの量を要求してきた。でも彼らは黙った。その時、マルカオンという男が量が欲しいと言いつづけたんだ。僕は正しくないから受け入れたんだ。私は進み続けたが、あの少年は私を挑発し続けた；ある日、私は大工コースに行こうとしていた。だからユダヤの谷に行こうとしていたのだが、その日、避けられないことが起こった。私はためらうことなくパンチを放ち、彼は反応したが、彼にチャンスはなかった。私はすでに彼を研究していたし、彼はファイターだったが、彼は必死に挑発した。

私は、彼が私を挑発するために時間をかけていることに気づき、そのように私は予防線を張った。私たちが本能的に持っているもの、常識は女性を第六感と呼ぶが、男性にもある。第六感とは不測の事態を察知することであり、遊び方を知ることであり、あり方や敬意を知ることである；彼が学んだこと、彼が示した勇気、私はすでに勇気を持ち、すでに合格していた。私は、そこに戦士がいること、忠実な男がいること、詩人がいること、詩が好きな男がいることを知る勇気を吸収した。私は彼の話を聞くのが好きだった。私はいくつかの詩を作ったが、そのうちのひとつは彼に捧げたものだった。私は最高で、私が走っていた時代のカリスマ的存在だった。働くのをやめて講習を受けたとき、私はなりたくなかったものになった、闇の獅子になった。

リスボンの中心部にある刑務所で、あらゆる種類の、人生に存在するろくでなしが収容されていた。

というのも、善良な者、友人、庇護者、調停者、すべての状況を理解する者であり、私に感情をぶつけてくる人たちから苦言を呈された。私は仮釈放を得るための道を歩んだが、仮釈放を享受するまでにはまだ時間があった。私は、自分を傷つけるようなことはしない、むしろ自由を得るために努力すると決心した。方向性によってうまく構成された命令に直面したため、すべてが複雑になったが、その方向性ですべてを勝ち取ることができた。当時、私はその方向がとった動機があまりに厳格で、権威主義的な体制であることを受け入れなかった。マカオからやってきたその男は、元司法院監察官で、マカオに設立された24金マフィアというニックネームを持つマフィアの襲撃を経験した男だった。

彼は未遂に終わり、逃げ延びたが、ボディーガードは殺された。

私は自分がサソリの王であり、その血に毒を持つ者だと考えていた。

刑務所内の社交的なリズムの中では、それは普通の罰であり、過酷なものではなかった。所長のジョアン・Gは彼は私の独房に来て、私と話し、私を助けようとしたが、私はそのような助けを受け入れなかった。私は彼の信念を疑っていたし、彼は正しかった。彼はその代わりに、彼が知りたがっていることを何でも直接協力するよう要求した。その罰から最悪の事態が始まった。向精神薬を2種類飲んだのだが、私の窓際にいたのは、ハンター、チバンガ、ピラニアだった。向精神薬の効果がまだ残っていた私は、サンパイオが独房の前を通り過ぎるのを見て激怒した。その日、私は看守や私の邪魔をする者を殺す用意ができていた。しかし、彼らはいつものように賢く、私と話をしに来た。彼らは、私が激怒していることを知っていたし、私がそう宣言すれば、私を守るために全翼があった。しかし、私は自分一人では留まらなかった。私は、正しいことなしに戦う方法を知らなかったからだ。数時間後、私は贖罪を受け入れた。つまり、それは交渉を終える期間であり、私があまり応じないように、私は受け入れたのだ

そのときアルフレド・M・PSP（元ゴエ）に会ったんだ、彼はミディアムヘビーボクシングのチャンピオンだったこともあり、気骨のある男だった、勇敢な時だった。私はすでに何が起こったのか知っていたし、私はすでに彼に殴られるようなことはしないと大声で言った。彼は元警察官、元警官で、彼らの多くを知っていた。私が風呂に入るために脱衣所に行こうとしたとき、彼らは私を殺そうとした。その時、私は自分の生きる理由を示した。それは、ベアリスタになることへの疑問によって植え付けられたものだった。

私は早くに父を亡くし、早くに大人になり、そのことがその後の人生に影響を及ぼした。経験とは未来の超越であり、その上に生い立ちという生き方が重なり、それが辛いと、より厳しい生い立ちを強いられる。

この時、私はすでにマルカオの段階を過ぎていた。この時、私はもっと理由が欲しいと思い始めた、ルシタニア人の魂を持つことを求め、求め、そしてこれからも求めるだろう、私は野生種族のルシタニア人の子孫であり、すでに世界を支配している、遺伝が存在することは明らかだ。なぜ我々は存在するのか、我々は何者なのか、我々はどこに住んでいるのか、これらの問いは生きることに疑問をもたらすが、我々は勝たなければならないことを知っている、私は善人を捕まえた、私はすべてを捕まえた、しかし正直なところ、彼らもまた生きていただけだった、彼らは決して私に危害を加えようとはしなかったし、私は無視したかった、そうだ、早い段階で、私は常に勝つことができないことを学ばなかった、私は人を寄せ付けない場所にいた、生命が何の価値もない場所だった、私は奉仕することではない人間の真の意味を大切にすることに興味がなかった。

政治的権力、社会的権力、抑圧的権力には、常にひとつのことがある。コースから追放されるまで、私はユダヤ人の谷に戻り、リンホーに戻り、同じボスに出会った。

敵は強力で、すべてを蝕む機械であり、ピラニアというあだ名がついていた。ただその時々状況の瞬間を生きただけで、彼らは自分の喜びで自分を満足させる単純な人間であり、私は愛を持っていた、存在することの邪魔になるプラトニックな愛、この場合は男、私はすでに人生のすべての楽しみを持っていた、私はまだ私の魂の私の生活の中で私の精神に残っている女性を愛し、それは強烈な情熱だった、存在することができる最も永続的な関係の、長期化される。愛すること、楽しいこと、存在を愛することは、生き残るために彼女の喜びで存在を愛する必要性である。寝る前に見る最悪の悪夢から、直面しなければならないすべてに直面した。調和と幸福の中で生きることができるように、幸福が優勢になるように、存在の始まりの遺産の贈り物を守ることができるように、父と母によって語られる物語である。私たちはみな使命を託されている。それは持続し、成長し続ける。私は誠実で正直な人々を捕まえた。

彼らの賢さと私の知恵を組み合わせる方法を知っていた。彼らは聡明だったが、常に私以上になりたかった。しかし私は彼らの賢さを組み合わせ、遊び方も知っていた。どんなに美しいものを見ても、どんなに思いやりを持たなければならないとしても、去る道はひとつだとわかっていた。誰にも危害を加えようとは思わなかった。ただ、彼らが私を生かしてくれることを願った。それから私は、絶え間なく続く戦いに旅立った。彼らは皆強く、皆生き物だった。しかし私はそんなことは気にも留めなかったし、この先の物語の続きには何の関係もなかった。私は仲間に、彼ら全員に辛くあたった。私は誰も選ばなかった、私はただ刑務所のヒエラルキーを維持したかった、そしてそうした、私が望めば彼らは皆私に従った、だが私は彼らを生かすこともした、それが私のやり方だった、私がタバコを吸うためにドラッグを使い、彼らもうまく歩くことができた、その道が勇敢であったために、私にやめてくれと泣く者もいた、刑務所内では困難な道だった、私には他に選択肢がなかった、それは逃げ場がなく、勝つか死ぬかだった。それはすべて、私が背負っていた非難のためになされたことだった。私はこのような状況に

もかかわらず、なんとか困難な道を見つけた。私は刑期の途中で出られることを知っていたし、刑期の終わりにも出られることを知っていた。私はすべてを逆転させた。つまり、私は心配しなかった。私は大丈夫だったからだ。私の下には牢獄があり、それはすべて私の仲間だった。そのとき、私は存在感に対して怒りを覚えた。私には味方がいることを知った。私は悪の道を追求し、そのように解釈された。私は自分がライオンだと思っていたが、ヘロイン中毒だった。私は戦いに身を投じた。比類なき戦いに、私は立ち向かった。

というのも、そのフォローアップが私に問題をもたらしたからだ。私は私なのか、そうではないのか、私は欲しいのか、欲しくないのか、つまり、私たちが熱望することができるすべてのことは、すべて継続することだった。父は軍隊にいたし、母は当時働いていなかったが、その後、カレーとカブラの掃除の仕事をするようになった。私は母が好きで、父とは一緒に暮らせなかった。私たちが生まれたときに与えられた模範は、私たちをこの世に送り出した者の従うべき模範であり、この場合はグローバルなケースになるが、父と母を持つこと、それが私の成長の結論だった。謙虚で、平和的で、生きる術を知っている存在、そんな存在になった。私は怒り狂い、あらゆる動きや反応に気を配りながら進んだ。

彼らが誰であろうと、仲間という世界的なレベルで、正義の世界における全存在を包含するあらゆるもののレベルで、方向性を示した。このすべてのために、私は支払うのが難しい代償を支払った。このすべてのために、すべてが私の出来事に投入された。誰もが私を知っていて、私もまた彼らをすべて知っていた。それはゲームの完璧さであり、それは連合であり、誰が生きているのか、人々と日々接触しているのか、その状況とは無関係に；寅さんだった私は、どう許せばいいのかわからなかった。彼らは実際に私を恐れていたし、私に対しては敬意を持っていた、消費主義について話すとき、誇張をもたらす習慣、私たちは消費主義的な存在だ。そのようなわけで、私は無敵の獣になった。私は自らをライオンと呼び、私のような獣と戦った。さらに厳しい知恵で。しかし、許す方法を知らなかった。

母親の息子はたくさんいて、人生の経験もさまざまで、良い人の息子だった人もいれば、悪い人の息子だった人もいることを私は知っていた、もしあなたが善意で来たのなら、私はあなたを善意で迎えるでしょう。もしあなたが悪意で来たのなら、私はあなたを悪意で迎え、あなたは私の悪いところをすべて持っていくで

しょう。

薬物中毒者と呼ばれ、誰からも軽蔑される存在だったが、私には価値があり、認められていた。彼らは皆、私を高く評価し、尊敬し、私にもっと多くを求めていた。

私は、彼らが見たいと思う私の姿を見せなかった代償を払った。私は厳しく、無礼で、自分の決断のためにすべてを尽くした。もっと稼ぐこともできたし、すべてにおいてもっと利益を得ることもできた。彼らは私を好きでいてくれたし、夢さえ語ってくれた。でも私は野獣になり、そうなりたかった。私が生きていた状況、囲い込み、孤立のせいだ。私には女性もいたが、すべてはプラトニックな愛で抑えられていた。

私はいつも、美しい喜びを得るために誰かの人生を台無しにすることを避けていた。私は愛し続けた、私がどうあるべきかを知っていたように愛し続けた、彼らは皆、私の愛する人のものだった、彼らは私を心から愛し、私を尊敬していたからだ、うまく生きられなかったのは私だった、私は監禁されていた、私は失ったもの、自由を克服するために戦わなければならないと知っていた、しかしその時、私はやめ方を知らなかった、監督たち、アシスタントたち、教育者たちしかし

、私は常に善良であった、私は決して虐待をしなかった、そうする理由がなければ誰も殴らなかったし、たとえそうする理由があったとしても、それは私にとって困難なことであった。

道徳的な価値観、それぞれの場面の価値観を考慮に入れて、私もまたそうであるからだ。しかし、彼らは今まで会ったこともないような大きな獣を手に入れることになると思っていた。すべては便宜の問題だった。立ち上がり、消費し、支配するための便宜だった。私は早くからこのことを理解していた。刑務所に入る前から、それは困難な時間であり、決して過ぎ去ることのない日々であり、果たさなければならない年月だった。私が支配したのは、この後の状況をコントロールしなければならなかったからだ。なぜなら、遊んでいる猿は、母親のアソコにいる猿だったからだ。私は支配する方法を知っていたので、ゲームの中で死んでいた。その日の運動で、私は少し訓練したいと思い、彼に私と一緒に訓練しようと提案した。それは弱い姿だった、ただの遊びだった、私は彼の首をぎゅっと握り、彼は感覚を失った、しかしその瞬間、私はやりたくないような窮屈さを感じた、私は見せられているように、私は遊び、私は彼を見た、私は立ち上がり、彼は私と一緒に歩いた、私は彼に大丈夫かと言った、矛盾した答えはなかった、しかし彼を見たとき、私は本当に何かが起こったような感覚を覚えた、なぜなら彼は感覚を失ったからだ。自信過剰で、自分の強さを知

らず、すでに経験した地獄が始まった：

- 大丈夫？

彼を傷つketくなかったし、すべての悪を鎮めたかった。訓練から彼を誤解していた。

私はユダヤ人の谷で生きたいと願った。

しかし、人生には代償がつきものであるように、私は刑務所の中で、あまりに男らしすぎたために高い代償を払った。

でも、刑期の真ん中、2/3くらいと5/6がある。私は5/6に出所したが、それはすべて、私の引きこもり生活における伝記のためのプログラムであった。私にとっては何の意味もない人たちだった。私が高く評価していたサブチーフがいた。彼女は私からの挑戦を受けた最初の女性で、私は忠誠を誓っていたが、その後、私は間違っていたと思った。彼女は私を評価せず、私の薬物検査を要求したが、私は抜け目がなく、それで終わるとは気づかなかった。彼女は私に4日間の臨時休暇を与えたが、その条件は私が警察の聴取を受けることであり、警察は私にそうするよう命じた。彼女は彼に4日間の臨時休暇を与えたが、その延長条件は彼が薬物検査を受けることであった。つまり、作戦は、彼らは常に知っていた。私も彼を何度も過小評価したが、私は常に彼を尊敬していた。彼は私の尊敬に値するからだ。彼らは最高の働きをする存在だったが、たまたま検査でアヘン、つまりヘロイン、大麻、ハシシの摂取が陽性となった。

私は主治医のアナ・Fにある薬を頼んだ。それは、激しい口論の末に、彼女に助けを求めたからだ。薬物スクリーニング検査でアヘンを告発した私は、2+2、つまり主治医を通して薬物スクリーニング検査をクリアした、これは、受刑者が自由の身になるための最高の例であり、刑期の2/3の真ん中を使うという利点がある。私は刑務官を物理的に攻撃した。社会秩序がなければならないので、システムはそれ自体で優位に立ちます。人が望むかもしれないすべてのこと、福利、決断は多様でした。私の名声は看守の間でも仲間の間でも大きかったので、2/3刑期の半ばを楽しむことができるよう、私には手の届く範囲にあらゆるものがありました。心理的、肉体的なレベルでも、その他考えられるすべてのことで、私に挑戦したい看守もいました。

大麻のスクリーニングの問題についての私の報告書をきれいにした；しかし、私は社会的な存在であり、刑務所で生活したことがないので、刑務所の他の人々と関わりを持たなければならなかった。クリスマスの時期で、裁判官が2週間、つまりクリスマス休暇で不在になる予定だったため、不安定な出所の決定は延期されたが、彼女の言う通り、ほぼ2カ月半後に不安定な出所を言い渡された。しかし、私はそれを乗り越え、不安定労働からの離脱の日までよく持ちこたえ、4日間の長期不安定休暇を与えられ、それは無事に終了した。しかし、より敬意を払い、トラブルに巻き込まれないようにしなければならないため、私にとってはより厳しい問題になりそうだった。しかし、不安定な期間から2カ月が過ぎた頃、私が入団するとすぐに、私の邪魔をしようとする者が現れ、実際にそうになった。私は喧嘩に巻き込まれ、その少年は少しひどい扱いを受けたが、彼が一個人であり、男のレパトリーを持った一個人であったのは幸運だった。私たちの話を聞いてくれたのは、ジャーマン・シェパードというあだ名の署長で、最初は少年の話を知ろうとしなかった。その後、彼はなんとか

少年は私に電話してきて、同じように、あれは訓練であり、冗談であり、最悪の結末を迎えたかもしれない、と言ったが、彼もまた、私が言ったことをあまり受け入れなかった。

私は普通の生活を続け、さらに問題を避けるようになり、さらに4回の臨時休暇を取ることに成功したのだが、2007年3月、また同じことが起こった。

しかし、問題は決して一人では起こらない。私はそれをやり過ぎた。それがこの理由の出現で起こったことだ。起こりえないことが起こった。情報を得るためにある人物を独房に呼んだ。この人物は私のやり方が気に入らなかったからだ。情報をくれた男、クレイジー・ヌノは本物の戦士で、彼もまた私と同じように不安定を楽しんでいた。私は甥のために、何もしないと誓った。

クレイジー・ヌノはこのような状況で私に嘘をつくことはないだろうと私は思っていた。私が彼に暴行を加えたそのとき、看守が私の独房に入ってきて、私が殴ったパンチで男が床に倒れて死んでいるのを見た、でも、それでも私は逃げられないとわかっていた。私は誰にも密告したことはなかったし、彼らは私を罰したがっていた。経営陣も、上司も、何でもかんでも私を罰したがっていた。私は囚人たちが何かを要求しても、決して黙っていなかったからだ。私は常にそのように見られていた。このような原因や闘争の形態の扇動者として、その時、彼らは私に5日間の罰を与えた。私は、何も危害を加えられることなく、つまり懲戒処分を受けることなく釈放される可能性が高かった。しかし今回、私は2/3の審理を受ける際に無実を訴えなければならなかった。私は医師に、私は無実であり、誰にも暴行などしていない、そんなことは考慮に入れていない、と言った。私はこの状況に偏見を感じたが、決定を待った。そしてその決定は、私が2/3で退所する可能性を断ち切り、新たな評価、つまり5/6の量刑の評価によってのみ直接恩恵を受けることができる、というものだった。つまり、5/6で退所せざるを得なくなるのだ。そこでは法律が私に有利だからである。この場合

、法律は私に有利なのだ。私はいずれにせよ5/6で退所
することになるが、しかし私は

月に処分を受け、同年5月に仮釈放の審問を受けた。3月に処分が下され、同年5月に仮釈放の審問を受けたが、2/3カットの決定はまだ下っていなかった。別の事態が起きたのはその時だった。今度は看守とのことだった。看守が私に辛く厳しい言い方で話しかけ、私がその命令に従わなかったため、私は看守の顔を殴った。看守は私と二人きりだったが、別の看守が現れ、彼はすぐに同僚と合流し、彼らは私に暴行を加えようとした、警備員はまだ口から血を流していたので、単純な攻撃から偶発的な状況に至るまで、どのような形であれ攻撃されたことは分かっていた。

彼らは私を監禁して査問を待たせ、ユダヤ人谷の保安課に電話し、入院を要請した。しかし私は、あれは本当に事故だったのだ、不本意な行為だったとは認めない、負けたのだ、という論文を今後も貫くつもりだった。

だから私は、この論文を推し進めたいのであれば、看守の間に矛盾があるはずだという事実に基づいて議論しなければならなかった。私を暴行したのはミルクの看守ですが、彼は私が実際に暴行したとは書いていません。それを報告したのはもう一人の看守で、彼は保護されている少年を連れて医務室に行っていました。

しかし、私が検察庁で聴取を受けた日、看守「レイテ」に対する加害の疑いで立件されたことを知った。しかし、その日私に同行していたのは看守「オーリーベイラ」だった。その看守と私との歴史は、刑務所の中で築いた友情だった。私はコンピュータ・レベルのオフィス・アプリケーションのコースに通っていた。彼は私が彼女を好きで、彼女も私を好きだということを知っていた、あの看守が私を助けてくれるとは思ってもみなかったからだ。彼は私を気に入ってくれた。その後、彼はモンサント刑務所に収監されることになった。モンサント刑務所は一般的な刑務所から厳重警備の刑務所に改築された。

テロ犯罪、より暴力的な犯罪、犯罪組織、私たちは常に監視され、絶えず、より厳しい体制で生活している。しかし、私は2008年5月にそこに行っただけで、独房に長時間閉じ込められるという体制になった。

私は答弁に行き、また同じ論文を弁明したが、傍聴席に行くためにバンを降りたとき、加害者であるレイテ守衛がオリベイラ守衛を伴っているのが見えた。レイテ守衛の供述を聞き始めたとき、私は素敵な驚きを味わうことになるとは想像していなかったが、公の省庁で質問を受けたときに弁明した論文を聞き、そのとき私はオリベイラ守衛に助けられたと感じた。裁判所も、事故が本当に事故であったとは確信できないが、やるべきことはやった、それに反する証拠がなければ誰も断罪されることはない、と言った。私は無罪となり、弁護士も優秀だった。モンサントにある厳重警備の刑務所で裁判を待っていたのだが、彼らは鑑定を行い、釈放までちょうど2カ月しか残されていなかった。私を刑務所に移した。

コロニー刑務所と呼ばれる開放体制の刑務所だ。

そこで通りに出ようと、私は外に出た。

私はオープンな刑務所に入りたかった。モンサントで1年半過ごしたが、そこではどんなに多くの職業に就いても、非常に閉鎖的な体制だった。

すでに刑務所内で多くの経験を積んでいた私でさえ、それを克服するのは難しかった。ヘロインを断念したのは、まさにモンサントでのことだった。

*** ピンク・フロイド -

ユーズ・アンド・ゼム

" ユーズ・アンド・ゼ

ム

結局のところ、僕たちは普通の男

なんだ。

神のみぞ知る

私たちが前方を選ぶようなことではない.....彼は後方から叫び、前列は死んだ。

そして、将軍が座り、地図上の線が黒と青に左右に動いた。

どれがどれで、誰が誰だかわからない。

結局は言葉の戦いなんだ。

よく聞け、銃を持った男が言った

んだ。

"つまり、殺すつもりはないから、短く鋭く、素早く
ショックを与えれば、2度とやらないだろう。分かる
か？ つまり、彼は軽く済んだんだ。だって、俺なら
ボコボコにしてやっただろう！ たった一発だ。

でも、マナーにはお金もかからないしね」。

ダウン・アンド・アウト

ウィズについては、それがたくさんあるのは

仕方がない。

そして、それが戦いのすべてであることを誰

が否定するだろうか？ 邪魔だ

忙しい一日だ

お茶と一切れの値段のために、いろいろ考えているん
だ。

老人は死んだ

Copyright © pink Floyd

Fragments i

氷のような北の大地に閉ざされ、さらけ出された古いシーツは、巻き上げられるのを待っている。オレンジ色に燃やされた毛布は、忘れ去られたように温められ、ゆるやかで束縛のない虚構と実存的な記憶の電撃的な冷たさを要求し、耐える魂を、音はリズムの温もりを伝播させ、時間をゆるめ、自己を侵食し、温かく冷えた世界を熱なしで探索する、

その雰囲気は同じではなかった 球体は角へと転がり、傾いた点は地表の海の下へ、灼熱のマグマの内部へ、探検のジャングルへ、レジャーの印象的な印象的なジャングルへ、そして他に言う方法がないのは、言葉、熱い言葉、あるいはとても冷たい言葉、とても冷たい死体のようなものだ。永遠に冷たい、熱い夢想の泉と谷、笑いのない川、引き裂かれた希望は、ゆっくりと創造し、想像でしかないものを示すために、距離を置かず、適切な等式で、熱い非常に熱い質問全体を問題化するために、曖昧で暗示的なものに出会い、示すのを待っている、その果実が生まれ、滅びることなく、多かれ少なかれ鋭い文化への渴望を振動させるギターの音は、沈黙の聴覚障害を伝える言葉の病的な響きに影響され、今存在的に止まっている状況を解決する。全体の真実は、思考と行動との間に真実がないことであり、ドライバ自身に人為的な操作や操作を生成する行動を通じて自分自身を見つける方法であり、彼は意味もなく言葉の幻想に身を委ねて自分自身を見つけるが、理由と言った、それは信じられないが、すべての形式は、成長を見て、記述自体のいくつかの感覚を欠いている状況を行うには何をすべきかを知るために不時の純粋な不幸に根本的な行為を持っています、ビジ

ヨンや感覚は、我々はしばしば我々が行うと他の人から学ぶ方法を知っていることであり、等しいまたは類似の符号で、または加算の形で見えていないことを言う
と使命の一例である非現実的なフォームの任意の抽象的な感覚は、実際には断片化されたような一元的な全体主義者であったが、類似している世界の統一された文字と我々は常に類似性を持っていますが、その平等ではないとして、あるかもしれません

理性の奥深く、その疎外に迷い込んだような、同じ内部から湧き出る熱を感じ、その在り方による性格は、建築家のようにまっすぐなフレームの形の画家に似ているかもしれない、無意識のうちに、そしてかなりその獰猛さを発揮したつらい過去の現実として、常にイメージの荒廃を想像する言葉の経験が、ここで断片で武装した注意によって捕らえられた瞬間が、ここで意識が現在に侵入し、太陽が沈んで隠れる地平線の線のようにまっすぐであることが明確でないことの全能として、彼は自分自身の敗北を見た、しかし、それは再び生まれ、それが唯一のものであったため、最も明るくなるため、決して後悔していない、太陽は私たちの経験を明るく保ち、精力的にすべての詳細が起こるだけでわずかな感度に記述され、その意味を持つ各単語を記憶し、彼の忍耐の沈黙の中で保管されている動きに設定され、暗い洞察力、投影されませんが、任意の非合理的な本能の軽減、私を侵している存在は、アキレスのように自らを構築し、柱を維持する自己ではなく、常に私たちに提示する架空の世界で、誰にも気を配られることなく、自己のこれらのスパイは、悪評の私の賞賛であり、過酷な現実は、私たちがこの非常にクレイジーで深い旅をする機関車のエンジンを加熱す

るだけで、トンネルは、そのイメージの出口と光り輝く
く終わりを持つ闇の内部を再び見ることができないか
もしれない、終わりだけを待っている

何が私たちを動機づけ、駆動し、壊れない力信頼できるもののように魅惑的な何か、知ることは困難であり、決して学ぶことはできませんが、それは再びウェブを形成し、しかし壊れるウェブであった、それは抵抗力があり、ナレーションで事故のように、彼は若くして死亡した深いショットがあった、根本的な憎悪が、誰かや彼の心や人々に無関心ではありません、このように、彼は知的な方法で、我々はすべての私たちの合計であり、より多くの異なる、似たような人々が等しく、彼の元の文字に、来ることをすべての人々に言った、実際にはどのような行為とそれを表す作品に人形があり、文字のスペースで失われた旅は、任意のエンドポイントの独自の死へのスペースを作成する技術、集大成は終わりではありませんでした、私たちにとって死ぬということは、私たちを知っている人たちにだけ起こることで、私たちが死ぬときには決して知ることはない。それは終わりのない言葉だったが、シンプルで独創的で、学ぶべきことの計り知れない飢えを糧にしようとするキツネのように少し厄介で、常にもっと知りたいと思う。そこに長寿の源があり、起こらないことを知ることはない、そして限界は断崖絶壁の始まりに過ぎない.....態度の若さは、どんな高度をも凌駕

する.....そして私たちが下降し、私たちがすでに征服に
どれだけ到達したかを見るとき、ただ知るために、も
う少しであるために、そして決して失いたくない.....そ
して私たちは皆、飛ぶことを学び、すべてを想像する
ために、決して落ちることのないどんな地点へも飛ぶ
ことを管理する.....しかし、すべては言葉の断片であり
、アイデアであり、思考である。深海のように深い幻
想の芸術は、確かでないテーマを暗示し、潮風が現れ
、まるで魔法のようにエネルギーの軽さと感傷に浸り
、もう少しだけ優しく、紛れもなく、決して無敵でな
い一瞬から来る追加である。

彼の勝利は常に彼の敗北であり、何も言わず、自分が勝利を与えた相手のぬるぬるした味を感じながら、また新たな戦いの敗者となることで、他に何を学ぶことができようか。

断片 II

急降下、沈没、遠くで階段の吹き抜けが金属のステップを軋ませる、床には掃除用の雑巾、バケツ、壁には大理石の四角い壁が4つ連なっている、雫が落ちて、深みで、軽く、誰かが床をマットな光で揺らす、無力で、表面が一本詰まる、影の効果を持つ一筋の光、ガラスに映る顔、視線が砕け散り、一度だけ飛び込み、難破し、息苦しさから救ってくれるブイが現れ、気が狂い、逃げ出し、星と深淵の空虚の間で迷い込む、最初のイメージは、水の中を泳ぐひれの虚しさの深いエコーの音、最後に私はジャンプし、モノ動きと吹き、引きずられるすべてのフルボディ、色あせた幻想に、それは異なっていた、深さの海の中で一瞬、液体と塩味の鉛筆の書き込み色なし、それは俳優だったショーは私を幸せにする贈り物のパーティーで最高潮に達するベッドの上のパジャマ、こぼれるベッド、発泡性と異なる、それは風景のないイメージだった、吸入からのすべて、知覚の変化、そして変換は明らかだった、涙

なし、線なし、規範なし、無の中にすべてを欠く何か
なし、物語、成長しない、表示されない、ほとんどそ
れ自体を語り、私たちは縛られている、真実、鎖と南
京錠だらけ

スリングショット、的、人は手の届かない矢のように茫然とし、結び目の縄、こぼれた文字、失禁、ぼやけた文字、決して消えない、人が望んでいたもの、いつも手に入れたいと思っていたもの、そして心の底ではただ存在であろうもの、荒い髭を切り、張り合わせる、一本の口ひげ、一本の髪、それぞれの顔の一本ともう一本、タッチ、それぞれの債務超過からその罪、その時間性から現在へ、そして見よ、それはただ、そのバケツの中の布、海の中の一滴、結ばれた糸、そして蹂躪され引き裂かれた文章を合計するだけである、紙に書かれた文章だけが、一瞬の輝く夜、輝く暖かい太陽、光り輝くタイル、異なるものを見るための鏡、そして光の幻想から、地面に落ちた雫、そして何も無いすべてが、表面に出てくるだろう。閉ざされたカーテンの中の開かれた窓は、自分自身の舞台の劇場を見る板、救命胴衣、幸運を見よ、救われた、そして砂の上に伸びた、私は陸地を見て生きた、その時からダイビングの瞬間、すべてのプライドは失墜し、私たちは世界の底に降りる、単純な歌を見て、それを満足に変える、突然の一撃、ビジョン、私たちは皆、何かが起こり、解放され、目覚め、感じる存在の痙攣を継ぐであろう、他の予感の中の一つの現実を生きていた。

それは常にでたらめではない、疑わしいベースで陰謀が設定され、計画が中止されないと、私は吸収された声を聞いて、歌詞の遠吠えは、歴史の狼である、完璧から破壊に海辺の星にロケットが含まれていたのもので、すでに言われていた奇妙な、私は虚無の隙間にはしごを降り始める一歩ドロップ、その後、金属製の手すりが自動化され、裸足で寒さ、川の中で唯一の足であったように見えないすべてのものは、すべてが消えてフェードすることです。すべての普遍的なものはそのようなものであり、舌だけが、キスの渴いた喜びによって開かれた口の中で、そのキスと欲望を見る、そして飛んで冥王星を征服する、池の中の石ころのような心で、いつも写真に撮られるわけではない肖像画を切り離した人生を見よ、狂気が精神的な正気を持つようとしていた。汲み上げようとする意志、そしてその流れから、箱が4つの壁であり、恐れず、勝たず、負けることもない力が灯るのを待っている、理由のないフィラメントのような表情をした流れを想像する。滝の下の石の中に城を築き、川の流れの中に城を築き、すべてを前進させること、そして何よりも、私は同じものとはまったく違う、シンプルな旅の物語、見えないが伝わるものの音の妙技を心に描いていた。

タールの床には鍵があるだけで、それはドードーでもレでもなく、常に存在することを明かし、海の輝きの中で熱い景色の香ばしい一瞬を得るために信念を持つことだった、それは心とあなたのペアを結んで欲しいという願望であり、それはすべてポンプであり、そして乱流であり、それはあまり賢明ではなく、爆撃の行為において、それはすでに平和のための戦争の出来事であった、窓を開け放ち、寒さを感じながら、ある事実の行為の暗闇の中で、決して起こらなかったが、報告され、想定されるように考案されたことだった、過去とは異なる現在、それは打撃であり、それはすべてを冒涇し、最後にフェンスは何も離れて移動しないジャンプすることは不可能な2つの壁の間に単一の心の愛だけを書くために冥王星から来たものを残しただけの物語であった、オープンサークルでは、結び目その窮屈さの長方形の正方形、ほこりを振って、ピアノはあなたのドウとイメージの暗い部屋で演奏だけを見ての

ロールのフィルムによって撮影された、小さなイメージ、断片の陰影の中で、私は、私のイメージの中に映る、あなただけが鏡のフレームである、あなたが欲しいので、すべてが一緒になる作品に映るあなたであることがわかる。

普通の

唯一無二の苦しみに浸り、その苦しみを鋭くするこの苦しみからどうすれば抜け出せるのか。その時、私を狂わせ、手首を鎖で縛る電流が流れ、病み疲れた魂に宣告された衝動のすべてが、私たちを揺さぶるこの塵は、感覚を突き抜けてはじけ飛び、物理的に存在する魂の蒸気以上に、この疎外の乱れた根は、ひとつの迷宮の中にある、流れに引きずられた私は、もう一日の無気力を水没させ、私を圧迫する鎖を砕き、ほとんど切迫した瞬間に緩め、誰もが田舎風の瞬間から運ばれてくる、生きることの寓話を待っている。

燃えさかる松明、それは燃え上がるだろう。ここに輝きがあり、それは炎を点火し、あなたのために私の貧しい心を燃やす。

私たちの再会は、ただあなたを見て、あなたの母性的な顔を見て、優しさと優しさの感覚だけが私の苦しさ

をすべて解き放ってくれる、私はただ生きて、死ぬまでいつもあなたに会えばいい、官能への熱い唇の動き、生きられるのを待っているフェルトの抱擁のような透明な幸福、あなたを求めることを超えた何よりも強い結合、

私はあなたが小さな子供のように幸せであることを願っています。

悲嘆に暮れる父は父であった子供を持っていることの最大の愛に常に希望の最大の学習の魔法の瞬間は、母の愛だけでなく、子供の愛は巨大な常に気配りとインテリジェントな父と息子である私の息子は喜びの私を爆発させる感情、感情、愛情、愛と愛情は、永遠の喜びに私たちを暗示する力であり、愛情のための欲求、共有、レッスン、初心者の父で永遠に若い見習いであることに私たちのいずれかが熱望する幸福で溢れる両方の適切な指導。どれほどあなたを愛しているか、どれほどあなたを感じているか、どれほど一瞬一瞬の疑問の不安、そしてほんの少し、あなたが私を魅了するからこそ、私はあなたに伝えたかったのです。あなたの輝きはいつも私にとって、私たち二人が収まる枠の中にある恍惚のイメージであり続けるだろう。遠いあなたはあなたを満たすためだけに考えるために単純な誕生から来た、あなたは私を豊かにどのように、あなたは狂気である真の優しさ

涙

いつか、もし私が涙を流していたら、二度と泣かない

ように、あなたの顔につけてあげたい。

夢.....強烈に潜りたかった。何年も続く眠り、夢遊病の
夢想家、夕暮れ時に影が侵入し、純粹で生々しい幻想
の暗闇を覚醒させる夜の魂、最も永遠の目覚め、そし
ていつかの深い眠りが何であるかを見ること.....目覚め
、夢想の神話を信じること.....常に到着し、あと1ピー
スだけ到達すること、あなたの痕跡とともに無限の線
となること.....の真ん中で目が覚めた。

ペア

キスが欲しかった.....私たちを麻痺させる静かな眠り
.....私たちはそれを最も欲している.....おそらくあなたは、あなたの中にある甘さを知りたくはないのだろう、あなたを味わうことなく、すぐにあなたを味わい、手放すことのない人。

人生

永遠がそれをそこに維持することで、それは自分自身をそこに置き、それに直面したり、それを回避したり、それを操作する方法はありません。それは、創造、想像力、または単に緑色の色相の繁茂線を描くと、生きて繁栄のそのトーンで人生をつかむために発散し、一点の麻痺に絶頂に達する反体制派の恐怖であり、ここにあなたが常に指摘したかったマーカールがあります、激しく生きる

アマール

見よ、彼はすぐに自分自身を取り戻し、欲望から征服へと向かい、塩辛く水浸しになった海の岩に墜落し、深みを増し、浸り、そして浮上する。

静かで抽象的な水泳を通して入ってくる寒さは、私が

湧き水と関わっているのを見た。

何も難しいことはない。ただ、同じ一步を踏みしめることなく前進し、風、海、そして征服すべき土地への愛を呼びかける音楽を心に奏でよう。

壁

もしそれが起こったとしても、私はそれが、凍りつき、冒涇され、売られ、魂、道なきセンチメンタリズムの純粋な武器、幻覚を見る肉体に縛られ、到着することなく進む、冷たく落ち着きのない心を吹き飛ばすことを知らないだろう、幻想に服従し、巨大さから来る雷が発生し、すべてが効果の光輝の瞬間に停止するように、半分開いているが、精神の病気は、身体のそれらのニーズと意識的に私たち自身の存在の深淵に突入し、浮遊する、魂の状態を乱す付録のように残り、精神の病は痛みに耐える腫瘍の中にあり、その影響と歩みを怠るかのように、魂、精神の出会いである。すべてが不安定になる要因の生活の中で一緒にグループ化された身体の、または身体はもはや年齢の傷や病気の病気に耐えることができないので、その後、この自己の精神と私たちの利己主義は、私たちの意志に来るが、魂を乱し、思考の最大指数でこれは精神に作用し、破損し、純粋な侵入、起動することはできません壁のように強く硬い。

考える

想像力の液体が注がれ、魅惑の液体がこぼれ落ち、没入した深い狂気が、ハーモニーの梁と肉体を介して、彼女は愛想よく背負う。

魔法が見かけの世界の意識的無意識に侵入し、浸透することを見よ、生きることが純粋な呼吸の美となり、無限が目に見える限界となり、思考を修正することなく、言葉と感情と行動の間に広がり、思考を刺激し、常に存在、思考、行動を変化させることを想像する。

友情

夕暮れ時のトワイライトは、想像上の敵から遠く離れたシェルターで起こっているすべてのものを見るために、戦いは心の平和で、静けさに戻って、休戦を通過するだろう、夜は落ちていた、そして、私は柔らかい肌の上に意志とエネルギーの友情を感じるそのタッチを感じ始めた年齢なしで愛情の純粋なジェスチャーは、任意の情熱や愛よりも強く、どんな巣のちょうど親指のタッチとちょうど感じたものを想像し、すべてのエネルギーの電流を通過した。

学ぶ

目がくらみ、魅了され、こぼれたスープで、実際には本当に圧倒され、あるいは憤慨し、しかし座って、警戒態勢で、最小限の感覚もなく、見よ、それは街全体を回って回転し、その後混乱し、あるいは誤解し、それが決定されたかどうかは知らないが、すべてが要求

されていない要求であなたに書く単純な喜びで私たちに意味をなします、そのとき、あなたが感じたこと、見たことのすべてが残り、消えていく、しかし、ただ見て、読み、書き、解釈し、同化し、輸送し、教え、学ぶ、ここで息は風の強さとともに成長し、そして消えていく、7つの海を飛び、言ったために言われたことを置く、ここで私は潜っていた、より深く行く、すべての友人の友人、その不可分の友人であり、まだ見えないアラート、だった。

飛んだり、走ったり、さまよったり、そこにいることを想像したり、そこにいないことを想像したり、しかし常に目撃している才能の思考は、今日、今が未来であり、シンプルなパフの楽しみのハードライティングと、何よりも創造し、想像し、再び再現し、それが去ったことのない場所に戻るために、ある日誰もが考えるだけのものを誕生させるために戻ってくる、しかし、あそこで、私はすでに時計を見ている、時間通りに存在し、事実を目撃し、見守られ、オリジナルの感覚で、柔らかくし、暗くすることで来る喜びの、とても普通の、とても平凡な、夜明け、目覚め、そして暗くなり、夜が照らされることだけが、魔法のように、そして現実的に、それは浮遊し、北の船で漕ぐことであり、悲鳴のような陽炎のような航路であり、それは彼女であり、その一点であり、帰路と想像するのが難しい海であり、それは巨大でとてつもない海の猛威であり、人が歓迎されることなく秘密の旅に向かう、それは正方形の球体であり、三角形の逆三角形であり、それは不可解な魂の精神の石棺のピラミッドである。忘れ去られた生き物のように、乾かない葉っぱのイメージ、ペンのための灌漑、私たちの惑星の文字、他の惑星との接触を保つそれぞれのアンテナ、衛星、または

単純なワイヤ、私たちは枝が生まれる木々のように旅し、一日中輝く庭師の花は、月明かりの中で輝くようなものだった。子供が生まれ、成長し、学習し、観察するものすべてを理解し、行動するのを見るのを見るのは、子供の言葉で言えば、親に対する子供の優越と、学習を観察し、学習し、学習がお互いに非常に私とあなたのものであるペアを持つ双子のような学習と知識の二重の共謀の、正当な教育による柔らかい肌である。

常に知ることを学び、生きることを学ぶ。

常に忠実でありたいのに、悲しいピエロのように笑顔が偽りで、内面の喜びが外見に従わない。通常の場合から離れ、自分の視界から遠く離れた場所に留まらせる浮遊感を感じる、まるで生得的な力が、その瞬間に、そして前もって、失敗するように定めていたかのよう、引き抜き、絞め殺し、殺し、跡形もない旅の中で、反乱を起こし、憎悪を抱かせ、真に罪深い者の姿が、その時の温度で空に誓いを見せつけ、みずみずしく、陽気で穏やかなマリーゴールドがやってきて言う。その激しい衝動は悪い瞬間に過ぎず、すべての獰猛さは頂点に達し、完成される。恐れることなく、罨と共に生きないことを学ぶことなく、すべてを克服するので、私たちは信じているすべての力を持っているので、幻想的な、達成不可能な現実的なことを暗示している、特に暗い包むガラスがあったが、スモーキーな色調で絶対に透明な値は花のようなものです絶えず彼らに水を与えなければならぬし、何が種であることは、心の中で等しいとは異なる成長する

我々は皆、本能と獰猛さを持っており、適切な魔法の薬とは別に、人間の魂そのものが、入り口が光であり、その終わりが底なしの穴の脱線である、陰しいトンネルであることを、我々は純粹に理解し、実行する。

見よ、あなたの世界では誰も勝てない。トンネルは通路であり、入り口の光を生き、道を照らすものだ。

深い愛に苦しめられ、愛も忘れ去られ、半分失われ、後悔しながら生きてきた。

終わりのように終わりを生きる仮面、そしてすべてを確定する仮面、確かなものを見よ、不確かなものなど何もないものほど確かなものはない、さらに無限を予見させない限界の小さな連続した線、それゆえ線のようには私たちは2つの点を持っている上昇と唯一の無限、ただ死の顔がゆっくりと呼吸のように到着する感じられたすべてが、終わりを告げる仮面以外の別の顔を見たことがないために終わった。

お土産

あなたのために苦しんだ あなたのために感じた あなたのために愛した あなたのために生きた あなたのために生きた 他の人を愛したことはない あなたの中でキスした あなたの中で見た いつまでも忘れない愛の中に入った

た あなたのために感じた 苦しみはもう何もない あなた
のために死にたいと思った 私を通してあなたのために
書いた あなたのために苦しんだ 苦しんだが決して死な
なかった あなたのために失ったことはない ただ感じた
だけだ

ある瞬間の恋人は、すでに恋人である人の愛から一日
だけ離れた遠い存在に見えた。

反省

鏡の中で何かが生まれるのを待っているのが私であり、私の姿なのだ。自分の姿だけでなく、鏡のないこのシンプルな姿を映すことがいかに良いことかが伝わった。

夜明けのように澄み切った闇夜の中で、あなたの魅力による歌が、飛ぶ鳥の真の口笛のようになり、すべての人が自由を熱望する。

執筆

私は.....そして、私が持つことのできる最大の財産は、紙と魅力的なペンである。

死

私は死んだ！ そう、それは終わりの始まりだった.....苦味のない、しかし優しさのない方向転換の始まりだった.....それはイメージのない旅であり、小さなものと大きなものを対比させる勇気のない旅だった。

奈落の底.....私は奈落の底が終点である崖っぷちにいる。

待っている間、彼はそうやって歩いた。願ったり、欲しがったり、飛び跳ねたり、ジャンプしたり、煙草を吸ったり、目的地に行かずに歩いたり。不安は年齢に

よって異なるが、人はいつも何かを待ちながら、とても不安な気持ちで生きている。

階段

リフトで階段を下りたが、明暗と緊迫感の間で、見よ、それは自らの意思に従って操作され、上昇し、ゆっくりと降りてきた。

本社

涙から、直感から、あるいは破壊から、その思いは冷蔵庫の水筒から美しい嚙下となって喉の渴きの場所にもたらされ、すべてが満たされた壮大な存在となる。

終わりたいとは思わない。終わりは、そうやってやってくるものなんだ。もう一度、勝者としてこの恐ろしいものを見た。

日

何が起きているのか.....夜明けに感じたのは、夕暮れとともに訪れる優しい悲しみだった。

煙のカーテンの中で生まれ変わるために、見よ、彼はそこで羊皮紙なしで生まれた。

香水を見ていると、狂気の匂い、狂気の拷問、親族もなくすべてがリンクされていない思考、心の孤児、視線を傷つけ、欲望と憧れを殺す他の多くのための1つの愛の痛みは、ちょうどもう1つの瞬間、あなたのその思考から来る1つの瞬間に絶頂に達する、我々はおそらく

すべての美德のイメージとしてだけでなく、外観や状態の関数として存在するすべての瞬間に心が死ぬことはありません。

肉体的な存在が突然消えてしまうこともあれば、頂
点に達することもある。

死ぬことによって生きる

生きるか死ぬか？ ああ、すみません、それは選択です
か？ 明らかに、自殺したことの無い人なんていないで
しょう？ 私たちは皆、生きることを一瞬止めたことが
ある。私たちは皆、例外なく「死ぬ」と思い、そして
「生きる」と思っている。

リーバー

親愛なる友よ...私は書きすぎた...あなたは逝ってしま
った...私の小さな友人...今夜、私の魂は...あなたのため
に泣いている！ 私の心を受け止めて...どうか許し
て...私の友よ...私の自由は...天国で失われた...あなた
は連れ去られた...帰還は喜び...とても静か...静寂...死
んでいった者への道半ば...許された...最後の言葉...

中断

もし私の魂が蒸発してしまったら、ファンタジーと
は無縁の秘密の瓦礫しか残らないだろう。浮かび上
がった転覆から、もうひとつの特別な瞬間の無為さ
が浮かんでくる。

であること

音、口の芯、柔らかな感触、色彩、一瞬のうちに魅了するひとつの夢、独特な絶望と鋭さに触発され、距離もなく、息苦しきの切り口も制限されず、この絵の具で描いたような血の絵の中で想像を凌駕する。私たちが他者に加わり、不純物の混じった存在の承認と励ましの視線から、どのように信じるかを見るとき、

を反転させ、鏡に映した。

思いやりを恐れず、狂気と情熱もなく、鎖のない結び目の純粹な魂が、絡み合い、一体化し、ひとつの感覚を持ち、欲しくてたまらなくなり、最後には手に入れ、そして最後には無になる…。

欠席

もし私があなただの世界に触れ、見たなら、少なくとも誰かが私の現実を凌駕していると信じるという、無言の感受性がなければ、私は不潔になるだろう。私の単純な悲しみは、達成不可能なものとして達成可能なすべての幸福のようなものです。魔法のように、皮肉もなく、ある日、私はあなたに言う、私に触れ、私を感じ、あなたが私をどう見るか、そしてあなたは私が誰でないか、私があなただの隣で何になるかを見るだろう。燃えさかるマッチの中で、私の中にある痛みを燃やす。私は決してあなたを連れ去らなかった。私は決してあなたを見捨てなかったから、あなたは苦しんでいる。

☒

心臓が鼓動するよりも何倍も愛している

私は息を吐き出し、あなたは息を吸い込む。

私のために、あなたのために、そして私
を愛する人たちのために。

あなたは今日、私の心に根を植えてくれた。

それは 愛 への a 人生 これまで 引
き裂くことができる 引き裂かれることはない。

変圧器

バランス 力の 力 光り輝く
その 現実を変える 現実を一変さ
せる。

ボード 電気ボード コマンド をポジション
e 行き先 ユニバーサルチェーンの

太陽光

腸を照らす

地上の自然のオブスキュア。

光り輝く泉は、雫のように地面に落ちる。

灯台

異常の動きを回転するように絶え間なく探す。

感電事故

神経 うるさい 瞬き と 心臓の感電。

電磁波

波打つような思考が波の輪を行ったり来たりする。

電流

この電流が私の体を駆け巡り、波の回路へと私を連れて
行く。

電気インパルス

私は 揺さぶられる によって 衝動に その 循
環する 電氣的に 電氣的に

真実の光

真理は、それを発見することによって輝きを増す。

衝動ブラック

アウト

黙れ その 声 苛まれる そ
の 光り輝く存在感。

光り輝くキャ

ンドル 痛みが

灯る

溶けたワックスがたまる。電気

ドア

触ると柔らかく開くが、開く暇もなく閉じてしまう。

チェーンソーバイク

ダークエネルギーの活気に満ちた憎しみの根で切断され

た。エレクトロキューテッド

記憶を消す光煙の中で感電死。電磁波の乱れ

沸騰する 心の中で 心に 乱れ 無限の電磁
気。

電光石火の光線

どのように 一 線 電撃的 どの 麻痺させる a を麻痺させる。

邪悪なライト

それぞれ 存在 は a 光 極悪非道な光
閃光の 閃光の

点滅ライト

蛍光

四方八方、雷のように咲いては散る。

「難読化

ライトニング ランシング ぼけ 喜
び 他人の 感覚と視線の

白熱灯

ダイナミックで白熱した衝撃が、あなたの魂に深い弧を描く。

電化製品

強く決然とした光を求める気持ちの不調和を、私に叩きつけるような色合いのように。

トワイライト休業

私は自分の存在の鋭い光にそっと包まれ、稲妻にそっと歓喜する。

回想

私は光り輝く一日の中で目覚め、暗闇から抜け出す準備をし、光の力でコンステラ・コミュニティ全体に力とエネルギーを配給する。

脅威の光

私たちを苦しめ、危険を予感させる回復の光を脅かす。

プレゼンスライト

牧歌的な瞬間に付きまとう光は、それに直面することができず、あなたを脅迫し、秘密にしてしまう。

レッドライト

強烈な赤い光と神経を遮断する加速器。

ショック

インパルスを伴わない、心を汚染する鋭い衝撃が広がる。

社灯

悟りを開いた。 どの ない もし を与える e
も 感じる 軽い 会社の

サンダーボルト

雷が軋み、快樂の渴いた音を碎く。力強い光

強力な光は、声による指導に異星人の生命を断罪する
線

どのように 光線 パワフル e 裂 その
切り裂く を切り裂く。

フロストライト

大量の光線が差し込む意識を、彼らは曖昧にしている。

明るい光

光り輝く宇宙の黒い光の霧を強烈に照らす

魂の忘却を癒す、深く浸透するコスモスのように。

光の力

光の癒しの力は、絶望の包皮の中に理性のフィラメントを照らしてくれた。その光は私を日常生活の恍惚の流れへと導き、不健康で理不尽な未来を照らしてくれた。

そして、彼女の光と動きによって私は癒された。

その光は、厳しさと厳密さのカロリー的な腸から出てきたものだ。しかし、その光が私の過去を照らすかどうかはわからない。なぜなら、その光にはエネルギーがないことを恐れているからだ。それゆえ、エネルギーの両極、2つの極が存在する。そして、私はポジティブで癒しの方に打たれ、暗く呪われた方には打たれなかった。その光は、感情の明瞭さと、即時的で衝動的な、移行がなく感覚が不透明で、感情が埋め込まれたり釘付けにされたりしていない黄昏時の合理性から来るものだ。その光は強く、強烈で、反対する者は誰でもその光線で焼き尽くすだろう。

もうエネルギーや衝動的な力はないだろう。自分の持っている才能をつかみ、それを青い光線のように力強く発散させれば、生きていない息苦しさや、光のない影のように私たちに苦しめる悪意ある突き刺すような思考からあなたを切り離し、換気することができる。あなたの中に光があり、雷があり、嵐があり、エネルギーがあり、光があり、本質的に清冽な光があり、最も原始的な形で純粋な火があり、その火が私たちに横切り、私たちに養い、時には私たちに燃やすのだ、すべてのものには光と動きと流れがあり、それは存在そのものであり、私たちに威嚇し、しばしば私たちが理

解できないような奇妙な非難を突きつけるが、それは指示するものでもなく、別のエネルギーと衝突する勇気もなく、むしろその光を消そうとするものである。

ネガティブなエネルギーも、ポジティブなエネルギーも。しかし、青い光線の光は威嚇するが、そのエネルギーで自分自身を運びたい人たちを歓迎することは事実であり、これは光の速度で、即座に、秒単位で、分数で、瞬間で、瞬間は瞬間的であるため、写真にカットはなく、最もばかげた行為でもない。一方、黒いファイスカの引き裂くような効果は、感性のニュートラルな極で起こり、快樂と光に飢えた活気あるエネルギーの狂気の中で運ばれる。だから私は、光に打たれるためにあなた自身のエネルギーを使うようアドバイスする。別の象限からは、クリスマスツリーのイルミネーションや、私たちを気晴らしに駆り立てるストレスなど、乱れることのない思考を持つブルーレイがある。青い光線は、その進路、方向、方角を心得ており、エネルギーや光子を枠にはめ、短絡の可能性を見極める洞察力を持っているが、活気に満ち、衝動的で、常に光ではなく青い光線の速度で移動する。私たちが瞬間的なものを体験するのを妨げる、噴出しないが妨害的な現実的エネルギーに立ち向かうのは、このエネルギーの変遷においてであり、雷はかき鳴らされ、超音速だがそれほど強力ではない速度を生み出す音波に顕著に影響する。直接対決し、光り輝く人々に抑圧され

ると、現実のものを歪め、非現実のように見える不透明な光が濃くなるが、架空の光もあり、それは想像力の光の力である。

ブルーレイ

怒り狂った青い光線は、偏見と不寛容の汚れた孔に芽生えるエネルギーで、私の中に燦然と輝きながら侵入してくる。

レーザー光

このレーザー光は、目に見えないもの、知覚できないものさえも貫通し、目に見えない。それは先見者であり、先見者自身にとって異質な仮定や交差点におけるマスターライトである。知覚できない無害なそれは、そのビームを通して、毒そのものとその解毒剤に毒を持った思考と先入観の吸引を引き起こす。

屋根裏ライト

この煙は、方向性と行動力の緩んだ頭で、記憶のぼろ布に覆われた心の光を突き刺す。行動力は、遅くてまとまりのない心の熱狂的な思考の大群を冷却する原動力となる。その瞬間の無為さを突き抜け、熱狂的になり、さまよう電流の刺激で大脳と刺激的な光の間に分布する。それは身体の塊の中で強まり、催眠術のような、麻痺させるような光を、結びつきのない韻を踏んだ言葉の引き金のようにばらまく。これらのロフトライトは、最先端工学の折衷的なルーツを持つどんな頭の中にも入り込む。小さな猿を飼っている人もいれば、ただの屋根裏部屋もあれば、正面玄関を覆い隠す屋根裏部屋の明かりもある。屋根裏を永遠に照らし続ける記憶、そしていつも箆笥の中で開いたり閉じたりし

ている記憶。

稲妻

暖かくなり、暗くなり、静寂に包まれるが、きしみ、そのときの騒音は息もつかせぬほど圧倒的で、他の光やイルミネーション、あるいは、ため息やため息のような、通り過ぎるだけだが印象的な暗闇の中で、生きていること、存在していることの怒りに伝染する。

最も電撃的な沈黙を破るもの。雄弁なうめき声によってあなたの意識を消し去り、この世に別の稲妻が落ちた瞬間に動けないという機会感覚を無視して行動を促すあの稲妻。光の灰、一撃だけで激しく強いアイロンの熱であなたに印をつけるそれらの灰は、あなたが忘れず、あなたに反抗する過去と遍在する未来の光の灰によって汚染されている。それは一瞬の衝動からあなたを切り離し、ゆっくりと、涙ながらに、そして滾々と広がりながら、あなたに自制を促し、失禁した言葉の記憶に溺れ、光への渴きを注ぐ光の池にあなたを投げ込む。燃え盛るのは、磁性体の燃えさかる灰だ。男らしく男性的な欲望、あるいは女性的で官能的な欲望に燃えるあなたの心の中で、ヒスノイズを発しながら瞬き、その二重人格は、どちらにも屈しない二重人格のようにあなたを苦しめる。この光の灰は、地味なものも軽薄なものも暖め、その暖かさの中に、大陸と時を超えた空間に食い尽くされ広がっていく雨の保護を持っている。

喜びの光の中で

その光は、私たちを侵食し、贅沢な洞察を私たちに与え、無数の憂鬱な快樂や、沈滞した快樂の化学反応の不安へと私たちを導くが、ちりばめられたものではな

く、存在や感情や感覚を照らす他人の快樂の素朴な顔に刻印されたものである。奇跡的で燦然と輝く快樂を感じ、過剰な快樂によって感じる収縮を和らげる感情、過剰な快樂は、私たちを他の感覚や快樂へと向かわせる。悅樂の光は、悅樂をもたらさない悪徳を發展させ、その糧とする。

反動で振動せず、否定の喜びで狂った髪に衝突する。

催眠ライト

光の催眠的な表情の中で感じる手探りは、私たちを躍動させ、光の存在を信じさせるこの光の中毒の欲望を予見させる感情を目撃する。その光によって、私たちは信用も負債もなく、催眠的な快樂の源に溺れる超越的な存在の催眠的な生活のように停滞させられる。慎みと怠惰に充ちた髪と眉毛をかき乱す中毒。超越的なこの光は、私たちを、思考において等しく、反応において異なる新たな挑戦へと導く。反応とは、光を得たいという純粋な欲望に直面する、測定不能で純粋なものであり、光によって養われ、加熱中の粘土のように集まるルースストーンによって導かれる力である。

明るい光

この光は、運動から疎外された肉体の間を激しく分裂し、光に至る2つの容易な道の間を揺れ動くが、電流がなければ自給自足であり、私たちを養い成長させる全身的催眠の苦しさと狼狽の中で存続する。しかし、意識的には、それは消えるほど強烈な光であり、消えても自己の力を伝える。

サイケデリック・サンダー

私たちがこのサイケデリックな雷に覆われているという事実から来る異常性を支え、高める勇敢な雷のノイズの中に、サイケデリックなものが絡み合っている。さて、ここで、もし私たちが、効能も鱗片もない首尾一貫した光を根絶するとしたら、それは、檻に入れられ、呻く黒い雷の異常性のための口実でしかないだろう。

サイケデリックな光の世界は、その中で道を見失ったり、創造する意志も単なる耽溺もなく、淀んだ斜めの色に染まった偏見に満ちた千鳥足の快樂を楽しみたい人たちを苦しめているようだ。思考の断片の精神に染まり、実際に断片化された人々は皆、目を掻くときや、単に瞬きするときのように私たちを苛立たせる、妨害から離れた別の世界を想像している。他の動きから疎外されたこの動きは、心を揺さぶり、粉碎する。雷はサイケデリックであり、霊が存在しないため、霊が顕在化することなく、霊を追い払う。それはボギーマンのような噂と強迫観念の並行現実であり、ここでは、実際には存在しないにもかかわらず、奇妙な個性と同族の存在を餌にする者はいない。それゆえ、非現実的なものはすべて時間を超越した歴史を持っているが、何か、恐怖を持っている。恐怖は私たちを5次元の地平に追いやり、多角形で直線的だが、どんな痕跡にも影響されないし、影響さえ受けない。アイデアは抽象的な理性のフィラメントの中で花開くのも成長するのもなく、すでに見た装飾された文字の衝動であり、模倣の動きであり、瞬間への適応である。計算がなければ、雷は現実的で予測不可能なものであり、サイケデリックなエネルギーの源が他にあると考えるのが

ばかばかしいほど、本物の自発性なのだ。往年の頭はギシギシと軋み、あなたたちはすでに黄葉し、愛書家に食べられている。

どんな忍耐も、記憶の廃れた者、作られた者、偽造された者を威圧する。測定器に囲まれ、ラベルを貼るアベクシンは自らを祝福し、アビシニアの雷鳴は笑う。過去の光の中で生きる者たちは励まされ、彼方で死にゆく者たちは、目前の出来事という顕著な事実の中で天体を侵食する。しかし、すべては多かれ少なかれ強烈な光を放つ発光体であるが、それらはエネルギー的な放射であり、過去とは相容れず、前の瞬間とも相容れない。それゆえ、過去の光は有害な放射を発するが、しかし、いかなる瞬間、衝動、瞬間においても、人が灯したいと望む光り輝く光を眩惑することはない。なぜなら、過去は現在、瞬間、インパルス、秒、分数と交差するが、そのエネルギー的な流れや光度には影響を与えないからである。なぜなら、確かなのは、単純な視線を通して過去の光に伝達する電氣的衝動を解き放つ強烈な電流のパワーや電圧だからである、あまり強くない光、過去世の放射、しかしそれは、仮面を剥がされた光のインパルスの動きから解き放たれる光の原理を導くものではない。まあ、放射線は放射線であり、これは汚染であり、したがって、瞬間瞬間に、すべての瞬間瞬間に、すべての電流なしであなたの光を照らすことより強いものはない。

誰もが自分自身の純粋な光を持っていて、意志と想像力に渴き、発展と創造の純粋なエネルギーを持っているのだから。その光には色彩があり、太陽のような、エネルギーッシュなイエローの色合いに反射している。実際には、光はあまり存在しない。あるのは、視界に入らないものを対象化することで、残ったバランスのとれた存在の病巣だけだ。つまり、意識は存在せず、現実でもない。意識は、私たちを意識へと導く強力な光線の果実なのだ。しかし、意識とは一体何なのか？意識とは一体何なのか。無意識とは一体何なのか。これは、どんなに理にかなっていても、どんなに私たちがその瞬間に向かっていることを理解していても、物質化することのできない障壁である。このように先入観にとらわれた障壁や乗り越えられない流れを物質化する退廃は、実際には障壁など存在しないにもかかわらず、存在すると言われている。なぜなら、欲望と意識の中に常に存在する無意識の光との間に障壁は存在しないし、実際に障壁は存在しないからである、しかし、ここにも流れや衝動はなく、過去の光の中で言われているように、想像上の航空宇宙的な天の生き物がいる。

自然光

この清冽で自然な光ほど自然なものはない。適合、
逆境、

自然であるがゆえに、対立や単なる甘えは、態度や意識的な、しかしそれほど深くはない問題を蓄積する役割を果たす。自然なものとは光との間にはわずかな衝突もない。だから自然なものは私たちが巻き込み、安らぎと静寂を感じさせる。空気、私たちが巻き込む自然な喜び、鼓動し、走り去り、そして何よりも触れるもの、軽やかさのパフを好む人には優しいタッチ。

原子カライト

強力なエネルギー源は、私たちに変容、心理的変異を照射する。この生き生きとしたエネルギーの光は、超越的な存在である突然変異の光に照らされて成長し、実際には突然変異に苦しむことなく、孔雀のように、私たちを行動へと導く、理解した衝動を浸透させる。ダイナミックで、爆発的な放射線のない衝動。それゆえ、私たちはそのエネルギー力を最大限に発揮することができるのであり、それは変容の力を最大限に発揮するものであるため、バランスを崩すことが不可能な光を修正し、崩す核剤となる。そして、私たちを高め、放射線との関係において私たちを增強する変化、変容ほど強いものはない。

向精神薬カライト

まるで魔法か調和のように、彼らは着陸し、浮遊し、翼を打ち鳴らす向精神的な光は、私たちに魅了し、私たちが望む現実を良い願いとして、しかしその世界から戻るときには縁起の悪いものとして交換する。それゆえ、感覚的な活動やダークエネルギーという第3の次元が存在するのである。

様々な視点と官能的な次元で地歩を固め、散発的なエピソードにとどまる者をすり潰す向精神的な光を、現実の極悪非道によって他の狂人たちの視点から想像し、酸素供給し、流すとき。自然そのものが光なのだから、世界や光や現実の間に対立はない。

サンダー

苦く光り輝く裂け目が、アモルファスで透明な光の生存者たちの大地を糧とする雷を激怒させるかのように。苦味の天体に避難した彼らは、この光と力の溶岩によって増強された制御不能の怒りを注ぐ。それは、光と従属的な力のない暗闇の中で、これらの極悪な停電に侵され、エネルギッシュな雷のマグマに温められ、光の幸福を増強させる存在の光を燃やし、養う。光り輝くビームに照らされた、他にはない存在の光の幸福。

発電機

愛を生み出す、あるいは愛を生み出す!

この非仮想的な肉欲と、透明なキスの感情的な連絡と、感情的で電氣的な絆のエネルギーの発展に不可欠なものへの渴望を養うものは何か。この発電機は、朝食や夕食、日常生活のエネルギーを供給する水の摂取の

ように、日常的な表現に隠された顔を持つ自我や人格を養う。仮面や引き裂くような考えなしに、私たちは現実の愛のエネルギーに、あるいは、決して切断されることのないケーブルによって供給される、愛の貫通と代表的な視線、そして人が生きる孤独の、電撃的で切断的なエネルギーの愛に適合する。

朽ちることのないエネルギー！欲望の渴いた表情と、
単調な日々によって生み出された忍耐と、この電気媒
体では何も表さない斜めの顔を、いつも電撃的に刺激
する。現実の生得的で奔放なモーターのイマジネーシ
ョンに飛び込むがいい。運動生活に不可欠な接触、存
在することと存在しないことのコンセンサスの現実の
このモーターは、他の現実から疎外されているが、意
識の欲望にはほとんど気づかれないが、そこにある！
それは即座の機会の意味において常にそこにあり、そ
れゆえ手段は水っぽくなることはできず、手段と利用
可能な資源の生成の愛の思考の中に滑り込む。生成の
愛については、それは常に接続され、仮想的でなく、
この慇懃者の存在そのものと制御されていない他のい
かなる手段にも目を光らせており、それが生成する喜
びから自分自身を疎外することはできず、あなたがい
つも押し殺したいと思っていた魂のかけらのそれらの
常に存在する顔の中で増殖する。エネルギーは一つで
あり、その満足感において多文化であり、満足感は様
々な現実を発展させる。光龍は光を放つことができる
！

電流

私たちを貫き、日常的に私たちを活性化させるこの流

れは、私たちに輝き、歩く存在の強さと擬態を与えてくれる！ 歩くということは、その中に、二元的で抑圧的な現実に向かう光の強さ、あるいは病める抑圧の強さ、あるいは病める抑圧の強さがあるからだ。 そうであってはならない。

その代わりに、革新と実現の精神を養う化学的・反化学的回路のポジティブさと超越的な現実を味わうことだ。実現は個人的なものであり、熱狂的な快樂の糧となるような譲渡不可能なものだが、思考とその伝達の磁気の波へとマインドを引きずり込む。思考の伝達は現実的で磁力を持ち、誰も否定できない回路を発達させる。これらの回路は、抑圧された感覚や快樂の時代を超えた空気の中に広がる電流を持っている。そのため、これらの衝動は私たちの理性に影響を及ぼし、時には思考の衝突が起こったり、発展したりするが、門の興奮とともに私たちを外部の現実へと導く、電氣的な幸福をもたらすことがある。

ブルーライト

強い感情から解き放たれた青い光は、橋や階段を渡り、感情の力に浸透し、それを糧として、この気鋭の可能性を発展させる。より青く、より強く、より強烈なものを求める雄弁な友情の透明感の美しさを、超高感度のビームで歓迎し、このヘルツ波の中で感じたり疎外されたりすることの深い波紋を、私たちの星座に展開する。このパワーは、青、ターコイズブルーの色合いの中で生きる感覚を剥ぎ取られた斜めの心に影響を与え、深く永続的な友情に影響を与え、それ自体が美

を愛する狂気と喜びの魔法のビームを運ぶ。

稀有で爽快な青。たそがれの強さのフィラメントの中で、悪と快楽を歓迎し、保護するエネルギーをオーガニアと静寂とともに発展させ、伝える。それは恋に落ち、理性を剥奪されたかのように、しかし感情の糧となり、快楽と欲望の喜びをもたらす。この快楽は熱量があり、すべてを侵食し、この青い光で興奮の狂乱となる。

電気ケーブル

振動する不安の電流が、希望と何か新しいものを送り込みながら、電線を伝って身体を駆け巡る。動きが麻痺し、緊張が高まり、それが私たちを現実にはめ込み、コントロールされた慎重な動きで、私たちは思考の階段を下りていく。この思考のエスカレーターの中で、私たちは行動、顔、動きを分類し、人生の瞬間の下降と上昇の中で自分自身を適合させる。

上昇する人、そしてそれを支える人、それで十分なのか、それともバランスの問題なのか。力のバランスは、各存在のレベルにおける動きのバランス、下降と上昇のバランスにとって基本である。道を譲る可能性のある外的な力のバランスを取ることなく、その歩みは確かなものであり、希望のケーブルに支えられて、あなたは最も重要な電気ケーブル、生命のサイクル、地球を養うエネルギーに到達する。

発泡性の光

征服しがたい欲望の光の波紋の中で、それは落下し、発泡し、希釈され、膨張する。なぜならそれは、光で発泡するすべての視線のような幻想であり、後に外的現実と直面すると崩れてしまうからだ。悪意と偽りの散発的な狂気のエピソードを与えられ、膨張し、汚染し、すべての思考を占め、支配し、支配されることを許す愛のような発泡性の欲望、これが活性化するエネルギーの交換であり、決して消えることのない発泡性であり、光り輝く内容がそこにある。

ライトアップされた空

照らされた空の完璧なバランスに到達したいという願

望ほど強いものはない。星々が空に生命を与え、思考やアイデア、あるいは事実を願望から具体的なものへと動かすのだから。星々の中の絶え間ない相互作用を求める星座のエネルギーに照らされた空ほど美しいものはない。星々の力は唯一無二であり、私が言うように、変化への意志と欲望の照らされた空を持つ魂ほど強いものはない。

相互作用とスタータッチは思考を磁化するエネルギー の漏れ

宇宙の現実を解釈しようとしないうエネルギーが、火のない煙のように消えていくのが怖い。政治的な正しさの仮面であることは間違いない。純粋なエネルギーの魂よ、自分自身を魔法に変え、事実と物事の絶え間ない変異の真実の衝動的な流れを持っていない心の上を飛ぶ。自分自身を解放し、拡大し、そして何よりも、人生の変異、私たちを駆り立てるその変化に苦しめられなさい。

生命の光

彼らは狂気の情熱を沈めた。なぜかという、私たちは本能的に愛し、愛されたいと思う情熱と幻覚が、さまざまな幻想への道を開くからだ。惑わされ、愛に溺れている私は、真に愛するという方法論全体に集中し、集中する。愛されるという行為の場で裸になることで、私たちは存在の真のアイデンティティーに直面する。それゆえ、愛されることは、なぜ自分が愛されているのかという深い自覚を私たちに要求する。だから論理的には $1+1=2$ 、正しいが、もしその結果が態度や価値観や行動全般の技術的な結びつきでなければ、行為

は生産的ではない。理解した。

あるいは、個人主義者は別の行動を望み、行動は真の自由として理解される。論理的であるか非論理的であるかは、皆様のご判断にお任せするとして、私は絶対的な自信を持ちたくない。私はそのためにここにいるのではない。実のところ、私は狂ったことや、自分が犯さない態度を恐れている。狂った人は、特定の状況下でのみ、また他人によって判断されたときのみ狂っているのだから。この推論から少し逸脱して、私は自分が狂っていると言いたい。何人もの人を好きになり、それが決して満たされない理由だと思い込んでいる。私たちは皆、愛の中でおかしなことをする自由があり、傷つきやすく、しばしば操られる。愛することが真実だと信じたい。なぜかというと、愛されてきたからだ。愛情を目覚めさせ、人生の知恵を呼び起こすこの感覚、愛するという行為、そしてこの愛を明確かつ自発的な方法で伝えること。最大限の始祖エネルギーを与えてくれる素晴らしい存在を楽しんでください。その光は、太陽系そのものを照らすビームとなって再生します。愛の光は決して遠い地平線の上では捉えられない。それは接触することで広がっていく。そして方程式を成長させ、 $1+1+1+1+\dots=$ より無限にするのだ。

それでは

愛のフィールドには、磁力、魅惑的な力があり、会いたい、欲求を満たしたい、あるいは単純に楽しみたいという欲求を引き寄せる。

エネルギー協会

光：熱：太陽：力：分別：唾液：キス：分かち合い：
感じる：喜び：パーティー：誕生日：年：歳：老い：
忍耐：根気：征服：犠牲：痛み：治療：医者：健康
：活力：力：インポテンツ：挫折：苦しみ：倒れる：
めまい：気が狂う：狂う：病院：入院：剥奪：欲
望：意志：欲求：勝利：征服：戦い：戦争：死：失
う：消える：存在しない：孤独：思考：創造：発明
：嘘：残酷：不道德：罰

: punishment : reprimand : fine : police : protection
: safety : stability : equilibrium : imbalance :
abnormal : disease : psychiatry : help : therapy :
clinic : injection : nurse : morphine : drug : illusion :
disillusion : anxiety : nervous : tension : fight : 喧嘩 : 戦
い

ファイター：勝者：レース：競争：アドレナリン

恐怖：fear：doubt：interrogation：question：answer：
curiosity, interest; satisfaction：pleasure：orgasm：
sensation：conscientious：accountability：guilt：
guilty：innocent：free：freedom: justice：honesty：
truth：sincerity：transparency：invisible：unreal：non-

existent : imagination : 想像力

創造 : 夢 : 眠り : 休息 : 静止 : 停止 : 標識 : 記号 : 図
面 : 鉛筆 : ゴム : タイヤ : 道路 : 旅行 : 交通 : 列車
: 糸 : 針 : ピン : 裁縫 : 操作 : 介入 : 変化 : 移行 : 段
階 : 拡大縮小 : 分類 : 索引 : 用語 : 単語 : 文章 : 対
話 : コミュニケーション : 表現 :

デモンストレーション：プレゼンテーション：イ
ントロダクション：序文：本：葉：木：自然：風
：空気：海
火：地球：太陽系：エネルギー：光：パワー：ブル
ーレイ：)

エネルギー活性化

不満を満足に変える 繁栄の光

私はあなたの世界を彩るすべての色であ
る。

もし続けたくなければ、何かが私たちを立ち止まらせ
るだろう。しかし、それが感情、感覚、刺激を展開し
、発生させる行動であるなら、なぜ立ち止まるのか？
まるで子供のように私たちを麻痺させるエネルギーを
、何の反応もなく放つのはなぜか。私の親愛なる友よ
、勇気という言葉は裁かれるための命令であり、誰が
理性の裁判官となるのか、誰が正常で異常なのか.....誰
もわからない！ 私たちは皆、信念を持っているし、私
は信念を持っている人たちを信じている。だから、欲
望と全知全能と現在の欲望への疑念は残るが、暗示と
欺瞞のハーブのように、幻覚的なエコーでサイレンの

音を伝える。リラックスして耳を傾けるより他はない。私たちには2つの耳と、話すことの2倍聞くための口があり、沈黙は行動であり、甘えやコントロールの欠如ではない。沈黙に抗う者はほとんどいない。沈黙は無言だが、衝動や欲望という制御不能な欲望に対する完璧な武器として機能する！

ある日、雷が鳴ったなら

もしある日、光線があったとしたら、それは破壊的で、恐ろしく、騒々しく、無慈悲なものだろうか、それとも光り輝き、美しく、輝き、エネルギーなものであるだろうか……。それぞれの光線は人間のように異なる特徴を持ち、異なる行動様式を持ち、異なる光を放つ。ある日、それが光線であったとしても、少なくともそれはオリジナルなものでしょう。それぞれの光線には作用の形があり、人間と同じように、どんな瞬間にも、その作用は一瞬のうちに現れる。私たちは光線／ビーイングに作用し、その方向や行き先を変えることができる。ある日、私はコーランの信奉者と信念と信仰について話をするようになった。この話を要約すると、サイコロを投げたのは結局誰だったのか、ということになる。しかし、この話とは別に、私たちには作用があり、媒体と作用する光線／存在があり、それぞれがそのエネルギー／形態／行動でサイコロを投げるということをお伝えしたいのです。

人生の光に照らされて卒業した父の教え

私の父にも、私の教えにこのような貢献をしてくれたことを感謝している...あらゆることを少しずつ...こうし

て私たちは形成されるのだ...人生に注意を払うときに
...。私たちを取り囲むもの...すべてに敏感であること。

反射光

頭がおかしくなりそう

だ。

カナリアが鳴きながら、この世界で目覚めるのはどん
なにいいことだろう。歌いながら o 魚 a 泳
ぐ e a 木 a 酸素を供給する。

歌で魅了するピンタ・カナリア。水面を泳ぎ、滑空する賢い魚。そして、息をして鼓舞するアマゾンの盆栽。私の世界を輝かせ、鼓舞するこれら3つの存在に加え、私は窓の下に、20年前の世界を全体化したもうひとつの地球儀を持っている。ソビエト社会主義共和国はまだ存在していた。地球儀の下には、私にとって忍耐を意味する元の色のバラと、私にとって希望を象徴する強い緑の色調で描かれたバラがある。この私の世界で、私は書き、想像し、まるで邪魔されないかのように感じる。完璧な暖かい雰囲気と明るい朝の中で、私は、友愛のバラを想像したいと願う、愛に満ちた魂のために書いている。

平凡な"フィリペ・モウラとの200日

私はいつもとは違う現実の中で目覚め、この本を通して書くこと分野を開拓することで、自分の存在を広げようとしていた。

私は、思考が伝達される方法について考え、それを光とその力に例える。

私たちがさまざまな角度から考えるように、そこには従うべき流れがある。

魂には乱れる瞬間がある。私たちが自分自身を見る目

は、必ずしも素朴なものではない。

エネルギーは拡大する。悪い行いに悩む心が蔓延する。

ユニゾンの声は一人の声より大きく聞こえる。

言葉は表現の芸術だ。

この瞬間からインスピレーションが生まれる。心臓の鼓動には独自のリズムがあり、それが血管を通して広がっていく。

弾圧はこっそり行われる。

どんなものにも "悪" がある。時々、彼らは私たちを黙らせる。

私たちは皆、考えている。記憶は常にあるわけではない。

憎しみを実践するのはよくない。誰もが適切なタイミングで機会を得られるわけではない。

時に私たちは、そうさせるからこそ苦しむのだ。私たちは皆、表現の自由を持っている。

真実ほど正直なものはない。私にはいくつかの表現方法がある。

元気であるということは、バランスが取れているということだ。

バランスとは日常のサイクルである。緊張することはバランスを崩すことだ人はコメントをしたがる。

私たちは皆、純粹さを持っている。太陽はエネルギーの源。

普遍的な愛は思いやりを生む。異常なのは、何も起こらないことだ。私たちは皆、忘れたくなると忘れてしまう。常にいくつかの視点がある。多くの考え、少数の信念。

取り返しのつかないこともある。誰もが不公平にさらされる。愛は喜びの源である。

常に だけ e 保護されているそこには 人
には 好きではない 考えるのが考えることを
好まない人がいる。

意識は私たちを照らすランタンだ。

私たちは皆、依存症を持っている。恐怖を抱くこともある。みんなくだらない話をする。私は誰のために書いているのでもない。

誰にでも思い出したくないことはあるものだけど、悲しいときにはそれを認め、隠し事をしないことはいいことだと思う。

人は誰でも弱さを持っている。誰もが何かの喜びを感じている。

チャンスが訪れればドアが開く。相手に対する気持ちがある。誰も誰のものでもなく、だからこそ誰もが輝く権利を持っている。

友情は常に良いスタートである。

何がポジティブに見えるか、直感に従おう。

私たちは皆、愛されることができし、愛は光の発生装置だ。

愛されているとき、私たちはこの気持ちを尊重しなければならない。

愛し合って出生率を上げる。常に言葉は相反する。

拮抗した言葉であることは間違いないが、苦しみを避けるための論理である。「年寄りが持っているのは知恵ではなく、慎重さだ」だから聞いてほしい!

私たちは皆、善と悪を知っており、善であるか悪であるかの決断を手に行っている。狂気はある種の正気である。本当に知ることが重要であり、できれば人生の学校の卒業生でありたい。私はあなたのために、私のために、そして私を愛する人たちのために自分を変える。進化のための変化。

電撃的な連想！ 感じる反射する私は理解するそして一日中エネルギーを放出する！ 光は光を引き寄せせる力とは知ること！ 知ることは学ぶこと！ 学ぶことは発見することであり、感じることである！ 感じることは反射すること！ 捉えることは学ぶことである！ 理解することは悟ることである！ 自己を理解すること！

私であり、あなたであり、彼であり、私たちであり、彼らである！ 私たちはみんな私だ

そして私は彼らだ！ そして彼らは私たちです

結局、私たちは何者なのか？ 私たちは存在する！ 私たちが存在するのは、私たちが創造されたからだ

受胎による創造！ 生命の光！ 創造の光！

想像と現実！

願望と事実の二元論！ 現実の解釈である事実！

私たちを取り巻く現実！ 私たちが創造された環境！ 私たちを変える環境変革・変化！ 革新と変化変化のサイクルの段階変遷の段階

移行障壁！

サイクルの克服と困難の克服！ 創造された困

難、想像された困難、あるいは現実の困難！

潜在意識と意識の相互作用の難しさ／問題！

意識的 e 実現 無意識 e 投影！ 自

己の投影！

存在！

私は存在する！ 私たちは一つの自己であ

る！ 世界は一つ！

世界は、"私"は私たちへと変貌する！ 私たちはこの世界
とその上で行動する！

私はあなたの一部で行動し

ている！ あなたは彼らの上

に存在している！

彼らは世界だ！ 存在の

世界！

生き物であろうとなかろうと！ 生物であろうと無生物
であろうと！ 光を生み出し、光をとらえる！ 光のエネル
ギー！

パワー・エネルギー！ パワーとは欲望である！ 欲望は欲
望である！ 欲望は現実である！

すべて何とか 到達 〇 リアル 現実 は事実
であり、行動である！ 行動とは行動である！

アクション é 反応 への 世界への

世界へ 世界 行動 は変容である！
変身とは修正である！

変更 é リアル 変化 é a 欲望 永久に！
私たちは永久に欲望を追い求める！

欲望は抑圧される！欲望のすべてがこの世にあるわけではない！
不満！

私たちが持つことのできないもの、存在しないもののために！
非現実的な非存在！非事実的思考！実現不可能な非事実！
達成不可能な絶望！絶望の苦しみ！

存在しないもののために苦し

む！存在しないものは欲望を

引き寄せる！

もし ない もし 行く 何を 届く ないが存在する！

幸せ！ 幸福 願望の実現！ 不幸実現不可能な願いの

実現！ 実現不可能

うつ病を引き起こす！

未実現のうつ病心理状態。現実化されていない、

事実上の非現実！

世界には非現実的な事実が存在する！ 手の届かない世界
として推定されている力と事実！

それは到達可能なものではなく、スピリチュアルなものだ！
スピリチュアルとは、自己の感じ方である！ 私たちは皆、
スピリットとともに生きている！ スピリット／素質

モチベーション.....私たちを駆り

立てるもの！ 行為への衝動！

他者への行動！ 行動、行動！

他者、彼ら、私！ 私対彼ら（世界）！ 社会的世界！

学習行動知識理解！ 本当の事実を知る武器としての知識知識の伝達私、彼ら、そして私たち、世界の間で！
世界を知ること、その中にあることである！

我々は知識の世界だ！ 私たちは皆、何ら

かの知識を持っている！

知識を共有することは学ぶことだ！

学ぶことは共に生きること！ 共に生きるとは、コミュニケーションをとることである！ コミュニケーションとは、関係することである！ 関係するとは、交流することである！

交流とは、世界に働きかけることだ！

行動 オン o 世界 é を変える! 世界を変える
知識によって世界を変えることが進化なのです

進化するということは、知識を持つということだ!

知ること é 知る 変形する 知識を
知識を世界に変える! 叡智の多文化世界!

無限の知恵! 無限の到

達不能

賢明であることはユートピア的である! ユートピアと
は、達成したいという願望である! ウィル

意志とは内なる強さである!

内なる強さとは自己である! 自己が世界を変える

世界は彼らによって変容する。彼らは変容する世界なの
だ!

世界を変えるのは私たちだ! 理性を通して! 正義の理性
!

正義は権利に等しい! 権利とは、我々が自己であるから
こそ与えられるものだ! 義務

私たちは世界に対してフェアでなけれ

ばならない！ 自覚を持って、何が現実

であるかに基づいて行動する！

非現実的な事実を意識して行動する！ 非

現実的事実の想像力

想像力 - 創造！ 存在しないものが創造される！ 想像力の創造力！ 創造できるということは、自由であるということだ！ 自由とは知ることである！ 知ることは解釈することである！

解釈することは、思い込むことだ！ 想定することは約束だ！ 妥協とは盟約である！ 盟約は誓いである

誓いは忠誠！ 忠誠は

真実である！ 真実は

一つである！

私は宇野だ！

我々是一个の世界だ！ 私

たちは彼らであり、私た

ちであり、あなたである

。存在する。

成長することは存在する

こと。存在すること。存

在することは現実の事実

である。

私たちが存在し、私たちが世界であることが

現実なのだ！ 生物と無生物の世界！

世界は私によって、あなたによって、そして彼ら

によって変容する。世界は進化している！

進化するとは、より知識を深めることだ！

知識があるということは、知識を

持つということだ！知っているとは

知っているということ

だ

知ることは経験すること！ 経験することは感じることで

ある！ 感じることは知ることで

私たちはそれを経験して初めて、そ

れを感じる！ 経験したいと思ったと

きだけ経験するのだ

望むことを経験する選択の自由！ 権利、尊重されるべ

き義務

そうしたくないし、わからない！

いいえ 知っている

知らない 私

たちを変える 知識

を購入した!

世界のさまざまな自己のために!

わからないなら、やってみたいなら、他の私に聞いて

みて! 選挙は、私と彼らの経験からのものです!

がある。 ある いけない その à

最初から 他の はすでに経験している

!

そして、それらが良くないことは常識である! 常識的な
生活の知恵! 生活の知恵!

経験を共有する!

獲得した知識! 交流を通じて、交流することは変容す
ることである!

世界は相互作用だ!

世界は私たち! 世界は私であり、あなたであり、私た
ちであり、あなたであり、彼らである! 共有、友情!

友情の共犯関係! 価値

観の共有!

いくつもの結び目を持つ同じ自分。社会とは私たちのこ

と。私たちは皆、友人を持っている！ここだけの話、私たちは行動できる！

自分たちの間で行動することで、彼に影響を与えているのだ！

彼は世界！世界の影響！変容！

新しい私、私たち、彼ら、そしてあなた！新しい世界。新しい現実。

欲望

キスをちょうだい...あなたが知っているキスのように！隠されたキスを、私たちが欲望を募らせていたときに奪い合ったような、そんなキスをちょうだい.....そんなソフトなキスをちょうだい

あなたは知っている！ 私はあなたにキスをする！

不眠症のあなたにキスを贈ります

私は眠らない。眠りたくないから、生きたいから。眠らせてくれない障害がここにある。不眠症で立ち向かう

漫画の狼の影は迷子だったが見つかった。保護された。それは化学固体の器用さと impres- cible h20 を養う。影自身の純粹さの中で冒険のために飛び込み、着陸、caricuaio を持っていた。オオカミのように保護されたが、態度だけで、見かけの孤独に陥った。今日、私はオオカミが彼の世界に直面して caricuaio と書いて、私はそれを解釈します。独立した友人は、私が卒業した caricuaio の胚は、若い忠実な、すべての上に正直な大胆不敵な性質、その本質的な激しいが、忠実な、友人と彼の仲間と友人の尊敬の血を持っている人生の真の初心者の彼の野生が、慈愛に満ちた性質なしでは生きていない。だから、旅行や共犯の忠実な仲間は、常に愛情と沈黙で解釈した。しかし、私はオオカミの中に勇気を見たし、彼は沈黙の親友の友人と彼の自由のための法定とのリンクを確立した。オオカミが持っていたものがあるとすれば、それは自由だった！ そして自由

だった！ シャドウ・ウルフは、その在り方において人外のエネルギーを放っていた。その吠え声によって、彼の遺伝子の野性からの独立が課せられた。私はクリスマス・イヴの夜、狼と、あるいは戯画化されたシャドウ・ウルフと、一皿の料理と一杯の酒によって友愛的に結ばれた自由を分かち合うことにした。私たちは孤独なのだろうか？ もちろん、自然が私たちを形作るように、私たちは自由に考えることができる。それは贈り物だ。

今年のクリスマスは、私にとってオオカミのカリクアオだが、生得的な遺伝的環境によって野生化した彼は、自らの本性における純粹さの自由な状態という感覚に染色体を引き寄せさせる。生き方については謎めいているが、生きることへの渴望に駆られ、孤独な一面を楽しみながらも、いかなる制限や押しつけからも自由である。

私とシャドウ・ウルフは友人であるが、他人の強制から行動する型破りなやり方が特徴的で、私たちは母なる自然によって自由であり、そうして私たちは成長し、彼らが私たちに浸透させたものを誘導する。ハバナ・クラブは、革命を渴望し、私たちの存在を乗っ取ろうとする同じ狂気の本質にあり、ここでは自由だが、犬の本能の協力による孤独な協定である。

失礼ながら、私とあなた自身を許してください！あなたは私を、私はあなたをどう思いますか？私を読んでくれたこと、おそらく理解してくれたことに感謝している！

あなたがすでに私を読んでいる場合は、考慮事項の一部に渡すことは、すでに法的な時間にあなたのelações少なくとも雄弁なプレゼント包装を解いて取っている

雄鶏の質量またはゲームは、ここでは恐ろしい質問です! ?

私たちを隔てる沈黙の最小限の単純な反響に理解できるコミュニケーション的エクスタシーへの反射。行為は、拒絶の単純な熱情でさえも苦痛の言葉である。物理的には乗り越えられない障害だが、光り輝く存在のホルモンとスピリチュアルな化学反応にはない。天体は、完璧な愛の開花のために私たちを侵略する。多面的な存在を理解し、常にこの視点に何かを加えることで、豊かさが成り立つからだ。慈愛と優しさへの欲望は、私たちを代表的な自尊心へと追放する。

社会的環境。唯一無二の自己という観点から見れば、その輪の中にいかに多くの意志が生まれようとも、いかなる意志も同盟することはない。そのような黄金の輪、善意の同盟、忠誠と尊敬の同盟、何よりも義務は存在しない。私たちの行動は純粹で乱暴であり、自己ほど利己的なものはない。考え方の単純な対立によって心が燃え上がる時、私たちは常識に訴えなければならない。自我に道を譲ったり、他我の邪魔をしたりするのはどんなときか。望まないものを拒絶することほど平凡なことではない。愛し、愛することは、自己ではなく他者を感じることである。私たちの間のリンクの建設的な態度は、他の生き物と一緒に生きていることによって、調和に苦しんでいる。本能的な行動に刷り込まれた私たちは、自己のことしか考えず、次に自己のことを考え、そしてまた自己のことを考える。対立するのは、自分が自分へと変容し、もう一方の自分に屈服するまでに何人の自分が我慢しなければならないかを正確に知ることができないからである。それは、常に開かれている私たちのところに来るようなものだ。どの自分と向き合い、どのレベルの利己主義であるかに注意を払う。自己の鎧はいつか、存在する、私より

も私であるあなたによって打ち碎かれるだろう。そして鏡の前に立ち、映し出された自分だけが存在するというのはどういうことだろう。私たちが孤独でいたいと思ったのは、さまざまな「私」に対する「私」のわがままのせいだったのだ。孤独.....それは、多くの自己愛が持つ言葉だが、私プラスあなたへの愛を生み出さない。愛：私とあなた omnia vincit amor 愛はすべてを征服する。

Ai se tu sabes e quisesses ai que tu sabes e nunca deve porque esta ansiedade perdulária porque é saudade e é séria vens de lá para cá I nao vejo nem dá como seria perfeito seria um feito que tu viesses e trazesses

あなたは連れて来ないし、現れて来ない、私は目を覚まし、憧れなく暗闇を去った。私は自分自身を見つけ、情熱と欲望をすべてのものに包んだ。強いキス、強い抱擁、私がお与え、受け、求めなかったものすべてが、存在の再生から生まれ、痛みなく愛と一緒にいることを求めなかった、求めず、要求せず、与えよ.....シャベルを探し、万能薬を見つけよ.....同じものはない、金ではない宝物だけが、永遠の愛なのだ.....あなたは、私が何を望んでいるかよく知っていたが、私はあなたに言わなかった.....深い何かがあることを見ていた.....私が見ていたが、翻訳しなかった何か.....それは力だった.....持つことなく、それは生まれることだった.....見ることなく、それは私の中で成長した.....私を好きになるように.....そして、あなたのために.....私は書いた.....そして、私の中で成長したものが愛であることを私は見なかった夕暮れ時、恐れることなく、震えることなく、眠りに落ちることを恐れることなく、孤独を温めながら、心の下に手を差し伸べるように、あなたがそこにいることを、窓際にいた私はあなたを見なかったが、私は知っていた。

私は僧侶に、前方、未来を見せてくれるように頼んだ。そして、あなたは最後にそこにいるのだと思った。

私はその思慮深いタバコを点灯し、ビーイングと思考オブジェクトの間の調和を楽しむことは私が書いたものを芯にワイヤーを読むことはありません作家と読者の間の思考客観的なアイデアや相互作用で行と流れの間をさまようようになり、その奇妙な、しかし、私は誰かがなぜ彼らが好きな読む知っている、私が伝えたいことに到達するか、それは漠然としたものであるタバコが消えて、私は私のためになると思う...! 私は知らないが、私は精神的、知的リリースの形として書くことは私を読む人が幸せであり、よく最近、私は光とエネルギーのためではなく、愛と理解先のために、より具体的であることを望むために良いですが、愛の心は、より多くの愛情、賢明な何かを読むのが好きな人のために愛情深い言葉を発声し、私は愛に腕を開いている私はより直接的で具体的であり、読者と作家の親和性を結びつけるような感覚に到達したいので、私はいつも自然発生的でありながら、一緒に来て、常に接続と文章を形成する文字の間の和声の友好的な言葉にアピールし、非常に現実的な私は思慮深い言葉、瞑想

的な文章を期待している考えさせたら申し訳ありませんが、それは不条理についてであっても考えることは良いことです。

このシンプルな方法や気質は、普通のフィリペ・モウラを通して、私を読んでいるすべての珍しい人のために、私が書いていることを読むために多くの忍耐は一般的ではないので、私は告白し、私はほとんど読みませんが、私がするとき、それはまた、私を考えさせ、ここに私の課題は、読んで、読んで考え続けることです。私は感謝し、それは誰かがまた思考を考えていることを考えるためでもなくとも幸せです！多分、あなたはそれを感じていないかもしれないが、私はそれを感じている、石の上の雨のように舗装の穴に入る砂と土の下に一体化され、ハードと厳しい接続がない場所、スペースも、もう一つの石は、ここでは効果的な関係である石、土、私たちがその上を歩くように、砂や土の有無にかかわらず、冷たい石と石の関係は、それらをつなぎ、愛を完成させた石工の手によって結ばれている。石工は、いくつかの石をつなぐ人であり、石の心をつなぐのではなく、他のどんな石にも型どられる感情をつなぐ人である。愛があれば、もうひとつのピースは砂となり、大地となり、私たちに壊れにくくする、すべてのピースが揃っていて、うまく舗装されていれば、摩耗は最小限に抑えられる。人間は自分の石を完成させ、他の石をつなぎ合わせる。

地球上の人間が正しい場所に収まるように成形されるように、すべてのピースが収まるパズルをイメージしてほしい。そうすれば、すべての人に居場所があり、他の人より重要度が低いということはない、すべてのものには在り方があり、つながり方がある。私たちの住む地球は巨大なパズルであり、私たちは知らず知らずのうちに互いにつながっている、しかし、すべてがフィットするのは自然なことで、結局のところ、私たちは道を求めているのだ。もしあなたがありのままの顔を見せるなら、私がありのままの顔なら申し訳ないが、私はありのままの顔を見せるし、私の顔は高すぎるからということで売られているのではない。ある日、王冠が顔に取って代わったからだ。

それは顔のない王冠であり、同じ痛みであり、同じ熱情であり、愛であり、情熱であり、私たちの想像力であり、想像から現実への転置であった。私は情熱に忠実であり、熱情に愛情を注ぎ、たとえ痛みがあっても、このあなたの素晴らしさのために、私は存在し、私は私たちの世界では俳優である。あなたは無声映画の女優だが、私たちの通路は「ここに私たちの熱情がある、痛みのない愛がある」という歌を歌うロマンチックな映画の撮影である。もしあなたが未来を恐れているのなら、あなたが傷つくことなく苦しんでいるのを見るのは辛かった、私はあなたを必要とし、あなたは私を必要とする あなたは行動し、私は反応する あなたは笑い、私は微笑み、あなたは話す あなたは承認する あなたは見て、私は気づく 私たちはいつも調和している キスだけで、私はあなたを欲する 私は旅に出る 走る 飛ぶ 私はいつもつまずく でも転ばない 傷つかない あなたは私の欲望の特効薬 約束する あなたに会って、すべてを発見する 私は何も知らない なぜなら私はすでに未来がどうなるかを想像していたから 私はあなたを見て、あなたを感じた あなたは私を感じた私の書いたものを読んで、私を感じたのは、いつも私の近くにおいてほしいということだった。

帝国の征服は現実であり、それは想像ではなく、ごまかしのない光景であったことがわかるだろう。

なぜなら、野心とは征服することであり、また征服することだからである。だから、到達したことに喜びを感じ、また到達したことに不満を感じ、常にそれ以上の何かを求めるのである。美の背後には性格があり、私たちが常に個人的で実現可能な理想主義に従わせようと駆り立てるこの力があり、それゆえ人は個人の行動と社会的な理想を守るのだ。親愛なる友人たちよ、この違いは、ある考え、思考、適合する在り方に従って行動し、物質化する態度を示すものであり、それゆえ求めているのだ、私たちの誰もが特別な存在でありたいと熱望する、まさにその理由の発電機なのだ！君の緑、君の茶色、君の魅惑のプリンセス、君の魂は燃えている、僕は君が欲しい、生きたい人のように、楽しい呼吸がしたい、君の色が僕の痛みを癒してくれる、君の輝きが僕の魅力だ、君の美しく美しい髪の毛の鼓動が、心の根の間にリンクを作り、孤独を殺してくれる、その情熱、その手、その触れ、その微笑みが僕を楽園に連れて行ってくれることに感謝して、自分を祝福する

君を見た、君を見た、君に気づいた、また君を見た、ま

た君に気づいた、君が好きだ。

愛のジェスチャーだった。

もしある日、自分が迷っていることに気づいたら、私を出発点だと思ってほしい。人生は地図だと考えてほしい。

創造することなく想像すること 読むことなく書くこと
聴くことなく聴くこと 暗記することなく勉強すること
ここにあるモットーにはテーマがある 見て、感じて、
手放すこと 文字の中にある言葉の中にあるフレーズの中にある詩の中にあるもの 私とともにあるものすべてがテーマである 今日、私は現実化されたと感じる 過去を持たずに近代化されたと感じる 覚えてはいるけれど、忘れて、また現在にすべてをやる 理解していることを感じる 真実を感じる 顔に年齢を感じる 目を見て感じる 皮肉やデマゴギーなしに、私は自発的であり、事実であり、時間厳守であり、実際的である 今日はこのようであった それを忘れて、前の瞬間がなかったらこのようであったようにする それは内側から来る 私は外側を見る 私は覚えている 私は存在し、私は今自分を見る 瞬間はすでに過ぎ去った それはすでに過ぎ去ったその瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間、その瞬間

その輝きは内側から湧き上がってくるもので、それが騒ぎになるかどうかはわからないが、私はあなたの親密さへの旅の傷の炎を感じる。あなたが何を感じているのか、何を恐れているのか、何を欲しているのか、私は深いまなざしで見ている。彼らは侵入するが、あなたのものである私を奪わない 私たちの夢 川岸での出会い 私は微笑む あなたは水中で石と戯れ、石は動き、動く 石は硬いが、あなたと水は最大の狂気の純粋な所有者である もし私が座れば、私は空想の中で行間に書くことを考える水槽の中の魚のように、何も無い、何も無い、しかし呼吸に疲れることなく、酸素を供給し、ある日水槽なしで泳ぐ自由を求めて、そして夢を見る。あなたのポジティブでクリエイティブなマインドを空けることなく、あなたを心配させるものを見て、感じる。他の人たちと同じように幸せで満足しているあなた、それが私の願うことです。情熱があるように、私は前を見て、あなたが存在しているのを見ました。

いつまでも君を想うとき、僕はいつも、へそとへそ、唇と唇、身体と身体が一体となっている君を見るんだ。それは僕が見たもので、言わなかったものだ。それは僕が望んでいたもので、感じていたものだ。私の想像の中で、それは太陽のように一日中エネルギーを放ち、決して消えることのない、黄色い色合いの美しいものの創造だった 私が光を消すと、暗くなり、すべてが見えなくなる 私はこの次元に入る 理由がある 暗闇がある 動機がない 想像がある 何もない 空虚なもの 見えぬもの すべてが暗闇に映し出される 壁が想像される 障害物が倒される 触手よりも悪いショーが始まる 私は光をつける 幕が上がるときまで

私は夢を見ている.....あなたは考えているけれど、あなたは考えていない! 私たちは考え、行動し、私は暗闇を見て、私は光の乗客ではなく、常に1つだけであることが起こるように、私は全体である限り、私はリラックスして、耳に吸収され、私に言う音によって、トーンによって壊れて感情眠っている体の部分を感じる私は眠りに落ちないが、多分それは緊張を和らげるために何かを忘れていた方が良く私は停止しているタイ再調整多分それはすでに過ぎている私は自分自身を解放し、私は静かですが、質問には常に解決策があります

私は反応しないが、私は状況を担当し、ここで苦しみを終了するには良い機会です。

夢を見ていたような気がした 目が覚めると夢の中で君がいた おとぎ話のようだった 君が一番魅力的で 美しく お姫様のようだった 君が僕のインスピレーションだった 想像じゃなくて 騎士だった 君のための戦士だった 僕の心を守ってくれる鎧がなかったら どんな行動も起こせなかった 君が眠そうだった 君が口を開いた 君が眠りについた 君の横にもたれている姿を思い浮かべた

横たわったまま、私はキスを求め、あなたは彼女の望みを叶えた。

あなたはとてもかわいい あなたはもう自分の足で歩く
赤ちゃん あなたはとてもかわいい あなたはとても優しい
あなたは友達 あなたは私と一緒にいてほしい あなたは面白い
あなたは最高 あなたは最高 あなたは私が望んでいた美しい息子のすべて
あなたはとても愛情深い あなたはとても微笑んでいる あなたは共感する
あなたは最高の喜び あなたは私の息子 あなたは私の世界 いたずらっ子
あなたはティアゴ あなたは私の息子 あなたは私の息子 あなたは私の息子
あなたは私の息子 私のかわいいクールな子供 あなたは一日中最高
あなたの笑顔、君の笑顔、君の喜びは、純粹なものの魅惑的なエネルギーだ。
君は壁を飛び越え、君はフェンスを飛び越え、君はお菓子をもらいに僕のところに来る。

私は雲の下を旅し、空の下を飛び、火星と木星の惑星にいた。火星ではあなたを愛すると決め、木星ではあなたを求めた。そしてここに、ペンから惑星へと飛び回る私の存在がある。そこには強さがあり、エネルギーがあり、喜びがあった。それは何かを伝えるものだった。それは花の形をした愛だった。それは太陽の強さを持ち、ひまわりのように動き、燃え上がる何かを

求めて絶え間なく自らの意志を持っていた。それは夢
だった。それは征服だった。それは目標だった。次元
のない情熱のすべてだった。それは壮大だった。

窓の外に目をやると、水平線が見えた。丘の上に目をやると、前方が見えた。あなたの星が明るく輝いていた。目を上げると月が見えた。

サウダージとは、望むことであり、欲望することであり、愛することであり、考えることであり、感じることであり、あなたを恋しく思うことであり、あなたがここにいることを望むことであり、会うことを望むことであり、あなたを愛することであり、いつもあなたのことを考えることであり、あなたの存在を感じることである。

何かを創り出したいという気持ちはあるのですが、誰かに読んでもらえるような文章を創り出し、形にしていくことを想像するのは、とても漠然としています。何が何だかわからないのですが、理由はわかっているのですが、インスピレーションが湧かないのです。

冒険や不運を1日だけ、あるいは1年だけ語る日があったとしたら、1年後の今日、私は50日が1年365日、1週間7日間、1日24時間であることがわかる！

私は抽象化され、私はそこに行き、私はそこに来た。

心の働きに従って、私は想像し、そして何よりも、それは私が創り出したものであり、そして私は私の存在とともに生きなければならなかった。

何を知っている？ 物事を変容させるものがある、それはすでに何かであり、何かであったものは何かを引き起こす。それが変容し、本当にすでに何かであったものであった時、まあ、人生のものだ！

飛ぶ者の下には霧が立ちこめ、ただ息をするための空気があり、恐れることなく勝ちたいと願った。

ドアを閉め、窓を開け、楽園の下を大胆不敵に飛び回る。無意識のうちに判断を下す人々がいる、薄暗く無力なランプが灯り続ける緊張は高まり、困難な瞬間さえある。しかし、誰も、誰も、ただ一人だけが理解し、理解していることを知らなかった。情熱の鋭い痛み、に火をつけた香水が広がり、ノーと言う時だった。ただ、その時何かが存在し、何かが血管の中で動き、血液はポンプ作用のない心臓から時々遠くへ流れていった。

それは私のためでも、あなたのためでもない。私たちは愛し、また拒むからだ。何かが終わり、何かが生まれ、成長する.....すべてがある日存在し、一瞬にして消えてしまった.....それはこのようなものだった.....一日、また一瞬を生きたいからというだけでなく、起こったことすべてがそうだった。心を征服する一つの行為が想像の果実であるならば、それは何も、誰もノーと言わずにつながることである。それはいつもそうだった。決してそうしたくはなかったが、時にはイエスがノーに変わることもあった。ノーがノーであり、イエスであるのは、私がノーであり、イエスであるからだ。読むこと 広げること 書くこと 眠ること 歩きながら 走った 静止していた 自由で賢い思考の果実 動きに気を配っていた 歩いて歩いたのは、この世にいなくても愛しているからだ 迷信は信じない 人間とその発明を信じている イオンにしる、陽子にしる、光はエネルギーの中にあり、見るのではなく、ガイドなしで作り出し、それを手に入れる。

もし私たちが、瞬間瞬間のために生きているとしたら、それがどんな瞬間であれ

雄弁に、あるいは温かく、誰も愛が痛みのない愛を想像して傷つける痛みだとは言わないだろう、それが何であれ、それはあなたが想像できるよりも長い呼吸の輝きと熱意を必要とする、しかし何よりも、痛みから愛を守りたい、保護したい、それは感情から来る関係を作る、理屈抜きのお愛。

もし私が苦しんだとしたら、それは私が経験したことを見ず、理解しなかったからだ。自分を解き放ち、その美しさを見せよう どんな息苦しさどんな狂気 どんな恐怖 誰もが少しは持っている それは動く何かだった どうしてこうなったのか分からなかった 長い間苦しかった ささやきにどう向き合えばいいのか 今、笑うことはなかった なぜなら、誰かが見たからだ 一瞬たじろいだ 男を 誰も気づかなかった そこに置き去りにしたのは why was it silent i suffered from something i lived and suffered how i felt the night was cold i returned by the road with everything and with a nothing a no one had never been beyond but as someone i fell short if in your eyes i saw certainty i acted with clarity and had the dexterity of sadness now that for the uncertain you do not act,あなたは間違っていた、私は天井を見て、すべてが私には砂漠のように見えたああ、どのような痛みああ、どのような悲しみと不安のビジョンは、私が床に行く時間に栄光の私を見て、私は落ちたので、私は人類に存在する

すべてのものの謙虚さに下降した沈黙の不穏な声は、
何を言わないために幸せになる誰かの沈黙の不穏な私
は私のために失われた一日で目を覚ましたそれは喜び
ではなかったと言った

私を感じたこと、そして明日が良くなることを一日でして欲しかった。

孤独の暗闇の中で、手を差し伸べてほしい.....兄弟にノーと言わないでほしい.....心に触れることは無駄ではないからだ。

この石の上に座って、私はあなたのために書く。私が決して忘れられなかったことを。あなたの微笑みは、私が一人でいるときにいつも感じるものだった。

夢を見るときはいつも、目が覚めてから自分を見つめて、本当に想像したとおりなのか、考えたとおりなのか、それともただ夢の中を旅しただけなのかと自問する。

悲しく人間嫌いの夜の雰囲気、静かで無口、とても寡黙、しかし星が輝き、月が明るく輝いている、最も凶暴で非道な環境であっても、希望がある、信頼できる人がいる、私たちを励まし、引き上げてくれる存在、友人がいる、信じることなく無関心に私たちを見ている人、愛を持って私たちを見ていない人、私たちに苦痛を与える人、なぜか友人であることを信じていない人、自分のへそばかりを見ている人、彼もいつかその違いを感じるだろう、生まれた瞬間から、成長し、最

後には死ぬまで、人間のすることはすべて、誰にも予見できなかった。

それが人間であり、彼の存在なのだ。

あなたの視線には、ある輝きがあった。それは強烈で、愛するという大義があった。もう一度見ると、輝き続けていた。その視線は私を征服していた。それは、私の注意を惹きつける、きらめく強い星のように輝いていた。それは情熱の美しい感覚だった。私が望む場所が見えたら、同じ道と一緒に進んでほしい。この羊皮紙には、あなたは私の肩の友人であり、いつも一緒にいたい人であると書かれている。

私は理解していない、あるいはただ知らないだけなのかもしれない、彼女は秘密をしっかりと守ってくれるから、私は彼女をサイレントナイトと呼びたい。

全世界の囚人として生きるにはどうしたらいいのだろうか。不安を解消するために、一服の自由を得る。この牢獄の感覚は、緊張を高め、神経を瞬きさせ、他人に見られることなく、見よ、どんなしがらみが解かれるのだろうか。

文章を書くこと、そして私が平凡な存在であることを想像し、表現するものを持つこと、その感覚、そして心を通過するすべてを書く私を見て、私は喜びを持っていた。

この孤独な立場、個人的で運命のない立場、忘却へと突き進む見当識障害、感情や呼吸の完全な喪失、信じることへの欲望、これは人が生きるときに直面するものである、時間が過ぎる前に一言、いつかこの中毒がなくなることを願う。それは、前向きな姿勢の忍耐の努力の賜物であり、何か良いもの、あるいは特別なものである！ 静かな夜の夜明けの勝者であり、圧倒的な征服者である。

そして今日、どの世紀のどの日であれ、すべては物事を感じ方次第なのだから、私は、生きたことのないものを生き、聞いたことのないものに耳を傾け、行ったことのない場所にいることを幸福と感じる素質がある。さて、日常を微妙に非日常的なものに変えるために生きるために生まれ変わることは、無意識の中にすでに存在し、私たちに嘘をつかないものなのだ。イメージーションの感覚を飛び跳ねさせ、飛翔させる。

自分の行動で自分を判断しない人間の至高の自由、それは自由に生きることである。

ある日、私はスピードを出しすぎて転倒し、置き去りにされた。私は転倒の勇気と回復の自信を胸に再出発した。一人で戦うことは自由が必要であり、孤独の姉であることを知った。一人で走るときだけ、最初で最後になることができるのだ。これが戦う精神であったが、私たちは決して一人ではない。私たちの前には人生があり、これが生きるために走ることであり、最初で最後になることなのだ。サイクルを始めるとき、私たちが最後からスタートするのは自然なことだが、私たちが勝者となるポイントもある。これが人生であり、ある場所では最初で最後だが、このように決して止まることはない。人生というレースにおいて、私たちは常に勝ち、同時に負けている！

余暇に駆り立てられて、私は瞑想し、同等に考え、そして最終的に落ち着きのなさについてある行動をとった。人は一人で生きていないと不幸になる。

6t there... 6t there when you don't ask... 6t there when it's not.

必要なのは... あなたが私を必要とするとき そこにいること 私がそこにいなくても そこにいること あなたが私を感じないとき そこにいること あなたが私を呼ぶとき そこにいること あなたが私を思うとき そこにいること.....あなたが想像するとき 私はそこにいる #
#たとえそこにいたくなくても 私はそこにいる ##あなたが私を愛するとき 私はそこにいる ##あなたが存在するから 私はそこにいる ##あなたが私を夢見るから 私はそこにいる...私はそこにいると思う...

ある日、私はあなたを見て、あなたを見た場合、私はどのような興味深い女の子を言うだろう、あなたはあなたの目に何かを持っていた明るい陽気できらめく笑顔は、あなたが美しく、官能的なあなたが私を誘惑し、私は今まで私が魔法が好きだと感じただけのために望んでいたものだった誰のための女性でしたか？ それが私の日常だった。

ある日、私はただ存在するためにすべてのことを想像した、私は後で書くために何を言うかわからないが、それは異なっていた本当に怖かった存在し、何が起こるかわからないの夢は、私はここに存在し、その誰かが苦しんでいる沈黙の世界についての旅が終わった見ることがないであろうものを記述しようとした私は誰

も勇気の欠如のために他の人がやらないことをやっているだけで行うべきではないと思うが、行動しないが、見て、見て、喫煙を停止し、考えることができない誰かの福祉を無視する方法を知っている！私はタバコを消し、衝突は、残りの欲望の治療法として開始されます。

私は抜い清め、創造するために書いている。分後、書くこと、そして自分ではない何かを持つことの真実が始まる。私は自分に能力がないことを感じ、その一方で、より真実のもの、征服の戦士を感じる。タバコの火を消してから16分、再び火をつけたいという欲求が高まる。起こっていることを感じると、すべてが過ぎていく。

私は考えているから、待っていてほしい。弱さから勝利への衝動まで、すべては夕日のようにやってくる。私は欲望と永久に接触している。30分後の自分を思い浮かべ、時間を超越したいと感じる。秒単位で旅をし、分単位でロケットのように前進を祝う。自分が到達する前進がどのようなものかを考えながら、軽く感じる。後ずさりするのは、手に届くタバコがあるからだ。35分、私を取り消したい行為がここにある。

何も考えず、機械的で手続き的なやり方で行動していた。

事態を鎮火する過程で、このようなアクセスがあった。

私は一瞬の中に、創造の瞬間の中に、自分自身を置き換える。言葉、フレーズ、行動、そしてつながり。ラジオで計画が頓挫する可能性があることを聞き、私は反省し、北にいると感じる。もう45分したら、またタバコを吸おう！すべてのことが、しかしほとんどすべてのことが、私に考えさせる。

私が持っている30本で20年分の結果が出る1時間だ。

私たちは人生の66%を、33%が与えてくれる100%の

ことを考えて生きている。複雑な説明だった。

もし私が本当に熱望しているのなら、私は戦い、そのための方法を研究しなければならない。

もう「一本」タバコを吸うことはほとんどない。1時になって、私は何も無いルートをたどった。

論理的に考えれば、私はこの状況を煙に巻くことになる。私の本性は純粹でなければならない。

そして2時間03分が過ぎた。

なんとか浮上する、何かがうまくいく。私はまず微笑み、何かが生まれると思った。

一番簡単なのはあきらめることだったが、私は主張するつもりだった。私は力をつけ、勝ったということしか考えなかった。

何か ではない 自然ではない何か は 異常だった。 として 私は反省する、 一番いいのは寝たふりをすることだ。

意志は来るが、私は逃げない。光はなくても、エネルギーは失わない。

決して眩惑されることのない煌めく力を感じる。私は変わる、このことから私はすべてを変えることをためらわない。

私は行くし、行く理由もわかっている。

静かで平凡なタバコは、苛立ちよりもためらいを感じさせる。

いつかカモメがやってきたら、私は彼にあなたを連れ戻すように頼むだろう 私は何も望まなかったとき、私

は望まなかったものを持っていた 私は何も望まなかったとき、私はすべてを失った 私はこの情熱で説明を包んだ 私は巨大な愛を持っていて、いつも疾走していた 私はあなたを思うとき、私はここで失ったものを見た、あなたはそこに 私はあなたの心を揺さぶるかのように火山になりたかった この巨大な愛は、いつも勝利していた 私は感じたどこでも、私の世界から来る深い欲望 私はいつもあなたが欲しかった私たちを結びつけ、決して引き離すことのないすべての流れを通す電気よりも、あなたが笑ったときの幸せそうな表情がもっと強かった.....舗装がもはや意味をなさなくなった川の下
の橋を想像して、私は火山を見て走った。

愛されていない絵画に筆を走らせる.....その結果、あなたはキャンバスに描かれた芸術の一部となった。

☒

私は逃げて、逃げたけど、彼は私をつかんで引っ張り、私を連れて行った。

見ることもできない呪われた姿だが、それ自体が伝播していく。幻影体験の得体の知れない姿である。その人影はつぶやいた：あなたは顔のない男を恐れている！

はい--私は少し恐れながら答えた。私は光の前にしか存在しないのだから、恐れることはない。

私は光とエネルギーについて語ったことはあるが、顔も知らない男が官能的に現れ、その体躯に達することなく逃げ去ることについては語ったことがない。

影は光なしでは生きられない闇の存在だ。奇妙なことに、あなたは暗闇と静寂の中に隠れる影なのだ。しかし、あなたは光から現れ、顔のない黒い帽子をかぶる。私は空に昇り、あなたの視線の歪みと変成光で拡大する。空に向かって、私は他の誰よりも笑い、スルタンのような空気で、混乱の空気で笑い、黒い空のスピ

ードで反応し、結晶のような鋭い雨の雫に身を委ねる。しかし、顔のない男にとって、水は私の体を貫き、私自身のトレンチコートは浸らない。それは影でできているからだ。これらの想像上の人物は、闇から逃れ光を求める人々を静かな夜に追い払うために、私が再現したものである。

私は不幸の影の友。その姿のすべて

の悪は存在しないことだ。

行方不明の幻影だ。

生命を与える喜びとしての叫びは、曇った魂から現れる、

他人を守るという感覚と、恐ろしいほどの魂のざわめき。

上昇する者は常に下降するのではなく、虚偽を虚飾に変えるのだ。

あなたが本当に見ているのは上昇であり、崖から落ちることではない。

波の高み、緑が横たわり、青が薄れる場所。

赤は他者の主義主張に対する警告として現れる。

暗いもの、陰鬱なもの、軽薄なものは、悲鳴のような静かな叫びの絶望を研ぎ澄ますかのように、常に存在しているわけではない。

この言葉では、情熱を伴う超自然的な魔法との出会いを指している。

一文字、一文字、文学的な言葉の壁が築かれ、必然的な事実が浮かび上がる...そこでは、文章と断ち切れない満足の涙が流れ、その存在は対立するもので

はなく、まるで奇跡的な存在の中に存在する魔法そのものを拒絶する南極の氷の破れによって活性化され、長い間告知されてきたことを告げようとする欲望の燃え盛る炎に空っぽになるかのように浮かび上がる。彼は、創造の機械の安堵を書き、魂に翻訳する。セリフとセリフの間に、ある者が考え、別の者がコメントする。

めまい

始まり、崖っぷち、時間は儚いものではない。

スタートで出遅れた平行フォール、私はクールダウンする。つま先でバランスを取り、ジャンプし、飛び込む。自分をキャンセルせず、ジャンプしてめまいを想像する。すぐに心臓がビクツとし、何かを想像する。空中を滑空しながら、私は一瞬にしてすべての生命を見た。地面に叩きつけられるような自由落下.....道路に輝く濡れた舗装路を通り抜け、私は深い氷のような空気を吸う！濡れたアスファルトは、暗闇に輝く冷たい水を感じ、明るくきらめく空を思い起こさせる。それくらい、あの地面は強く、あの衝撃はこれから起こることを破壊する。時計は止まり、彼の思考の瞬間を不滅にした。風よりも速いスピードで、時計はピョンピョンと音を立てながら回り、上に、上に、前の瞬間に戻っていった。

他の人がどのように苦しんだかを感じることの誇りは、他の人が他の人の肌の中で見たことがないことを感じ、私はあなたが苦しむことがないことを願っています助け合いの精神は、玉石がある道に上昇し、プライドを高めるこれらの障害物である私の信念は、世界が最後まで戦うために来て、あなたを見守り、最終的に他の人と彼の世界を満たすために深く行くので、フェンシングの芸術の中でフェンシングを与えるために打

撃があり、すべてが剣の先から打撃の感覚を通過し、不本意ながら苦しみの戦い、勝者と敗者が倒れたとき、痛みを感じながらも立ち上がり、勝利する姿は、痛みに打ち勝つファイターであり、最後の演技の頂点に立つ自分を想像し、勝者と敗者の栄光を垣間見る。

その朝

それは軽薄で悲惨な夜明けだった。

もし人生が醜くならないように善良であることが可能なら、生きる意志を持ち、クモを終わりではなく、常に構築されている社会／網のサイクルの終わりともみなすことができる。

かろうじて火を消したタバコとトーストしたコーヒーの間にあるLuzes café この空間は風通しがよく、どこからでも人が訪れる場所だ。私は将来、この空間で絆を作るために自分自身を見るだろう。たとえそれが一瞬であっても、私はリラックスしたエネルギーを感じながら、絶え間ない創作、放浪、思考、執筆の日々のプロセスを維持しようと思う！ 私は、美しい行間に文章、フレーズ、詩、あるいは単純な考察を創作するために滴り落ちるインクが見える執筆の海に、さほど注意も焦りもなく飛び込む。緊張さえも存在する私の海には、多様な感情、感覚を感じる心に深く届くように、モリで文字を狩る意図がある。

私は力からエネルギーへのランタンに火を灯し、照らされた虚無は消え去り、満たされた感覚とともに、果てしない欲望が私の中に目覚める。光り輝く炎が、ゆっくりと、とても怠惰に過ぎていく午後を照らす。

濃密な香水を吐き出しているようで、強烈で伝染しやすい。その香りを吸い込むと喜びを感じ、同じ空気を吸わない毎日がどんなにいいことだろう。喜びのしるしであり、魅惑であるかのように甘やかしのしるしであり、時を超えた喜びである 賢く微笑むと、狡猾に嘘をつかない輝きが私を襲う。

ファド、ファド.....憧れを刻む運命.....砂漠のような遠い時代のない、しかしとても身近な存在.....あなたに会いたいという渴望.....あなたのものでありたいという欲望.....私が感じるすべてではなく、私が書くものを感じるのだ。

もし風があなたに言葉を運んでくれるなら、私は雨と一緒に、葉書にあなたに言いたいことを書くだらう。太陽とその光線の絵を描いて、あなたは私のエネルギーであり、雪の降る日でも私の太陽はいつもあなたのために輝いていると伝えるだらう。

考えること、反省すること、行動すること、行動しないことは、表現することではなく、感じることであり、表現することが難しいように、存在するだけで十分なこともある。

反省した後に感じるのは、そう、反応することだ。

思考を封印し、ただ存在することを意味するプレゼンスにとどまるために。

障害が障害になることはないだろう.....時には痛みを感じることもあるが、生きるために戦い、自分自身を成長させることが重要なのだ.....人生の戦いにおいて、私たちは常に成長し、学ぶ必要がある.....障害を克服することは、自己の最大化であり、克服することは最大の喜びである.....そして、自分自身を克服し、敗北から学ぶことで価値を得るという適切な価値を私たちに与えてくれる.....最後に勝つことは、生きることの本質なのだ。

海は渦を巻き、水は海を転がり、砂は一粒一粒、地面を転がる風となり、私は片手で海の雫を掴み、もう片手で海の砂を掴み、手の中に没入した広大な海の風景は、緩み、解放され、自らを広げ、すべてを手にした人の感覚を広げる。

私の言うことが真実というわけではないが、絶対的な嘘というわけではない!

喪失の炎のような痛み。私は何をしたのだろうか?

私は夢を見ていたわけではない。

私を奪い、引き裂き、壊し、墮落させ、あなたはいないと言うこのざわめきから私を救ってください！
私がいるところでは、私はもっと多くを望み、ただ存在し、呼吸することに耐えられない。

フロントに沿って歩くと、ここに私を許さないものがある。

前進する

なぜなら、私は自分がそうでない、あるいはそうだと思っているところを行ったり来たりしているからだ。

私は逃げ出したくなり、タバコを落とし、岩にぶつかって火を噴いた。

私の心は、再燃したくなるまで消えていく煙草のようなもの。私はもう、これ以上縛られるような緩んだ糸にはなりたくない。

私はあなたが私について言ったり言ったりするものになりたくない。

その盲目の結び目が、首を絞め、締め付け、破壊するのがわからないのか。その結び目は碎け散る。

すべてはヌルに帰結する。私は論理的なフォローアップなしに、ただ0でありたい。プラスにもマイナスにもなりたくないのに、あなたは私がしなければならない、起こらなければならないと主張する。

泣かせて。

なぜ泣くのか

？

わからないが、涙はいつも、なぜ落ちたり緩んだりするのかを知っている。私もまた、なぜ相手の過ちに落ち込むことがあるのか、なぜ手放さずにしがみついているのかを知っている。

泣きたい、手放したい。この苦い思いは、私を熱い寒さで震え上がらせるが、泣いて、笑って、感じる価値がある。涙は流さないが、いつも見張っていて、無関心の涙を顔に滴らせる。

私は考えていた。平凡で、自分が思っているような、パターン化された人間だ。

私が何を頼りにしているかはどうでもいい。あなたが私に与えてくれないものを見たいし、私が必要としているものはあなたではない。

私は私が欲しい。私はあなたがいつもそうであったように、私が思っていたように、あるいはそうでなかったときに、あなた自身がそうなるようにしたように、あなたが欲しい。

私は私だ。

どうしてこんな話を始めたのかわからないけど.....数本は当たると思うけど、的はおろか、矢も弓も持っていない。

狙って打ったのではない、パントすらしたくない、当たったのは自分自身だと感じている、矢は心臓に突き刺さっている、だから苦しい。孤独な心、活力を与えない一撃で傷ついた心、痛みが強すぎて汲み上げる意志がない。

私は自由ではない。完全に自由になることはないだろう。私は自由を愛しているけれど、彼が私に愛情を注いでくれているから、私は縛られていると感じている。

なぜ彼らは私を愛しているのか？

彼らは愛しているのだろうか。彼らは自由で誰かとくっついていたい。私は孤独を感じたい。

私は何も理解したくないし、何も考えたくない。

彼らが自由だと言う愛はいらない。ただ自分の中にあるものを手放したい。

苦悩、喪失感。彼は昔も今もいない。私

はあなたが去ったことを感じることなく

、その瞬間を迎えた。

私たちが何をしようとしているのかを教えてください。

何もしたくない、遠くには行きたくない、行かないところに行きたい。

私は何も持たずに去る。

泣かない、笑わない、考えない、見ない。

なんという悲劇だろう！

私は行くし、行かねばならない。

なぜ？ そう、なぜこうなのか、なぜこうなのかと問うが、すでに伝わってしまったことは考えたくない。

戦いたくないし、そうでなかった人のようになりたくない。

その声は嘆く者を苦しめる。待ち

なさい。

私は旅をし、辛抱強く行き来する。

私には何もないし、何もない。

これ以上いらないという存在に侵される。私はしたくない。

音楽が流れ、風が吹くとき、私はここにいたい。

悪魔にも天使にもなりたくないし、天国も地獄もいらない。すべてが存在する地球が欲しい。

出て行きたくないし、今いる場所に留まりたい。そこにあるものすべてが欲しいわけじゃない。ただ、そこで呼吸し、考えるためのスペースが必要なんだ。

自分の存在を想像し、創造する。

呼吸する空気が欲しい。私が吹く空気のように、私もゆるんでいたい。

見て、嗅いで、耳を傾け、あなたが聞こうとは思わなかったことも話した。

これだけ話したのに、何も、あるいはほとんど何もあなたに触れていない。これ以上誘惑するのは、あなたの関心を求めすぎることになる。私は生のあなたを見たい。

自分が生きている肉であることを実感するため、また、成長しにくく修復しにくい肌の引きつれに悩まされるため、私はときどき肌の角質を剥がしていたのをご存じだろう。

あなたのために、私は傷だらけの生きた肉体の中にいる。

何を表現したいのかわからない。でも、何かが私を苦しめるんだ。

心の底では、何でも少しは持っていたいし、何も持っていたくもない。

私は孤独であり、あなたは以前よりも孤独になってい

る。私は、それを読んだ後に、私の存在が何を伝えた
がっているのかがわかるようなことを書いていた。

簡単なことではないと思う。多くのことが語られない
だろうし、多くのことが理解されないだろう。

却下。

自分を貧しくするものを激しく拒絶したい。

些細なことが心に響くことはない。

ほんのひと目見ただけで、私たちの心には何が刻ま
れるのだろう。

我慢できない、見たくない、でも目で見たものを感じる。

心の目を決して開いてはならない。心の目が見えなくなり、苦しむかもしれないからだ。

私はここにいる。

私が見える？ 私を感じる？ どちらとも言えない私の何が見える？

フム、君が僕を忘れないように、僕はここに残ったんだ。

私は偽らない

私は書くつもりだし、流れに任せるつもりだ。

私が書きたいことは、間違いなく涙である。

悲しくて、寂しくて、濡れて、緩んで、涙をそのまま書いた。

あなたの泣き声、痛み、悲しみ、孤独、孤独であることの息苦しさを浄化させてください。

君の涙を舐めさせてくれ、君の感じる痛みを飲みたいんだ

一人で、一人で僕と一緒に、これが僕、僕

だけ！私ってなんだろう？

その感覚は、本当に感じられる痛みへと広がっていく。

それが自分自身だと感じるとは。自己について考えることは、外から来るものを超えることだ。

内側に向いた私は、自分が存在していることを知っている。

ルーズなページ、ルーズなシート、ルーズなセンテ
ンス、ルーズなページ、ルーズなシート、ルーズな
センテンス、すべてをルーズにしたい、何も残した
くない、自分自身を空っぽにしたい、それが私が進
化する唯一の方法だ。苦しみたくない。

また別の日の朝、朝の新鮮な空気も騒々しい。私は
夜が欲しい、静かな夜が、暗闇の中であなたがもた
らす光を見ることができる。

静寂と暗闇をひとつにしよう

ブラックアウトに光を。詩、歌、おまじない、魔法
、詩、フレーズ。

私は闇夜の中であなたの光になりたい。

深い潮の奥に身を任せると、サイレンのハーブが大音
量で鳴り響く。あなたに何を書くかは言わずに、私は
ここに留まってあなたを見ていたい。

あなたを忘れないた

めに。何もいらな

！私は何も望まなか

った、

この言葉の目的は無効だ。私はあなたに読んでほしくないし、いつかあなたに伝えたいことももう書きたくない。

でも、今はただ、何も無いところが少し欲しかった。

私の話を理解してもらえるかどうかはわからない。

私が理解してほしいのは、あなたは私のために数えられ、そう、あなたは私のために数えられ、そこから私を頼りにできるということだ。でも、誰にも言わない。
。

私は死が私を欺くのを待つ。死？

死は存在しない！

そしてこれは常に存在する。私は死を恐れているのではなく、あなたを失うことを恐れているのです」。

何が痛いというわけではないが、あることとないことの痛みが、存在の違いなのだ。

私は何も望まない。なぜなら私はほとんど何も望まないからだ。

もういい！

僕は僕でいいのだろうか？ そう、私であり、それ以外の何者でもない。

それは鼓動し、何度も何度も絶え間なく鼓動し、前例のない異常や傷の流れとともに鼓動し、ある日それは開き、二度と開くことはなかった。それは私のものであり、常に私のものであったが、最後にはあなたのものであった！ という深い悲しみ。

己を知らず、気を配り、己の内面とともに生きることが学び、見よ、その深淵は限りなく小さい。持つこと、所属することは、あきらめるかのように常に消えゆ

くものだ。

常にユートピア的であり、見よ、その存在は生まれ、生き、学び、そして本当に気づいたときには、すべてを知り、自らの存在を知ることから遠く離れていたのだ。

私の世界のすべてが変わる！ どうして？

なぜ私は、自分の世界からやってくるほとんどすべてのものの、しかし私の間抜けな世界からやってくるほとんどすべてのものを、喜んで変え、直視しているのだろうか？ 知性こそが、私に正しい行動をとるように言うのだ！ 想像できますか？ 成層圏の次元では、拡張の限界はなく、幻惑の言葉の真の幻惑の長石のような外観を持つ幻想そのもののレベルで常に時を超えて利用できない魔法の幻惑に入る、どんな調和にも打ち勝つ単純な苦悩の親密な対立の発生源。

謎めいた、深遠で繊細なこのエネルギーは、文字プラス文字、あるいは文字が多すぎて言葉が足りないという、拘束力のないエネルギーである。

ここには、沈殿しつつあるメンヒルがあり、短時間にさまざまなことが書かれている。

無駄に、物事はあなたに来るでしょう多くはあなたを残すものであり、他の人は無価値であろう。最も

偉大な勇敢な戦闘機のためになることを伝えるために、しかし、私はあなたに "使用 "少数の価値があるだろうが、最小の内部の人々はあなただけが得ることができる価値を参照してください。生きること、成長すること、学ぶこと、そしてその背景にはいつもユートピア的な小さな知識がある。

文章を書くということは、通常の知識を知る者と科学的知識を知る者とを一体化させるためのものであり、両者は読書という深遠な知恵によってのみ説明できるのだということを、少しずつ学ぶ日なのだ。

+

終えたいところから始めるよ。

煙が私の部屋の中に広がる。私の内側を通り抜けて、こちらも犯される。私はあなたたちと決別したい。

間に合うだろうか？

強さ、強さ、強さが私を悩ませ、恐れずに前へ進めと言う！

私の時代より早く終わるよ。

しかし、もしあなたがこのページを見ていて、私の小さな物語に興味を持ったのなら、ここに私の小さな物語を残しておこう。

このページで私が皆さんにお話しすることは、外界に依存することなく、私の中に宿る真の存在を見つけるためのものです。

どうしてそんなことが可能なのかは、これから私の話をどう説明するかでわかるだろう。

今のところ、私は前進していない。むしろ、前進するために後退している。煙はこの空間を覆い続けている。

この物語の始まりは、この物語の終わりである。

私が伝えたいのは、すべてとの闘いだ。内なる自己の最大化として、すべてを手に入れ、何も望まなかったと最後まで言えるかどうか。

あなたは今ここにいる。わずかな時間で、私はあなたが読み通したページ数に匹敵する葉巻を手に入れた。

戦いに集中しよう。

時、分、秒を吹け。もう終わりだ！私は中断したと

ころから始める

私は準備ができている。この煙は窓を通り抜け、空中に放出される。私は空中からしか存在しないこの煙になりたい。

ただ空気を吸いたい

私はここで何を伝えようとしているのか、浮かべて想像してみたい。私はやりたくないことをする。同じ失敗を何度も繰り返すことから始める。

戦いは、まだ終わっていない。

私が伝えたいのは、感情、状況、葛藤だ。

そしてその闘いは、自分という存在を克服することだ。私はもう一人の自分になりたい。

私の良心は私に警告を発し、こう告げる。

ここで私は立ち止まっているが、自分が追い求める動きと闘っている。

私のヴォルトよ、私の自己のもとに来なさい。自分自身を解放し、自分自身を拡大し、私を通してあなたのようにならせてください。

ここから、私が何になるかが始まる。何を疑い、退くことなく前進し、私を追い求める姿がここにある。

生き、感じ、そしてまた生まれ変わる。デマゴギーや幻想を排し、目に見えないものを生きる。

そうしてこそ、進歩し、立ち上がり、言う

ことができるからだ。私は私でありたい。

今までの自分、そしてこれからの自分の姿。

私は私の想像通りになる。私を追いかけてくる者には、どうぞ行ってくださいと言おう。

私と向き合う e 私 自分を解放する に
よって ついにまだ は まだ始まっていない

思ったことすべて。あなたにつきまとい、最後にはあなた
の友となるこの存在にご用心。

私はもうこの瞬間を後悔していない。苦しみの終わりが
来て、彼は私に触れ、ささやいた。

これが、ここで報告する原則の終わりである。

もういい、私のところに来て、勝利まで私を取り込んで
くれ。

汝は我になる。私を連れて行きなさい！ あな

たは私の最後の香りとなる。そう、あなたは

去るのだ。

いいえ 私 自分を見せる 悲しい で a あ
なたの の旅立ちを悲しんでいる。 実は 私は
あなたの出発を楽しみにしています。

来たように行き、来たように去る。私はあなたを必

要としていないが、あなたは不運の極みだ。あなたの存在は侮辱だ。

あなたにとって、私は勝ったことがなく、負けたことがあるだけだとわかっている。

あなたはタバコの煙と同じで、病気の友だ。

行って、行って、行って、私が到着したらそこにはいないから。言ったように、私はあなたの香りを発している。私は別の香りと香水を得る。

おそらく、あなたは知らないし、自分が何を挑発したのかも念頭にないのだろう。

私が覚えている限り、私はあなたを数年前から知っている。そして今、ここに

これからもよろしく。

しかし、それ以下の悪事には殊勝である。

あなたは対象であり、私は私たちの絆を作るが、やや弱い生活条件のために、非現実的で幻想的な喜びを与える。私はあえて窮乏を選ぶ。私を養うもののために。

フレッシュで、穏やかで、暖かく、調和の取れた代償となるだろう。

天候のように常に北の方角を向いて走る風の自然。私たちに吹き付ける気流は、私たちに直面する嵐となり、空気の煙そのものほど自然なものはない。

その中で私たちは、外的にも内的にも、鎖に縛られない調和を見出す。

開花し、成長し、解放の根源を沈殿させる。私たちの出会いを疑わないという意志は、理性を揺るがす砂漠の砂の時代のバラそのものである。平凡な人間のイメージを、私たちを隔てる親密な関係の風変わりさへと解放する。私は自然で有機的、あなたは人工的で合成的。私が中和する行為なしに、あなたは私を幸せにする。

あなたが私と話すためにドアを開けておくわ。でも、あなたがすぐに出て行けるように、開けておくわ。ヴルト、あなたは自分が広がっていることに気づいているのか。あなたはほとんど重要な存在ではない。

そういうバカな時期は誰にでもある。

しかし、もし大人として、自分の中の子供を解放するように言われるのであれば、私はまた、悪いことをした。

段階。私は忍耐強い静けさに戻る。

行っていいよ、ドアはロックしておくから。あなたが来た理由は知っている。

奈落の底は広く、あなたを手放す思いは広い。

逃げろ、私なしで、自分を囲い込んで爆発しろ。最初の日から、君の言葉は僕のフレーズだった。でも、次に君が挨拶するとき、僕はここにいるから当てにしないでくれ。でも、きっと君の旅は、自分自身を侵されたいと願う人たちにとって、辛くとも調和のとれた現実への帰還となるだろう。僕たちは何を持っているのだろう.....僕たちは何を探しているのだろう？ あなたからのたった一つの言葉、それはさようなら。

そして、あなたは遠くへ去って行った...

それが最後だった...憧れが壊れようとしていた。涙が落ち、その叫びを消した。

私を締め付けるロープは、私を窒息させるロープとは違う。私の喉の結び目は、糸で留められている。

心を締め付け、良心を窒息させる。

あなたが提供するのとは、若返りの緩やかな死であり、このように歩き、私たちがしてきたように話すことだ

。それは、シュルシュルと音を立てて生きる者たちを一撃で切り裂く鋭い痛みを決して消し去ることはない。

記憶の高みで、引き裂かれるような幻想的な一撃。それは、存在することと存在しないことの間にある、あなたの二律背反的な存在だった。写真的な瞬間で旅する人生は、すべてを保存し、一瞬にしてそれ自体を消し去る。なぜなら、あなたは私の外の私の中に生きているからだ。運命を消し去り、分数を生きる。

その時代を超越した感覚は、次の瞬間にも広がる。その場を離れずに飛んでいるように。

この一瞬にして　そのでなく　止まらないなぜ
なら　息をするe　決して

止まれば呼吸が整う。

生きることは、息をする衝動と同じくらい強いものだ。しかし、ただ呼吸することは生きることではない。

生きることをやめたとき、呼吸は止まらなかった。

それゆえ、私たちにもたらされるのは無力なイメージなのだ。

限界も結果もなく、次のステージへ。あらゆる瞬間に別の存在であることから生まれるものが、私たちを本当の姿から遠ざける。断崖絶壁の幻想は、私たちが生きている間の自責の念であり、私たちを動かすものは、私たちを取り囲み、絶えず私たちの注意をそらすだけの自然である。自然はすべてのフレームをランダムに映し出し、人間のあらゆる瞬間の動きよりも超然と優れているため、その瞬間の吸収はすべて単なる幻想にすぎないということだ。

自己のヴルトの周りに生じるすべてのものは、内部を拡大する外部であるが、しかし、気晴らしの感覚だけを捕捉することは、私たち母なる自然を動かすより大きな存在である。どんな瞬間でも、高潔で矛盾に満ちたものが侵入してきたら、それは心の瞬間に同化される。

茫漠とした遠い想いから、あなたが姿を現してくれたことを嬉しく思う。話したいのは...あなたが決めて、あなたはいつも操縦する。役割を逆転させると、黙ることになる。

言葉の飛翔は演技。あなたを無視し、連れ去る方法。

あなたそこに は 飛んでいる 飛んでいる 影
風の 風の影を飛んでいる。 なぜなら あ
あなたは

あなたは隠れていて、見たいときに現れる。

見えないのか？

忙しくなる の 別の あなたは 別の友 その
ない 〇 あなたの単純な不幸。

すべてが蒸発する。

このように、10まで数えて、未来の窓の一瞬の垣間見る瞬間が、どれだけ開いて、広がる最後の煙だけを見ることになるのか、そして未来のクリックがどれだけ大きく広大になるのかに気づいたのだ。

著作権 © 2009